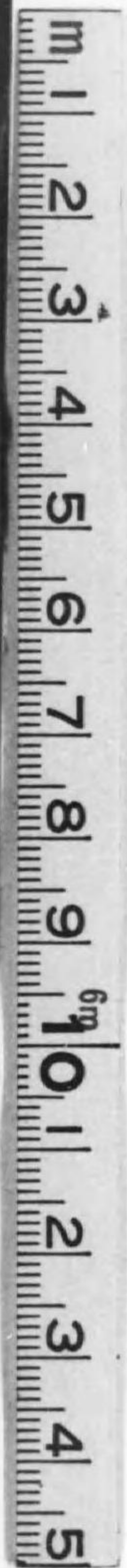


910. 8-Ko4537  
1200500754859



始





362

# 俳句俳文評釋

京都醫科大學教授 穎原退藏著

【國文學講座全二十八冊ノ内】



910.8  
K0453  
(23)



京都醫科大學教授 野原退藏著

俳句  
俳文評釋

全

(國文學)  
講座 23

株式會社 平凡社內

受驗講座刊行會





俳句俳文評釋

目次

一、緒言

..... 一

二、貞門時代

貞德..... 六

重頼..... 一〇

親重..... 一二

貞室..... 一四

季吟..... 一六

三、檀林時代

宗因..... 一九

西鶴..... 二九

高政..... 三四

惟中..... 三五

60112



# 俳句俳文評釋

松意	三七
常矩	三七
四、蕉風の先驅	
來山	四一
言水	四八
才磨	五四
素堂	五六
鬼貫	六一
五、蕉風時代	
芭蕉	六九
芭蕉傳記參考書	九三
其角	一四七
嵐雪	一六四
去來	一七〇
丈草	一七七
許六	一八五
凡兆	一九三





緒言

俳諧はもと連歌から出たもので、實は俳諧の連歌といふべきを、略稱して俳諧とだけ言つたのである。一體連歌はその起源に溯ると、古く日本武尊が甲斐の酒折宮で、火燒翁と唱和されたのがはじめだといふ事になつてゐるが、實際一つの獨立した文學と認められるまでに發達したのは、鎌倉時代以後の事である。尤も平安朝時代にも、すでに金葉集などには、連歌の部目まで設けられて、かなり盛んに行はれたものではあるが、それが多く一時の餘興にすぎなかつたのであつた。例へばかの和泉式部が下鴨の社に詣でた時、足を草鞋わらじに食はれて紙をまいて居たので、神主忠頼が  
ちはやぶるかみ(神、紙)をば足にまく物か  
といふと、式部は之に應じて

これをぞしものやしろとはいふ

と下の句をついだり、頼經・公資の二人が

桃園の桃のはなこそ咲きにけれ



梅津のうめは散りやしぬらむ

と唱和したやうな類で、いはゞ一種の滑稽問答のやうなものが多かつた。随つて大概かうした一首の和歌を二人でよむといつたやうな形のもの、即ち短連歌ばかりが行はれてゐた。勿論眞面目な文學とは目されなかつたので、長い間何の進歩も見ず、又作品も別段後世に傳へようともされなかつた。ところが後鳥羽天皇の頃から漢詩の聯句等の影響をうけたものであらう、この連歌を二句だけでなく、三句以上數十句に亘つて長くつゞける事が起つて來た。さうしてやがて五十句百句とつゞける形さへ出來たのである。定家・家隆などといふやうな、當時の歌壇の名匠たちも、好んで連歌を弄んだといふ。かくてこの所謂長連歌が次第に盛んになつて、和歌と對等若しくはそれ以上の地位さへ占めるやうになつて來ると、いろ／＼六かしい法則なども定められ、且つ本來滑稽を主としてゐた性質のものが、轉じて全く眞面目なものとなつてしまつた。かうなると今度は却つてその繁瑣な法式を脱し、自由な滑稽の境に遊ぼうとして、こゝに俳諧調の連歌が一方に起つて來たのである。俳諧とは即ち滑稽諧謔の義なのである。

かうした由來をもつて生れた新文藝俳諧は、まづ宗鑑・守武二人の先驅者によつて、その境地を開拓すべき緒が作られた。宗鑑は繁雜な連歌の拘束を全く無視して、奔放自由な詩境に遊ぼうとした。さうして俳諧の集として最も初めのものである「犬筑波集」を撰んだ。それはさきに二條良基と救濟法師とが撰んだ連歌の最初の撰集たる「菟玖波集」に對して命名したので、内容は

霞のころも裾は濡れけり

佐保姫の春立ちながら尿しをして

しうとのための若菜なりけり

澤水につかりて洗ふ縁がはぎ。

吹けかし風の吹かであれかし

花見にと急ぐを舟に帆をあげて。

あまり烟の立つぞ悲しき

高き屋に登りて見れば焼けまはり。

きりたくもありきりたくもなし

盗人をとらへて見れば我子なり。

さやかなる月を隠せる花の枝

こゝろよきの矢の少し長きをば。

といつたやうな前句と附句つひだけの面白い作を集めてあつて、その外

苦く々しいつまで嵐ふきの臺

花よりも團子と誰がいはつゝじ

佛壇の本尊かけたか時鳥



## 風寒し破れ障子の神無月

のやうな四季の發句——發句といふのは連歌の一番最初の五七五の句をいふので、それが後には獨立して、それだけで一つの文學と認められるやうになつた。明治以後、長くつゞける俳諧が行はれなくなつてからは、専らこの發句のみを作るやうになり、名稱も多く俳句と呼ばれて居る。——を少し收めてある。これで見ると、當時の俳諧は平安朝頃の連歌と同じく、専ら二句のつゞきの面白いのが喜ばれて、長く五十句百句とつゞける事はあまりなかつたらしい。ところが守武は、天文九年十月千句の獨吟（一人で五十句、百句など長くつゞけてよむのをいふ。）を興行して、所謂「守武千句」の作を残した。そこで俳諧にも多少の法格が認められ、新文藝の根柢は段々出來上つたわけである。しかし宗鑑や守武は、この新興文學の先達であつたといふ點で奪むべきで、その作品は文學上決してすぐれたものではない。かの「犬筑波集」中の作でも分る通り——但し此等の作全部が宗鑑の作ではない。他の人の作も混じて居る。——多くは言語の遊戲に墮して、未だ眞の滑稽味にふれてない。且つ思想にも猥雜に過ぎるものが多くて、趣味の野卑な缺點を免れない。宗鑑の

元朝の見るものにせむ富士の山

手をついて歌申上る蛙かな

の如きは、やゝ取るべきであるが、前掲の例へば「苦々し」の句にても、いつまでも寒いのが苦々しいのを、露の臺の苦いのに引かけ、又風吹きと露との言掛けで仕立てたまでの句である。

まん丸に出づれど長き春日哉

の如きは全く理智の遊戲に過ぎない。守武は宗鑑に比して、やゝ上品で

元朝や神代の事も思はるゝ

落花枝にかへると見れば胡蝶哉

青柳の眉かく岸の額つらかな

勢子のもの來べき宵なり泊り狩

などいづれも温雅な調である。しかしこゝにも「落花枝に」の如き幼い理智があり、青柳の句が眉と額の縁語にすぎり、泊り狩の句が、衣通姫の「わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞かねてしるしも」の歌をふまへて居たりするなど、到底文學的に高く評價すべき點を見出し得ない。しかし、かゝる技巧的の滑稽が、要するに當時の俳諧師のねらつた點なのであるから、その立場の低かつたのは遺憾であるが、之を以て宗鑑・守武の二人のみを責める事は出來ない。寧ろ彼等はさういふ意味の滑稽文學に最も長じてゐた爲にこそ、名高くなつたのである。のみならずこの言語の遊戲的たる特色は、爾來芭蕉が出て俳諧に眞の文學的生命を與へるやうになるまでは、實に俳諧全體の基調を成してゐたのである。だから芭蕉以前の俳諧に對しては、まづこの點は十分心得て居なければならぬ。宗鑑は支那氏、近江の人、範重と稱して足利義尙に仕へたが、後攝津尼ヶ崎に閑居し、又山崎に移り住み、晩年は讚岐觀音寺に一夜庵を結んで幽栖した。天文廿二年（一説には十二年）十月二日八十九歳で歿した。守武は荒木田氏、伊勢内宮の



神官である。宗祇・宗長等に連歌を學び、俳諧をよくした。天文十八年八月八日歿、年七十七歳。

室町時代にかうして萌芽を出した新文學俳諧は、江戸時代に入つて、先づ松永貞徳を中心として非常な隆盛を來した。しかしそれはたゞ流行が盛んであつたといふだけで、眞に文學的に價値あるものを生んだといふのではない。ついで西山宗因によつて壇林の新風が叫ばれた。そこには言語の洒落を離れた、一味の清新さと潑刺さとが認められたが、なほ彼岸には達し得なかつた。松尾芭蕉の出現をまつて、始めて眞に價値あり生命ある俳諧文學は生れたのである。今本講に於ては貞徳以下の作者を中心として、その代表的作品を擧げ、作者の傳記・句風等を説き、又句の評釋を試み、以て大體江戸時代に於ける俳諧變遷のあとを辿つて見ようと思ふ。なほ最後に俳文の主な作品と、連句の大體とを講説して本講を終る豫定である。

## 二、貞 門 時 代

### 貞 徳

貞徳は松永氏、歌を細川幽齋に、連歌を里村紹巴に學んでいづれもその蘊奥を極めた。しかし自分は俳諧の鼓吹に つとめて、油糟・淀川・御傘等の書を著して、俳諧の式目の基礎を定めた。「油糟」は宗鑑の「犬筑波」の前句を假りて、之に新しく附句を試みたもの、「淀川」は「犬筑波」の附句について批評したもので、一は彼が創作上の範を示し、一は創作上の心得を説いたものと見なされる。「御傘」は俳諧の指合去嫌などいふ法則を、細か

に記したもので、大體連歌の法式に依據し、それをいくらか簡單にした程度のものである。貞徳の深い學識と圓満な人格とは衆望を一身に集め、隨つて此等の書は俳諧に志す者の金科玉條として尊ばれた。だから貞徳は俳諧の形式的基礎を確立した點に於て、十分その功績を認めらるべきである。しかし彼は常に俳諧を和歌や連歌より一段低いものと考へて、俳諧は要するに連歌に入るまでの門だといふ考を捨去る事が出来なかつた。當時の時勢から考へると無理もないが、とに角さうした態度からは、勿論俳諧に對する十分の眞劍さは望まれない。且つ彼は俳諧を單に俳言をもつて居るか否かといふ點に於いて、連歌と區別する見解をとつた。俳言とは和歌や連歌によまれない漢語や俗語のことである。即ち句中に俳言があればそれは俳諧であり、俳言のないものは連歌だといふのである。結局彼は全く用語といふ形式的方面に於て、俳諧の特色を保たせようとしたのであつた。その本質的根柢の淺いのは言ふをまたない。この用語に特色を置いた結果、言語の遊戲的技巧を以て、俳諧の本體とするやうな傾向は益々助長され、折角形式的の基礎は定つたけれども、内容は頗る貧弱なものであつた。果ては趣向までも千篇一律となり、遂にはいつの間にか世人に倦かれて、壇林の新風が起るやうになつたのである。で貞徳の功績は要するに俳諧式目を制定統一した點にあり、又彼の廣い人望が、和歌・古典研究・狂歌等の各方面と共に、俳諧に於ても多くの門人を出し俳諧文學を一般に普及した點にある。彼は逍遊軒・延陀丸・長頭丸等の別號があり、晩年は失明して明心居士と呼んだ。承應二年十一月十五日八十三歳で歿した。彼の句集は特に編纂されたものはない。



鳳凰も出てよのどけきとりの年

支那では聖代には麒麟や鳳凰が出るといふ。丁度今年は酉の年で、しかも御代泰平である。鳳凰も出てよいぢやないかといふのである。酉の年だから鳳凰をもち出したのが趣向である。貞門の新年の句には、干支によつて此種の趣向をこらしたものが頗る多い。例へば

四國より來る春なれや申の年（猿は四國に多く産する）

霞さへまだらに立つや寅の年（虎の毛の斑紋に因む）

みづのとの酉を先づ酌むことし哉（三水に酉は酒である。まづ屠蘇を飲むのを干支に因ませた洒落の如き類である。）

花よりも團子やありて歸る雁

雁は春になると花を見捨てて北へ歸つて行く。それで昔の歌人も「春霞立つを見すて、行く雁は花なき里に住みやならへる」とよんだ。この古今集の歌を俗に碎いたやうな趣向である。諺に「花より團子」といふが、花を見すて、行く雁は、多分向ふに花にまさる團子があるからだらうといふ意。貞門の句にはこのやうに、俚諺をとつて一句の趣向を立てたものが頗る多い。だから研究の立場はちがふが、俚諺研究者はぜひ貞門の俳書は一讀せねばならぬ。それほど貞門の句と俚諺との交渉は深いのである。

しをるゝは何か杏子の花の色

何か案ずると杏子と言ひかけたまでの句。しかもそこが此句の最も主眼點であることを忘れてはならない。この言掛と縁語とは、いふまでもなく當時の俳諧には最も喜ばれた趣向で、貞門の俳諧の十中七八は此種の洒落であると言つてもよゝ。

子をまうけたる人に

ねぶらせて養ひたてよ花の雨

子供の誕生を祝つてやつた句である。花の雨を鈴にいひかけて、そこでねぶるといふ縁語をもつて來たのが此句の手柄。句意は雨が花を養ひ立てる如く、鈴を砥らせてその子を養ひ立てよといふのである。

七夕のなかうどなれや宵の月

「仲人は背の口」といふ諺を用ひた趣向。この諺は媒酌人は愈々三々九度の盃がすめば、もうこれから用がない。却つて邪魔にされるものだから背の口で開いたがよいといふ意である。で七夕は牽牛織女の二星が、年に一度の逢瀬を樂しむ夜だから、七日の月は背のうちですぐ引込むといふ意である。今は中學生でもそれだけの解釋をきくと、「何だつまらない。妙にこじつけたものだ」と一笑に附することであらう。しかし貞徳の當時では、この句などこそ妙作として喜ばれたにちがひない。その喜ばれた味は、やつぱり貞門の句をよむものは、十分知らねばならぬ所である。

皆人の晝寢の種や秋の月

秋の夜は月見のために、終夜皆人々が起きて居るので、晝は晝寢をしなければ睡眠不足を補へない。結局秋の月は



皆の人の畫癡の種——原因——だといふのである。これも幼稚な理窟をひねつた滑稽に過ぎないが、少くとも言語の技巧のみに終つてゐない點は、いくらか文學としての取柄は多からう。しかも此種の全體の意味から齎される滑稽、——それも此程度の幼稚さでさへ、實は貞門の句には甚だ少いのである。

## 冬籠虫けらまでも穴かしこ

虫けらまで穴に冬籠するといふのと、あなかしこくと慎しんで引籠つてゐるのとをかけた句。

## 重 頼

松江氏、維舟と號した。貞門の高足として次の立圃と並び稱せられたが、撰集の事などから二人は確執を生じ、遂に師貞徳から疎外されるやうになつた。著書は甚だ多く、寛永十年に撰んだ「犬子集」は貞門の俳書として實に最初の出版であつた。又「毛吹草」は俳諧の作法書として、立圃の「花花草」と共に、汎く行はれた。彼は貞徳を離れてから、寧ろ自由な句風にうつり、談林新調の魁をなした觀がある。少くとも彼は貞門中最も異色ある作家といふべきである。鬼貫の如きも彼の門から出た。彼はまた文章をもよくし、その輕妙な點は西鶴などにも影響を及ぼしたらしい。延寶八年六月廿九日、七十四歳で歿した。句は自撰の「藤枝集」に大分まとめられてゐる。

雨ふれど花の遅かりければ

## 咲きやらで雨や面目なしの花

春の雨は花を養ひ立てる父母であるといふのに、いくらその雨が降つても梨の花は咲かない。雨も面目無からうといふのである。勿論面目無しと梨との言掛が眼目。

## 置く露はゑひもせずしていろは哉

色葉は紅葉のことである。句意は紅葉に置いた白露は、酒に酔ひもしないのに赤く色づいてゐるといふので、いろはにゑひもせずといふ伊呂波歌の文句を用ひたのが趣向である。もとより全く言葉の洒落のみで成立つた句。

## 順禮の棒ばかりゆく夏野哉

夏草が人のせいより高く茂つた野中を、巡禮が通つて行く。人の姿はすっかり隠れて、手についた長い杖のさきだけが見える。それで遠くから見ると、丁度その棒だけが歩いてゆくやうだ。「棒ばかり行く」といふ言ひあらはし方が滑稽なのである。しかもそこには、これまでの句のやうに言語の理智的技巧を全く見ない。もとより幼稚な思ひつきにはちがひないが、少くとも貞門の俳諧中で、かうした比較的清新な滑稽をよんだのは、たしかに重頼が異色に富んだ作家であつたことを思はせる。

## 秋やけさ一足に知る拭ひ縁



拭きたての縁を一足ふむと、何となく冷たさが足の裏に感じられる。その冷たさの感じて今朝立秋だといふことが知られるといふのである。縁の冷たさに立秋を感じるといふのは、もう滑稽諧謔の戯れではない。自然の變遷を鋭く感ずる豊かな詩人の感受性のあらはれである。「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」と歌つた古人の心と相通するものがある。只「一足に知る」と言つた所は、やはり興じた心もちがあつて、そこにまだ當時の俳奥から脱し切れぬ點が見られる。

### 阿蘭陀の文字か横とぶ天津雁

此句は比較的後年の作で、大分新らしがつた試みであらう。しかし實は雁は雁書雁書の故事があり、又その連り飛ぶさまを一行の文字を喩へられたりするので、それを横書きのオランダ文字に見立てたまでの作である。着想はなる程當時にあつては奇警とされたらうが、要するに一寸人を驚かすといふに止まる。

### 親重

野々口氏、立圃ツツボと號した。連歌を兼與に學び、後貞徳に従つて俳諧を専らにした。重頼との確執から師門を離れ自ら一流を立て、當時俳壇の重鎮であつた。尤も晩年は重頼との間も和らぎ、寛文九年九月三十日七十五歳で歿した。著書は重頼の「犬子集」に拮抗して「發句帳」を撰んだのをはじめ、その數が頗る多く、中にも「花花草草」は御傘や毛吹草と共に、當時俳諧の作法書として重んぜられた。句風は一體におとなしく大した特色を見ない。句

集に「空磔（俳諧文庫中に收められてある）がある。彼はまた文章をも善くし、文集「六日の菖蒲」がある。畫にも巧みであつた。

### 源氏ならで上下に祝ふ若菜哉

源氏物語の中で若菜の巻だけは上下二卷に分れてゐる。それで正月に貴賤上下とも若菜を祝ふのを、これに引きかけた作意で、貞門常套の手段といふべきである。

### 天も花に酔へるか雲の亂れ足

和漢朗詠集の句「天醉于花、桃李之盛也」を用ひて、雲の亂れを酒に酔つた千鳥足かと言つたのである。

### 綻ぶや尻も結ばぬ糸櫻

「尻も結ばぬ糸」といふ諺によつた句。縫つた糸の尻を結ばねばやがて綻びるといふのを、糸櫻が咲き初める意にかけ、更に糸を糸櫻にいひかけたので、全く言掛と縁語だけで作り上げた句である。

### 庭にさへさぞな落葉は東山

狭い庭先にでさへこれほどの落葉だから、東山の木立深いあたりの落葉はさぞ堆高いことであらうといふ意。貞門の句としては一寸毛色のちがつた作である。しかし理窟をおしつめたやうな所があつて詩趣に乏しい。言語の技巧を弄して居ない點を多とすべきだけであらう。



貞室

安原氏、名は正章。貞徳の門にあつて最もその信頼を受け、師の歿後はその正統をついで花の本二世と稱した。延寶二年二月十八日歿、年六十四。著書の中では「玉海集」が最も名高い。

歌軍文武二道の蛙かな

蛙は古今集の序文に「花に鳴く鶯水に住む蛙」といはれて、歌道にもほまれが高い。それから蛙合戦といつて軍の方でも名高い。即ち文武二道を兼ねてゐるとほめたので、結局理智を弄した滑稽。

これはく〜とばかり花の吉野山

此句はもと寛文九年刊行の「一本草」といふ俳書に出てゐるが、芭蕉七部集中にもとられ、ひろく人口に膾炙してゐる。花盛の吉野山の美景に對しては、只もうこれはく〜と呆れるばかりで、何と形容稱讚の辭もないといふので、句意は極めて明瞭である。その俗耳に入り易い點が、この句を名高くさせた原因であらう。芭蕉もほめた句だといふが、それは恐らくなまじつかな句など吐くより、只もうその美景に恍惚と魅了されたがよいといふ心境に同感したのであらう。句そのものに不朽の價值ある名吟とは思はれない。

涼しさのかたまりなれや夜半の月

夏の夜半の月は涼しさの凝り固つたものであらうとの意。やはり貞門の句境を出でぬが、言葉の技巧がないだけ、多少の詩趣を感じる。

いさのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥

これも前記の「一本草」に出てゐて、「京にて睦じかりつる友の武藏の國にとし經て住みけるが、角田川一見せんとさそひければまかりて」といふ詞書がついてゐる。この句はこれだけでも解せられぬ事はないが、この詞書によつて一層句意を明かにすることが出来る。都鳥は業平が「名にし負はゞいさことはん」とよんだ伊勢物語の話で名高く、隅田川に住んでゐる嘴と脚の赤い鳥だといふ。その都鳥に向つてさあこゝも宜からうが、ひとつ嵯峨の鮎を食ひに京へ上らないかと誘つたので、意は勿論友に上京を促したのである。かうした場合の作としては、成程はたらしきある句だと思ふ。

松にすめ月も三五夜中納言

此句は須磨に月見に行つて、行平の遺跡を訪うた時の作で、月見の松といふのを人に教へられてよんだといふ詞書があつて、自撰の「玉海集」に出てゐる。句の眼目は白氏文集の「三五夜中新月色、二千里外故人心」といふ名高い句を裁ち入れて、夜中から中納言といひかけた所にある。中納言は行平。これなどは貞門の句の特色をよくあらはしてゐる。これと纏つた意はないが、十五夜の月が松陰に澄んで居る須磨の舊跡のさまを、典故や言掛で誠に巧みにあらはしてゐる。



季 吟

北村氏。拾穂軒とも號した。近江北村の人で醫を業とした。俳諧ははじめ貞室に學んだが、後貞徳の直門となつた。彼の業績は俳諧よりも、寧ろ國文古典の註釋の方面に多く殘された。源氏の湖月抄、枕の春曙抄、徒然草の文段抄などは人のよく知る所である。それで晩年幕府の歌學所に召出されて法印に叙せられた。俳諧の方でも「山の井」「埋木」等をはじめ、著書が多い。寶永二年六月十五日歿、年八十二。句風は流石に歌文に親しんだだけ上品であるが、隨つて所謂俳諧味は稀薄である。

地主からは木の間の花の都哉

地主は東山清水寺の鎮守の神なる地主權現のこと。句は謠曲田村に「あらあら面白の地主の花の景色やな。櫻の木の中に漏る月の」といふ句によつたので、木の間の花と花の都といひかけてある。花盛りの頃地主權現から都を眺めると、廣い花の都も僅かの木の間の空隙から見渡されるといふ意。季吟の得意の句であつたらしいが、句の興味は廣い都の全景が、僅かの花間から望まれるといふ點にあるので、それを謠曲の文であやなしたのだから、眞の詩趣などは味はるべくもなす。

腹筋をよりてや笑ふ糸櫻

糸櫻が滿開してゐるさまを、糸といふ語にすがつて、腹筋をよつて（糸を搓るにかけてゐる）笑ふと言つたのだ。

勿論言葉の洒落だけの句。

一僕とぼく／＼ありく花見かな

に／＼といふのは、ゆるり／＼と歩いてゐるさまにいふ語。芭蕉の句にも「馬ぼく／＼我を繪に見る夏野哉」といふのがある。句は一僕のボクからボク／＼と同じ語を重ねた所が面白味であらう。しかしさうした調子をぬきにしても、一僕に瓢箪でも持たせて、悠々と花見て歩く樂隱居などのさまがよく言ひ盡されてゐて面白い。實は今日から見るとボク／＼の拍子取的な小細工の事は、寧ろ解かぬ方がよいのであるが、季吟時代の句としては、どうしてもその技巧を見のがすわけには行かない。

まさ／＼といますが如し魂祭

論語八佾篇の「祭如在」といふ句を用ひた趣向。しかしその引用が殆んど目立たないで句中に融化されてゐるのは、流石に季吟の手腕の凡でない所が窺はれる。

雁は文字おほふや霧の韻塞

韻塞は詩の韻字を掩うて、それをあてさせる文字の遊戲で、中古の物語などによく散見する。それで霧を雁字を掩ふ韻塞と見立てたのである。最も貞門臭の強い句だが、韻塞などを思ひついたのはいかにも古典研究家らしい。



以上の外貞門の俳人としては、なほ山本西武・高瀬梅盛・かんでみりやう雞冠井令徳等があり、江戸の方にも齋藤徳元・高島玄札・石田未得などがゐた。いづれも當時に名を得た人々であるが、その句は特に異色をもつてゐるものはない。左に二三の句を録するに止めておかう。

芋も子を生めば三五の月夜哉 (三五と産後との言ひかけ) 西武

舟歌も梶の葉にかけ天の川 (梶の葉と楫との縁) 同

東より世はをさまるき初日哉 (治まると圓きさのいひかけ) 梅盛

風に落葉將棊倒しぞ金閣寺 (將棊に金角は縁語) 同

稻妻の面影見てやよばひ星 (妻にすがった作意) 令徳

春立つやにほん目出度き門の松 (二本と日本) 徳元

咲く花のかほど目出度きものはなし (香とかほで) 玄札

葵にや所あらそふ車百合 (源氏物語の葵上と六條御息所の車争による) 未得

### 三、檀林時代

#### 宗因

宗因は西山氏名豊一、通稱次郎作といふ。肥後八代の加藤正方侯に仕へたが、正方は風庵と號して豪信法印に連歌を學んでゐたので、彼も亦その感化をうけて連歌を嗜んだ。後主家の没落にあひ、浪人して京に上り、里村昌琢に連歌を學び、又松江重頼に俳諧を問うた。それから正保四年大阪の中島天満宮の邊に居を定めて、月次連歌の宗匠となつたが、明暦以後は更に轉じて俳諧を専らにするやうになつた。當時は勿論やはり貞門風の上みぶりにすぎなかつたが、爾來その句風は漸く清新の調を帯びて來て、遂に所謂談林の新風を樹立するに至つたのである。これはもとより彼が俳壇の趨勢を見るに敏で、俳風一新の機が至つた事を察して努力した結果ではあるが、一には又貞門中最も異色に富んでゐた重頼と、早くから相接した影響も少くなかつたらう。彼の新調は寛文末年頃に至つて、益々その特色を發揮して來たので、貞門の古調にあいた俳壇の人々は、喜んで之を迎へた。さうして大阪には西鶴・惟中・由平、京都には高政・常矩、江戸には松意等をはじめ、談林に來り投ずるものが多く、貞門派の人々は之に對して批難攻撃を加へたけれども、大勢は何うすることも出来なかつた。結局延寶年代に至つては、俳壇は全くこの新風に風靡されてしまつた。宗因は實にある意味に於いて、近世に於ける我が文藝革新の急先鋒であつたのである。だから芭蕉も、もし宗因が出なかつたら、今もつて吾々は貞徳の涎を舐つてゐなければならなかつたらうといつて、宗因の功績をたゞへてゐる位である。只惜いかな、宗因の事業は古調の破壊に急にして、未だ十分に藝術的價値を有する新調を建設



するまでに至らなかつた。特に檀林の末流に至つては、故らに奇怪の調を弄し、極端な破格放縱に陥り、遂には宗因自らもその弊の甚しいのに驚いたといはれる位である。彼は俳號を、はじめ一幽といひ、のち西翁・梅翁・梅花翁などと號した。宗因は多く連歌の方に用ひた號である。天和二年三月廿八日歿。年七十八。句集には天明元年一陽井素外編の「梅翁宗因發句集」が汎く行はれてゐる。

## ながむとて花にもいたし頸の骨

萬治元年刊の「牛飼」といふ俳書にはじめて出てゐる。即ち宗因が俳諧に轉じて間もない所謂一幽時代の句である。しかもこれは當時よほど名高い句であつたと見えて、その後多くの俳書に度々採録されて居り、又この句を發句にした自身の獨吟百韻などもある。句は新古今集、西行の「眺むとて花にもいたくなれぬればちる別れこそ悲しかりけれ」をもちつたので、いたくを痛くととりなして、仰いで枝頭の花に見入つてゐた爲めに、頸の骨が痛くなつたといふ滑稽である。勿論貞門風な言葉の洒落ではあるが、古歌のみやびかな言葉から、急に「いたし頸の骨」に俗に轉ずる調が、いかにも輕妙で、流石に宗因の機才の凡でないことがうかゞはれる。

## 峯入は宮もわらぢの旅路哉

寛文初年の吟である。峯入は山伏修験者が吉野の大峯に入ることで、毎年三月熊野から入つて吉野に出るのを順の峯入、七月吉野から入つて熊野に出るのを逆の峯入といふ。この句は京都聖護院門跡寛法親王の峯入を拜んでよんだ句だといふ。これも新古今、蟬丸の「世の中はこてもかくても同じ事宮も薬屋もはてしなければ」の歌をふまへた句

で高貴な宮様も、修行のための峯入であるから、草鞋を召してゐるといふのだが、さうした古歌の智識から生ずる興味以外には、何の感興も齎さない。畢竟貞門の舊套をまだ脱しきれない作である。

## 秀でたる詞の花は是や蘭

これも寛文初年の作。古文眞寶の「爾有秀兮菊有芳」の句によつた作意で、且つらむを蘭にいひかけてある。文句取ミ掛詞だけでは、到底智的の遊戲以上には出られないであらう。

價あらば何かをしまの秋の景  
難波津に昨夜の雨や花の春  
いかに見る人丸が目には櫻鯛  
宇治橋の神や茶の花さくや姫  
花むしろ一見せばやと存じ候

右五句共に寛文四年刊の「佐夜中山集」中の句である。第一は松島の雄島の勝景をたゞへたので、「何か惜まむ」と、雄島と言ひかけたのが一句の眼目。勿論貞門風の技巧にすぎないが、三、三、三、四、五のはづんだやうな格調が、一種の輕快味を與へる。第二は王仁の作を傳へる「なには津にさくやこの花冬ごもり今を春べとさくやこの花」によつた趣向で、昨夜の雨に花も開いた難波の春景色をよんだ句である。やはりさくやの掛詞が眼目。(なほ此句は普通



下五「梅の花」を傳へてゐるが、「佐夜中山」・「小町踊」等の古俳書には、皆「花の春」をなつてゐる。(第三は古今集の序文「春のあした吉野山の櫻は人丸が目には雲かこのみなむ覺えける」によつた作意で、一本には明石での作だといふ前書がついてゐる。昔の人丸は吉野山の櫻を雲か見見たが、今明石の人丸神社の人丸は櫻鯛を何ぞ見るだらうといふ句意であるが、櫻を轉じて明石名産の櫻鯛としたのが所謂俳諧手段である。第四は宇治は茶の名所であるから、木花咲耶姫の名にもちつて、名高い宇治の橋姫を茶の花さくや姫だらうと興じた句。これなどはむしろ惡洒落に過ぎぬ作だらう。最後の句は小袖幕を廻らした花見の席などに、どんな美人が居るか覗いて見たいといふ意だが、それを詠曲でワキなどがよく「どこそこを一見せばやみ存じ候」(例へば高砂に「播州高砂の浦を一見せばやみ存じ候」。「井筒に在原寺さかや申し候程にたちより一見せばやみ思ひ候」等もある類。)といふその句調をかりて仕立てたのである。宗因は自ら詠曲は俳諧の源氏物語だといつて、歌人の修養として源氏が必讀である如く、俳諧師は詠曲の詞章をこつて一句の趣向を立てるこゝが肝要だといつた。これは彼の句風に一種の清新味を齎すべく、誠に有效な手段たるを失はなかつた。貞門の千篇一律な技巧に倦いた人々が、この目先きの變つた新技巧を喜んだのは勿論であつた。内容の如何はともあれ、韻律の上から變化に富んだ詠曲の詞章を、俳諧の中に取入れようとした着眼は、確かに彼の才の鋭く豊かな事を思はせる。彼はすでに萬治三年刊の「境海草」の中に、

宇治にて

### 里人の渡り候か橋の霜

の吟を試みて居るのである。勿論同書に出てゐる彼の作廿六句は、まだ多く貞門風のもので、此句の如き例は外に見當らぬのであるが、とに角早くその頃からこの種の新しい試みに着眼してゐたのであつた。此句は詠曲景清に「いかに此あたりに里人のわたり候か」(但し詠曲のわたるは、居るの意)とある文句をこつたので、温庭筠の詩句「鷓鴣茅店月、人跡板橋霜」の趣である。この漢詩の趣を句はせつゝ、詠曲の文句をかりて一句を巧に言ひおぼせた手腕は流石に凡でない。延寶以後の作になるこゝ此種の詠曲によつた句は益々多くなつてゐる。今その代表的なものを數句擧げよう。

宿れとは御身いかなる一時雨

時鳥いかに鬼神もたしかに聞け

松に藤蝟木にのぼるけしきあり

秋やくるのうくそれなる一葉舟

第一は詠曲江口によつた作で、且つその中に「御身はさていかなる人にてましますぞ」といふ句があるのをとり用ひてゐる。「と」とかけてある、(句意は詠曲江口の前半を讀んで解していただきたい。)第二は田村の「いかに鬼神もたしかにきけ」といふ文句だけをかりて、時鳥の一聲には鬼神も耳を傾けるであらうとの意をきかせたのである。此句などは詠曲の句を最も巧みにこり入れた點に、句の全生命があるのである。前句の如く詠曲の内容と何も交渉が



あるのではない。これは只唐突とをしてその一句をかり來つて「時鳥」につゞけ、しかも十分の働きを見せた所が面白いのである。内容的に貧弱ではないかと評すればそれまでの事であるが、それは此種の句に對する正當な鑑賞の態度ではなからう。第三は竹生島の名高い句「綠樹影沈んで魚木に登るけしきあり」をもちつたのであるが、これなどはその見立てが俗に墮して、いや味が多い。通俗的には喜ばれるかも知れないが、それは到底低い趣味たるを免れない。第四はどれと特定した謠の文句ではないが「のうく／＼それなる御僧」とか、「のうく／＼あれなる山伏」などといふ文句は、諷刺はしげく出て來る。それでその語を用ひて、水上に散り浮んだ桐の一葉に對して、もう秋がやつて來たかと問ひかけた作意である。「一葉落ちて天下の秋を知る」といふのは古い語であるが、それをかうした形で表現すると、そこに又古諺から受ける堅苦しい感じとは別種の、柔らかな女性的の情趣を感じる。それは「のうく／＼それなる」といふ女らしい言葉の響きと、それに聯想される鬢物(カツラモノ)(能で主人公が女であるものをいふ)のシテの動作などが、さうした感じを作るのである、そしてこの女性的の弱々しい言葉の感じは、桐の一葉に秋を知る寂しさとよく調和を保つて居る。

## されば爰に談林の木あり梅の花

此句は延寶三年の春、宗因が江戸に下つた時、江戸談林の田代松意一派の人々に迎へられて、「談林千百韻」を興行した、その時の發句である。これに對して松意門の雪柴は「世俗眠りをさます驚」と脇句をつけた。當時この新風を鼓吹した人々の、意氣盛んな状態が句の上に躍動して居るではないか。こゝに梅花翁即ち自分を中心とした談林の

新風があるぞと、大見得を切つた體である。それに對して、この革新の聲で世俗の眠りをさましてやらうと和した意氣はまさに軒昂の狀である。實際その頃の談林の勢力は凄じいもので、芭蕉などもこの宗因東下のをり、俳諧の席に一塵したりして新風に心酔したものであつた。

## となん一つ手紙のはしに雪の事

これは徒然草に、兼好がある雪の面白く降つた朝、人の許へ手紙をやつたが、雪のことを何とも書かなかつたので、その人の返事に「この雪いかゞ見る」と一筆言つてよこさぬ程の無風流者のいふ事は聞かないと言つて來た話がある。その故事によつて、今度は「この雪いかゞ見る」と一筆手紙のはしに書いてやつたと、逆に言ひかへたのである。「となん一つ」といつたやうな奇警な言ひ方が、窺かに得意とした點であらう。さうしてこんな奇警な言ひまはしばかりを主とした結果は、やがて談林末流の弊たる怪奇不可解な句を産むに至つたのである。宗因までは流石にさうした極端な句は少いが、この句などはこの怪奇調の最初の傾向を物語るものであらう。

折ふしかはる俳風の心を

そよ／＼／＼昨日の風體けふの春

お靜にござれ夕陽いまだ殘んの雪

車胤が窓今此席に飛ばされたり

これ等の句は談林のかうした傾向が益々進んだ形である。第一の句は一本には「そよそよ昨日の風體一夜の春」



ともあつて、この方が意味はとりやすい。それ／＼昨日までの俳諧の風體も、一夜あけると忽ち年が改まるやうに、今日にはもはや古風になつてしまふではないかといふ意である。「そよ／＼／＼」といふ如き、形式的に變つた調子が段々一般に喜ばれた事が分る。第二句なども、八七六といつた破格なりズムから生ずる感興が主で、句意は寧ろ晦澁に陥つて居る。惟中の「俳諧破邪顯正返答」によると、此句は松門亭某といふ人の許で百韻の俳諧があつた後、宗因に追加の發句を所望すると、そのまゝ言下に作つた句であるといふ。即ち「俳諧は一と通りすんだが、まあ／＼皆さんゆつくりいらつしやい。夕日はまだ残つて居ますから」といふ挨拶の意で、それに眼前の残雪をいひかけたのであらう。しかし此句だけ突然出されると、解釋に困るやうな句である。尤も宗因の此句などは、まださまで極端といふ程でもなく、流石にふさげた態度は少しも見えない。ところが例へば談林末流の二三子の作をあげてみると、

今宵の大將たり抑々たはらの芋太郎（芋名月の句）

風のみいら布目見せけり土用干

小便や瀧波はしる山西瓜

の如く、殆んど惡ふさげに近いものが頗る多い。第三句の「車胤が窓」で螢をきかせたやうなのは、寧ろこのふさげ氣分といはねばなるまい。且つ格調の方でも、故意に五七五の常格を破つて、

冥途にても蝮責にあはんこそ猶をかしき（六、一〇、六）

詩酒家々烟草俳を釣らん良夜の月（六、九、六）

四海豊けし鼓腹して樂しむ蝮の皮（七、九、五）

唐がらしの女調音高し摺子鉢（六、一一、五）

のやうなひどく字餘りのものさへ屢々見られるのである。しまひには宗因自身すら、この極端な放縱さに呆れて、口をつぐんで晩年は俳諧に遠ざかつたと傳へられる位である。

### 白露や無分別なる置き所

汎く知られた句である。その人口に膾炙した所以は、極めて解し易く、且とりやうによつては道歌的の教訓を含んで居るからであらう。勿論それ等のことは、此句の文學的價值を批判する上には、何の交渉もない事であるが、少くともこんなに形式的技巧を全く含まない句は、貞門・談林の句を通じて極めて稀である。そこには掛詞や縁語といふやうな裝飾が全くない。しかも格調其他の點に於ても特別の技巧をこらした所がない。只清淨な白露が汚穢な場所に置いてゐるのを、無分別な擬人的に言つたのが滑稽なのである。さうしてこの滑稽は何人にも分り易い。此句の制作年代はなほ確かに知る事が出来ないが、宗因の晩年の作ではあるまいか。もしさうだとすれば、彼が次第に平淡の境に詩趣を見出さうとした心のうつりが察せられる。よし晩年の作でなかつたにせよ、少くとも彼が好んで怪奇な調のみを弄したのでない事は明かである。更に

### 有明の油ぞ残るほとゝぎす

道心者庵



月出で、一燈空し谷の庵  
風に乗る川霧輕し高瀬舟

西行像讚

秋はこの法師姿の夕べかな  
菜の花や一本咲きし松のもと

等になると、勿論そこにはまだ一味の滑稽氣分を脱し切れない所はあるが、芭蕉などの句風に頗る近似して來てゐる點が認められる。最後の句の如きは、——「宗因發句集」に據る。確かな出所はなほ知り得ない。——蕪村にまで接して居ると言つてよい。とに角宗因にはかうした一面もあつたのであるが、なほ大成せずして終つたのであつた。なほ宗因の句として名高いものを、次に今少し列舉しておかう。

からし酔にふるは泪か櫻鯛 (古今「春雨の降るは涙か櫻花云々」の歌による。)

世の中や蝶々とまれかくもあれ (「止まれ」と「とまれ」との言掛)

小初瀬や目がねもよその霞哉 (新古今「年もへぬ祈る契は初瀬山尾上のかねのよその夕暮」)

藥罐屋も心してきけ時鳥

螢火も百がものありなめり河

命なりさゆの中山香薷散 (西行の「命なりけり佐夜の中山」の歌をもちつた作。)

よれくまむ兩馬が間に磯清水 (「組まむ」と「汲まむ」)

やがて見よ棒くらはせむ蕎麥の花

すりこ木も紅葉しにけり唐辛子

天も酔へりげにや伊丹の大燈籠 (朗詠「天酔于花」)

しら箸の夜のちぎりや亥の子餅 (拾遺「岩橋の夜の契りも絶えぬべし明くる佗しき萬城の神」)

おどろけや念佛衆生節季候

雪の松會根も久しき名所哉 (謡曲高砂「それも久しき名所かな」)

盃やかさをさすなら玉あられ (狂言末廣がりの句をとる。)

### 西 鶴

井原氏。始め鶴永と號して十五六歳の頃から俳諧に志し、宗因門中特に新風の急先鋒として、盛んに活動した。寛文末年の頃にはもはや世に阿蘭陀流と稱せられる程、その異様な風體が認められ、延寶年間に至つては益々所謂阿蘭陀流の特色を發揮した。西鶴と號を改めたのは延寶三年のことと思はれる。彼は談林新風の極端な鼓吹者として世の視聽を集めたばかりでなく、又速吟達吟の天才で、はじめ延寶五年生玉の本覺寺で一日千六百句の獨吟を試み、翌々七年には一日四千句を獨吟した。當時此種の俳諧大矢數と稱する獨吟は、方々で行はれて、各々その句數の多きを誇つてゐたが、彼は更に貞享元年住吉神社の境内で二萬三千五百句といふ驚くべき獨吟に成功して、遂に



何人の追隨をも許さなかつた。是より先き天和二年師宗因の歿にあひ、その年一代男を出してからは、全く俳諧に遠かつてしまつたのではないが、専ら浮世草子の作者として立つに至つた。さうして元祿六年八月十日年五十二歳で歿した。彼の俳諧に於ける素質は、かの大矢數の如き速吟に、異常な天才を發揮して居るのでも分る通り、飛躍的な詩想の展開と進行とを主とする連句の方が得意であつた。一句ぎりでもまとめねばならぬ發句には、十分その才を揮ふ餘地がなかつたのである。随つて彼の連句の作品はかなり數多く残されてゐるに反して、發句の作品は極めて少い。今日知られてゐるものは百二三十句にすぎないのである。かうした素質が、やがて彼を俳諧の天地に躡踏せしめないで、もつと自由な小説の世界にまで足を伸ばさせたのであつた。彼は松壽軒・二萬堂等の別號があり、又一時西鵬とも號した。句集は特に編纂されたものはない。

### 心こゝになきかなかぬか時鳥

寛文六年刊「遠近集」に出てゐて、西鶴の句の文獻に見ゆる最初のものゝ一である。句意は大學の「心不在焉視而不見、聽而不聞」の句によつて、郭公の聲を一向耳にせぬが、それは郭公は鳴いても心こゝにあらざるために、所謂聞けども聞えなかつたのか、それとも實際鳴かなかつたのであらうかと疑つたのである。「心こゝになきかなかぬか」と言切つた格調は、何となく後年の奔放さを偲ばせぬでもないが、それは實る氣のせみであらう。まだ貞門風な著想といふを免れない。「こゝろこゝ」、「なきかなかぬか」と二の頭韻が、自然に調子を軽くしてゐる外には、どこと取立てゝいふ程の特色は見出されないのである。

### 長持に春ぞ暮れ行く更衣

もう四月になつて愈々初袷を着る頃になつた。花見に着て行つた美しい小袖なども長持にしまはれてしまつた。それを長持に春が暮れて行くと感じたのである。この句は寛文十一年刊「落花集」——但し此書では上五が「長持へ」となつてゐる。——や延寶元年刊「大坂俳歌仙」等に出てゐるが、こゝにはもはやその表現の上にも、構想の上にも著しい進歩が見えてゐて、古風な陳套さからよほど脱してゐる。なほ此句は教科書類にも屢々採録されて名高くなつてゐるが、普通「長持に春隠れ行く更衣」と傳へられてゐる。しかし前記の通り當時の俳書には、皆明かに「春ぞくれ行く」となつて居り、又水谷不倒氏編「西鶴本」所載の西鶴眞蹟書證にもさうなつてゐる。「春かくれ行く」は誤傳にちがひない。

### 日高には能登の國迄やさし鯖賣

延寶三年刊「糸屑集」中の句。當時西鶴は連句の方では、すでに立派な作品を相當に残してゐるのであるが、發句にはどうも出色のものがない。此句は謠曲安宅の「腹立ちや日高くは能登の國まで指さうすると思ひつるに」の句によつた趣向で、指すから刺鯖と言ひつゞけたのである。刺鯖は鯖を脊開きにして鹽に漬け二尾を一刺としたもので、七月十五日生身魂（生きてゐる父母の壽を祝すること）に用ひる。能登國はこの刺鯖の名産地である。句意は刺鯖賣はまだ日の高いうちに能登の國まで指すであらうかといふだけのことである。謠曲の文句をかりて、突如刺鯖賣を點し出す所には、成程多少の才が見られないでもないが、趣向は要するに古風の臭味を多分に持つてゐるとしかいへない。



「糸屑集」中には此外なほ數句彼の句が出てゐるが、どれも此程度の句ばかりで、これが連句の方で、すでに阿蘭陀西鶴の名をとつてゐる同一人の作とも思はれぬ位である。彼が發句の方面にあまり得意でなかつた事が、これだけでもよく窺ひ知られる。

平樽や手なく生るゝ花見酒

梵網經に酒を人に勸めた者は五百生の間手のない者に生れるとある。平樽は角樽とちがつて手のない樽である。そこから思ひついた趣向であるが、それを花見酒の句にしたのは、いかにも元祿の時代らしい味ひがあつて面白い。

鯛は花は見ぬ里もあり今日の月

僻遠の地では鯛の生きたのは味へないであらう。又柳櫻をこきまぜた春の錦も見れないであらう。しかし今日の名月ばかりは、どんな山家の奥でも賞する事が出来るといふ意で、よほど理智的な分子を多くもつた句である。それだけ通俗的に解し易く名高い句になつてゐる。其角は此句に對して「鯛は花は江戸に生れて今日の月」と大いに江戸つ子の得意さを示してゐるが、句としては勿論其角の方が面白い。大江丸には「月は雪はおしなべて櫻ながめけり」の句がある。

しゝくし若子の寢覺の時雨哉

子供を冬の夜の寢覺に起して、「しゝくし」などといひながら小便させるのを、時雨と興じたのである。此句な

どは大分遊戯氣分が濃厚で、此種の寧ろ放縱な作は、西鶴などの大いに得意とする所であつたらう。その甚しいものは、例へば

なぐれなん紅葉と知らば黒木賣

みつがしら鶉なくなりくわくわい

花にきてや科をばいちやが折ります

といつたやうな獨りよがり陥つたやうな句も大分多い。

枯野哉つばなの時の女櫛

枯野を歩いてゐる足許にふと見つかつた女櫛、それは多分春茅花摘みに來て落したものだらう。草が枯れてしまつたので、今人目にふれたのだなと思つた心もち。「枯野哉」と上五文字に置いたので、櫛があらはに見える程の枯野となつた事を、痛切に感じて居る情が見える。此句にはどこか一種の淋し味が漂つてゐる。あの絢爛奔放な談林の句とも思へない所がある。此句は西鶴の晩年の作で、彼も五十近い頃からは、だんくかうした句境の味をも分つて來てゐるやうである。この外晩年の作になる

山茶花を旅人に見する伏見哉

世に住まば聞けと師走の礎哉



玉笹や不斷時雨る、元箱根  
里人は突白かやす花野かな  
蟬聞いて夫婦いさかひ恥る哉  
霞みつゝ生駒見ねごも夕べ哉

といったやうな句には、平淡の間にどこか一脈の淋し味を漂はせてゐる所がある。思ふに西鶴がもう少し長生きして、且つ更に句作の方面に歸つて來たなら、一種の濫い俳諧を作り出したではなからうか。絶えず局面を新しく開いて行つた彼としては、きつとさうであつたであらうと思はれるのである。しかし不幸にして我等はその晩年の動きの、僅かなあらはれしか知る事が出来ないで終つた。

浮世の月見過しにけり末二年

彼の辭世の句で、「人間五十年のきはまり、それさへ我にはあまりたるにましてや」といふ前書がある。

高政

菅野谷氏。京都に新風を鼓吹して、宗因から「末茂れ守武流義惣本寺」といふ句を贈られた。

目にあやし麥藁一把飛ぶ螢

延寶七年刊「中傭姿」巻頭の句である。高政は當時半傳連社ハチデンレと號して京都に跋扈して居たのであるが、この「中傭

姿」が導火線となつて、貞門と談林との激しい論戰が開かれた。句は平家物語祇園女御の條に、麥藁の簀を着た承仕法師の名高い話がある所から思ひついた作意で、螢の光を麥藁に灯火が映つて光つた故事に思ひよせて、麥藁一把が飛ぶやうだと見立てたのである。この「中傭姿」を駁した中島隨流の「破邪顯正」には「目にあやし麥藁の光り飛ぶ螢としたらば、かの火とぼしの古事にもあひ又一句も聞え侍るべきを、麥藁を飛ばせねば嬉しうないと思ひ、無理に麥藁を飛ばせたり。是當風邪俳の作意なり。それ故一向何とも埒あかず、おらんだの鳥物也云々」と批難してゐる。この評はたしかに談林の一面の弊を穿つてゐるものであらう。

おごろくや花は嵐のおと御前

嵐の音と乙御前といひかけてある。乙御前は三平二滿の所謂お多福のことである。美しい花の粧ひも、嵐の音には忽ち散らされてしまふのを、乙御前の醜い容貌にたとへたのであらう。

惟中

岡西氏。はじめ松永氏を稱し備前岡山に儒を業として居たが、のち京に出て烏丸資慶に歌を學び、又大阪に下つて宗因の門に入り、談林の鬪將として重きをなした。彼は談林派中最も學識のあつた人で、貞門派との論戰に當つても、常に堂々の陣を布き、又俳諧以外國文關係の雜著も多い。正徳元年正月廿六日歿。年七十三。園女の夫斯波一有は全く別人であるが、よく混同されてゐるから、誤つてはならない。





勝手口やほのく句ふ櫻鯛

延寶五年刊自撰の「俳諧三部抄」に出てゐる。これなどはまづ尋常なよみぶりであらう。

相撲場はみむろの岸の夕べ哉

伏見の任口上人との兩吟百韻の發句である。三室は宇治の附近にあつて、紅葉の名所として知られてゐる。この句意は任口の脇句「二重まはりの紅葉折りかく」で、説明されて居る觀がある。相撲取の廻しを紅葉と見立てたので、嵐雪の「角力とりならぶや秋の唐錦」なども、こゝから胚胎したのかも知れぬ。しかし惟中の句はその謎風な見立てに興味の中心をおいてゐるので、嵐雪が唐錦の美しさを賞した心持とは大分の距たりが認められる。

短冊の旗管城の固前は花

隨流の「破邪顯正」に對して、惟中は、「破邪顯正返答」を出して之に應酬した。そしてその卷末に獨吟百韻一卷を添へて、暗にこれこそ談林の模範的創作だと誇示してゐる。この句はその發句である。しかも高政の「中庸姿」にも劣らぬ異風異體なもので、隨流は更に「猿とりもち」を出してこの惟中の百韻を攻撃して居る。句は和漢朗詠集の「留春不用關城固、花落隨風鳥入雲」の句に基き、筆を管城公といふのに因んで管城の固めといひ、短尺を旗に見立て、かうした備へで談林の俳壇を守らうといふ意である。「前は花」といつたのは、朗詠集の句意により、春を留め花の大手に關をかまへて守護しようといふ意をかけたのである。その脇句は「戈を揮つて留けり春」と同じく朗詠

集の句によつたのであるが、以下頗る術學的な奇異な調を弄して、談林の極端な句風をよく表はしてゐる。

松意

田代氏。江戸にあつて遙かに宗因の新風に呼應し、延寶三年には師翁を迎へて、同志の人々と共に「談林十百韻」を興行した。その一派の俳諧は飛體といつて、世間から異端視されたが、彼はこれこそ俳諧の本體だと傲語し、却つて世上の俳諧を末體として退けた。談林の興隆にはとにかく與つて大いに力のあつた人である。「功用群鑑」といふ一風變つた俳諧作法書なども書いてゐる。

恵み雨深し獨活の大木一夜松

雨後に獨活が急に生育したのを、北野の一夜松の出現に見立てたので、やはり談林らしい特色を見せてゐる。

鼻息の嵐も白し今朝の冬

「鼻息の嵐」といふ言ひ方も、勿論談林風の誇張ではあるが、此句の場合では最も適切な表現と言ひ得るであらう。面白い句である。

常矩

田中氏。もと貞門から出た人であるが、談林以外一流の新俳諧を唱へて、京都俳壇の一方に據つて居た。宗因の直系ではないが、當時やはり俳壇革新の運動に携はつた有力な一人である。蕉門の許六や尙白なども、はじめは常矩に學んだ。天和二年三月二十日歿。



## 蛇之助が恨みの鐘や花の暮

常矩の獨吟四百韻卷頭の句である。蛇ヂヤ之介といふのは俗にいふ底拔上戸の異名で、延寶頃から寶永正徳頃の書中には折々散見する語である。句意はまだ花見酒も飲みあかないのに、早日も暮るゝことか残り惜しいと晩鐘を恨んだ作である。許六の「歴代滑稽傳」によると、此句が當時評判になつて、世に蛇之介常矩と異名をとつた程であるといふ。此句の脇は「七まとひまとふ藤の松陰」といふのであるが、蛇之介といふやうな流行の隠語をもつて来て、しかも道成寺などの連想から恨みの鐘といつた趣向などは、確かに新奇を競ふ當時の俳人に歓迎されたにちがひなからう。

## 馬下駄やひげもあがらず厚氷

同じく獨吟四百韻中の發句。謠曲兼平の「深田に馬をかけ落し、ひげどもあがらず打てども行かぬ」の句によつて、厚氷に踏込んだ駒下駄があがらないといふだけの事であるが、とにかく目先きの變つた趣向だとは言ひ得る。さうしてそれが常矩などの、新派として當時迎へられた主な原因であつたらう。勿論かうした目新しさは、深い根柢をもたない機智的のものであるから、文學的には大したものではないが、人心一新の功のみは認めてよからう。

【附記】 前講所載重頼の句「阿蘭陀の文字か横さふ天津雁」は當時の古俳番によつて抄出したのであるが、「今様姿」、「千宜理肥」等には宗因の句として出て居り、特に「今様姿」は重頼自撰の書であるから、之に従つて右の句を取消す事にする。なほ「横さふ」は「横たふ」とよむべきで、「横飛ぶ」ではない。古書の假名遣の誤りは普通の事である。

## 四、蕉風の先驅

談林の俳諧は、眼新しきが故に、又自由なるが故に、忽ち多くの人々の喜び迎へる所となつた。しかしその流行は間もなく行詰つてしまつた。それはあまりに放縱猥雜な調に、作者自ら呆れ果てたといふ形もあつたらう。又單に好奇的な考へから來り投じた人々が、すぐそれに眼なれて倦き出したといふ點もあつたらう。しかし何よりもその衰退を早からしめた原因は、民衆の間に俳諧文學に對する眞劍な藝術的覺醒が起つて來た事であつた。由來俳諧が連歌から分れて一の獨立した文學と見られるやうになつたのは、俳諧がすべて滑稽諧謔を基調としてゐるからであつた。即ち眞面目さと滑稽さとの二つのものが區別されてゐたのである。しかもその眞面目な連歌が、實はもと／＼滑稽を主とする即興的なものであつたが爲に、和歌から分れたものであつた。それが鎌倉時代以後隆盛となると共に、本質的には和歌と同様な幽玄高雅を旨とする文學となつてしまつたのである。俳諧に於てもまた同様な歴史がくり返さるべき時が來た。貞徳以來かなり長い間民衆に親しまれて來た俳諧文學が、今やその基調として、新たに藝術としての十分な重味を持つべき何かと與へられねば満足できなくなつて來た。談林の新風が近世の文藝復興的精神に立脚して、俳諧の境地を廣く開拓し、又多分の清新味を齎らしたことはもとより言ふまでもない。しかし宗因自身がすでに、「上手は上手、下手は下手、好きな事して遊ぶにしかず」と放言してゐるくらいだから、畢竟それは貞門の古風と同じく、遊戯的氣分を以て終始されてゐたのであつた。だが人々の心は、もはやさうした遊戯氣分で徒らに詞花言葉を弄ぶだけでは、満たされなくなつて來たのである。自分たちの藝術にもう少し深い意義を見出さうとした。かの鬼



貫は貞享二年の春「誠の外に俳諧なし」と悟つたといふが、實はかうした句作上の眞摯な心の向け方は、ひとり鬼貫ばかりでなく、當時の俳人たちの間には、いつとなく自ら動き始めてゐたのである。彼等は鬼貫ほどに明らかに意識し、深く省察しはしなかつたけれども、俳壇全體としては確かにあるなやみを懐きつゝ、俳諧藝術の彼岸へと志してゐた。それはやはりこれまで彼等が安住してゐた滑稽諧謔の遊園から、再び和歌連歌の幽玄高雅な殿堂へ歸らうとする動きに外ならなかつた。

蕉風俳諧の出現は、芭蕉といふ個人の力のみによつて出来たと思つてはならない。それはもとよりこの偉大な詩人の精進と努力とで、俳諧文學が本當に價値ある藝術として完成されたにはちがひない。しかし芭蕉を生んだものはやはり時代の力であつた。蕉風の所謂さび、しをり、細みとは、畢竟和歌連歌が本質的に理想とする幽玄典雅そのものの謂ひであつた。それは俊成定家以來、わが國民が傳統的に養はれて來た藝術的精神の、最高の發露である。即ち芭蕉もまた談林末期における俳壇全體の動きと共に、俳諧を連歌と同じく和歌の殿堂に祀らうとしたのであつた。しかしすでに俳諧は一度俳諧として、別な道を辿つて來てゐる。かの連歌から派生して發達して來た徑路を顧みると、明らかにそれは民衆的な趣味の洗禮を十分に受けてゐる。本質的には和歌の幽玄典雅を志しても、趣味的にはそこに全く和歌連歌と種類のちがつたものが見出されねばならぬ。かの芭蕉が「春雨の柳は全體連歌なり、田螺とる鳥は全く俳諧なり。」と言つたといふのは、即ちこの趣味の相違を具體的に示してゐるのである。そしてその點こそ實に蕉風の俳諧が、本質的には和歌連歌の神髓に合致しようとしつゝ、しかも一面和歌や連歌の至り得ない境地をもつて、一つ

の新しい文學として獨立し得た所以なのである。とまれ、かうして蕉風の俳諧が出現し完成されるまでには、俳壇全體が遊戲的態度から眞面目さへ向はうとする大きな先驅的動搖があつたことを忘れてはならぬ。随つて芭蕉以前、すでにかうした過渡期の傾向を作品の上にはしてゐる人々もかなり多い。否當時のすべての俳人の句が、多少なりこの傾向を持たないものはなかつたといつてもよからう。かの談林中でも最も極端であつた西鶴すら、その晩年の句風には確かに時代の趨勢が反映されてゐるのである。だが今もし芭蕉の先驅者として代表的な數人を數へあげるならば、それは來山・言水・才麿・素堂・鬼貫等であらう。但し之等の人々は時代的にいへば、必しも芭蕉以前にのみ活動したのではない。寧ろ彼等も芭蕉も、殆んど同じ時代に、同じ創作上のなやみを抱きつゝ、且つ大體同じ方向へ動かうとしてゐた人々だと言つた方が宜いかもしれぬ。而して彼等の中で芭蕉の天分が、最も明かに俳諧の正しい趨歸點を察し、最も深く俳諧の魂を探り得たのであると見るべきであらう。即ち來山以下の人々は、嚴密な意味では必しも芭蕉の先驅とは言ひ得ない。現に彼等は皆歿年においても、芭蕉より遙かにおかれてゐるくらゐである。だが俳壇における地位は、大體に於て彼等の方が芭蕉より先輩であり、随つて芭蕉以前に過渡期の傾向を示すべき作品を残してゐる。この意味に於て先驅といふのも強ち不當でなからう。依つて姑く芭蕉の作品を説くに先つて、之等の人々の句を見ることにしよう。

## 來 山

小西氏。大阪の人。七歳で談林派の前川由平に就き、俳名を滿平と呼んだ。のち宗因の直弟となり、十八歳で俳諧



の點者たる事を許された。正徳のはじめ頃から今宮に閑居し、黄檗の悦山和尚に參禪した。享保元年十月三日、六十三歳で歿した。湛々翁・十萬堂等の別號がある。彼はもと純談林の俳風に養はれ、且つ天性磊落不羈で物にかゝはらず、酒を愛して生涯醒めた日はないと言はれる位であつた。かの名高い「女人形の記」(俳文評釋のをりに説く豫定である。因に云ふ、此の記によつて來山に妻がなかつたなど傳へるのは全く誤である。)などを見ても、彼の洒々落落たる風貌が想はれる。随つて句風も諧謔に富み素朴な味をもつてゐる。しかも一面頗る沈痛蕭散の氣を帯びて居て、芭蕉に近いものをその中に見出すことが出来る。後人がその遺稿をまとめて「今宮草」「續今宮草」と題して出版した。又發句は「五千稿」の中に多少集められてあるが、なほ洩れたものも甚だ多い。

### 元日やされば野川の水の音

貞享五年の作でその年の歳旦帳(昔俳諧の點者が歳旦に三ツ物と稱して、歳旦歳暮の吟を摺つて出したもの。)に見える。句意は、元日といふと野川の水の音さへ平常とちがつて改つた感じがするといふ風に普通解されてゐる。しかし右の歳旦帳にはこの句に「直なるはゆがむのはじめ、常盤を名にしたる松も雪のためにはむごいめにあふこさあり。たゞいつをいつともせず、果てしなな世こそをかしけれ」といふ詞書がついてゐる。隣つて句は「元日だといつて人間は皆改つた形である。だが野川の水は今日も昨日とちつとも變つたさまもなく流れてゐる。さてもいつをいつともせぬこの水の音の面白いことよ」と解すべきであらう。無始無終な自然の姿を感じた心である。さればといふ語に作者の主觀をあらはして居り、またまづ「元日や」と徐ろに置いて、突然「されば野川の水の音」と言ひ下した所に

表現の巧みさがある。即ちさればの一語に句の中心が置かれてゐるが、しかしそこにまた一種のわざとらしさも感ぜられる。まだ句境の醇なるものではない。

### 青し青し若菜は青し雪の原

青しといふ言葉を三度も使つたのが作者の得意であらう。しかもそれが格別わざとらしさを感じさせないのは、幼いけれども純な感情に満たされてゐるからである。雪中に一點の春色を見出した喜びの情が見える。

### 三味線も小歌ものらず梅の花

三味線の調子や小唄の節まはしでは、梅の花と何だか調和しないといふのである。梅の高い氣品を側面から説明したやうな句である。遊戯的氣分ではないが、かうした着想に自ら興じた心もちから十分脱してゐない。そこに生ぬるさが介在する。梅花の崇高美に對する端的の表現ではない。芭蕉の「梅咲くやしらゝ落窪京太郎」も、似たやうな句境であるが、これは説明に墮してゐない點がまた多とすべきであらう。

### ほのかなる鶯聞きつ羅生門

早春の情景である。羅生門といへば郊外に近い洛の片ほとりが想はれる。そこでほのかに聞いた鶯の聲。春めいた心が淡く和らかに動くのを感じる。この句はもう言語の技巧を全く脱して、自然の眞趣を捉へて居る。

### 兩方に髭があるなり猫の戀



この句の次に來山は「ちよつとは雌雄見分けがたし。惠比須どのと大黒殿とは夫夫と思ひつめし尼あり。言うて聞かせても合點せず。兩方に髭のある序に、ふと思ひ出して爰に書く」と、かう書きつけてゐる。彼の洒落な滑稽味を見るべき句である。

むしつてはむしつては捨て春の草

「今宮草」に「僅か三里に足らぬ所ながら旅の心地せられて何もかも珍らし」と詞書がある。久しぶりで野外に出て、春の草を珍らしさうに撈つては捨て撈つては捨てる。それは大人の心ではない。初々しい童心である。むしつてはくと同じ言葉を重ねたのも、子供らしい心もちをよくあらはしてゐる。

白魚やさながら動く水の色

繊細な感覚が働いてゐる。來山には一面豪放な性格があつたと共に、又かうした詩人らしい鋭い細かな感覚の持主でもあつた。

春雨や降るともしらず牛の目に  
雨戸越す秋の姿や灯の狂ひ  
秋たつやはじかみ漬も澄み切つて  
これ程の三味線暑し膝の上

之等の句の上にはいづれも感覺的な匂ひが濃く漂つてゐる。大きなうつろな牛の目にうつる春雨、雨戸をもるゝ灯の色の狂ひ、薑漬の澄み切つた冷やかな色、僅かの重さが暑く感ぜらるゝ膝の上、そこには皆詩人のみが感じ得る鋭さと細かさがある。

見かへれば寒し日暮の山櫻

これは芭蕉の句境と同じものである。句の中に山路を辿る旅人の姿が浮んで来る。

愛子をうしなうて

春の夢氣の違はぬが恨めしい

此句は正徳二年の春、來山が五十六歳の時愛子淨春童子に先だゝれた時の吟である。口語調が却つて哀切堪へがたい眞情をそのままに吐露してゐる。一體會話語をそのまま俳諧に用ひる事は、談林派ではさして珍らしい事ではないが、それを卑俗に陥らないで、最も有効に用ひてゐるのは、蓋し來山と鬼貫とであらう。來山には此の外

花咲いて死にとむないが病哉  
飯蛸のあはれやあれで果てるげな  
蚊が入つて蚊屋振うたりや夜が明けた

等のやうな作がある。最後の句の如きは少々ふざけてゐるが、前の二句は口語が立派にはたらいてゐる。



早乙女やよごれぬ物は歌ばかり

名高い句であるが、實は所謂月並の調に過ぎない、さをとめは田を植ゑる少女である。手も足も泥に汚れてゐるがその美しい歌聲ばかりは汚れてゐないといふので、要するに俗人の喜びさうな小理窟である。

涼しさに四ツ橋を四つ渡りけり

四つ橋は大阪心齋橋の西方、横堀と長堀と十文字に交叉した所に架した四つの橋で、東を吉野屋橋、北を上繫橋、西を炭屋橋、南を下繫橋と言ふ。ぶらりと夕涼みに出かけた。橋の上が涼しいので一つ渡つては又一つと渡つてゐる中に、いつの間にか四ツ橋を四つ共皆渡つてしまつたといふのだ。飄然とした軽い心もちが見える。いかにも來山らしい口ぶりだ。

水踏んで草で足ふく夏野哉

清新味が溢れてゐる。さうして潑刺とした生活感が滲んで來る。

行水も日まぜになりぬ蟲の聲

季節的の哀感がしみくと湧く。夕べはもう肌が薄ら寒い秋のはじめ、行水も一日おき二日おきにしかなくなつた。庭の虫の聲は日毎に濃くなつて行く。芭蕉の所謂さびは來山の句の中にも、十分味へるのである。

今日の月只暗がりが見られけり

來山は四十八歳の秋母に別れた。その時の吟である。「續今宮草」には此句の前に「母に別れて後、大醉に及ばぬ時は一日も夢に見ぬ事なし。機嫌よき時は其朝こゝろよし、さもなき時は其朝心よからずして、せめて今宵の夢はと待ちかねるぞかし」と言つてゐる。彼は嘗て大淀三千風が行脚を羨んで、

幾秋かなぐさめかねつ母ひとり

とよんだ事もあつた。その母に對する至純な孝心が、惻々として人を動かすものがある。月の光を眺めるにも堪へないで、闇がりをじつと見つめて涙をのむ悲しい姿が、句の中にあり／＼とゑがゝれる。來山のこの至純さが、彼の俳諧を談林の淺薄から早く脱して、藝術的に深めさせた一つの原因であつたらう。

わが寝たを首上げて見る寒さ哉

此の句にも感覺的なところがある。寒夜の情趣が巧みに捉へられて居る。

誓文身の事にてはいはぬぞ

ひとり寝や幾度夜着の襟をかむ

これは寒夜更に狐衾を恨むの情である。前書は「これは誓つて自分自身の經驗で言ふのではない」といふ意であるが、そこに彼の悲痛な戀の體驗がないとは言へまい。彼は五十四歳で妻を失つてゐる。この句は果して亡妻を思つた作かどうかは分らぬが、とに角かうした人間の悲しみが、やはり彼の純情を透して痛切に訴へられてゐる。



大阪も大阪まん中に住んで

お奉行の名さへ覚えぬ年暮れぬ

來山の洒脱な生活態度を物語つてゐる。しかしわざ／＼かう吹聴する所に、所謂味噌の味噌臭さがまだ残つてゐる。この句の作句年代ははつきり分らぬが、大阪の市中に住んでといふのだから、今宮隠栖前の句にはちがひない。彼はこの句のために、其筋のお叱りをさへ業つたを傳へられてゐる。

言 水

池西氏。奈良の産、九歳の時江戸に下り、十二三歳頃から俳諧に志した。十六歳で法體していよいよ俳諧を専らとし、貞門の重頼に教をうけた。重頼歿後は京に上つて足をこゝめ、享保五年故郷の南都にしばらく歸つてゐたが、翌年又上京し、同七年九月廿四日歿した。年七十三。紫藤軒・洛下堂等の號がある。彼は江戸と京都との俳壇を股にかけて、交遊の範圍も汎く、撰集した俳書も頗る多い。江戸蛇之鉾(延寶七年)・東日記(延寶九年)等は就中名高い。その句は自選句集「初心元柏」があり、又「俳諧五子稿」中にも集められてゐる。彼は元來貞門系の人であるけれども、江戸では専ら談林派の人々と交つて新風の句を作つた。又蕉門系の人々とも唱和して、貞享以後の作品には著しく蕉風の色彩を帯びてゐる。特に連句の方では、全く蕉風の特徴そのまゝをあらはして居ると言つてもよい。試みに貞享三年清風の撰んだ「俳諧一つ橋」から一例をあげて見よう。

馬子の袖に晝貌かゝる假寝哉

言 水

拳に居ゑて鶴の羽を干す

清 風

東雲の石切る音をたよるらむ

同

風に折れふす椎の梯

水

詩を捨つる雨名月の日を悪み

同

百里に弱る一つ雁がね

風

ほの白き桔梗や美女の塚ならん

水

忍びの小川渦あらく巻く

風

板屋うつ葦に牛の目さめたる

水

之を當時の純蕉門の俳書「冬の日」・「春の日」等の卷々を比べて、その相通する所の多いことが認められるであらう。

霞みけり比叡は近江のものならず

顯昭の歌枕などに比叡山を近江國に屬させてあるが、あの霞んだ姿はやつぱり何といつても都の空にふさはしいといふのである。來山の「三味線も小歌ものらず梅の花」と同じ行き方で、叡山の春の姿を間接に説明したやうな句である。都のものだといふ代りに、近江のものでないと言つた所が、作者の窠かに得意とした點であつたらう。都人の自慢めいた心もちも含まれてゐる。



猫逃げて梅ゆすりけり朧月

都會人らしい繊細な感じをもつた句だ。しかもこの趣味は御所の築地あたりが聯想される種類のものでなくて、妾宅の裏庭か板塀あたりのさまが浮んで来るやうな趣味だ。どつか所謂江戸趣味に近い。言水は長く江戸に住んでゐて、且つ談林風に親しんだのだから、自らかうした生活情調を喜んだのかも知れない。彼の句にはこの種の傾向をもつたものが、かなり見出される。例へば

碁は妾に崩されてきく千鳥哉

文持つて禿付けけり蘭の舟

初時雨舌うつ海膽の味もこそ

夙に起きて妻に芭蕉を縫はせけり

の如き類である。之等の句には皆、都會人でなければ分らないやうな繊細な味がある。さうして其上更に滋味<sup>シビ</sup>とびとを持つてゐる。即ち所謂通人趣味なのだ。碁は妾に崩されたまゝ、憎らしいが可愛いと言つた心もちで、折からちゝと鳴く鴨川千鳥——この句は京都東山での吟である——にじつと聞き入つてゐる妾は、正に粹者の典型的情趣ではないか。さうして言水は實はこの情趣をあまり喜びすぎた仰きさへある。芭蕉葉の破れを妻に縫はせたりするのは、一寸こり過ぎてあくどい感じがしないでもない。

菜の花や淀も桂も忘れ水

「東山の臺」にてといふ前書がある。淀川桂川はいつもほの白く光つて流れてゐるが、菜の花の盛りには、野は一面の雌黄に彩られて、淀桂さへもその花の影に蔽はれて見えなまいといふのである。忘水とは野中などの流れが、叢中に没して人に知られないのをいふので、菜の花に蔽はれた淀桂をこれに比したのである。几董は或時蕪村等と清水寺の閣上から淀八幡あたりの春色を望見して、この言水の句の偽らざるを感じ、その著「新雜談集」中に、「今の人も菜の花に淀も桂もとまでは思ひよるべし、忘水と慥に置く事難し云々」といつて、この句を激賞してゐる。それほどこの忘水がきいて居るかどうかは一寸問題だが、とにかくこの大景を十七字中にまとめたおぼせた手腕だけは認めてよからう。

卯の花も白し夜半の天の川

これは「江戸八百韻」(江戸の幽山の發起で言水、素堂、一鐵等八人の催した八吟八百韻である。)を撰んだ時、素堂とつれだつて歸るさ、夜もいたく更けた頃本所の一鐵の許に立寄つた。そこらは家がまばらで垣根に白く卯の花が咲いてゐたのでよんだのだと言水自ら説明してゐる。卯の花の垣根が白く闇の中につゞいてゐる。夜半の空にも白い星の流れが一筋、——たゞ天の川といへば勿論秋季だが、こゝでは星群の流れを季節に關せず言つたものさ見なければならぬ。雪白の卯花に對して、初夏ながら夜氣冷かに秋らしい感じもしたであらうと。——いふのである。勿論特に取出していふ程の句でもないが、「江戸八百韻」が撰ばれたのは、延寶六年のことで、まだ誰かが談林調に浸り切つ



てゐる頃である。その頃言水がすでにかうした句境をもつてゐた事は注意しなければならぬ。

### 鯉はねて水静かなり時鳥

動いたあとの静けさ。芭蕉の古池の句に似たやうな趣である。しかし芭蕉の句の底にはいつまでも重い淵黙が潜んでゐる。この句の面には軽いさわやかな気分がすぐ浮んで来る。それは二人の自然を見る心に、性格的にちがつた所があるからであらう。畢竟言水の句は感覺的な所をはなれてゐない。

### 牛部屋に晝見る草の螢かな

これは芭蕉の句境にまで達してゐる。こゝには趣味的の好みなどはない。そのまゝ自然の心に通じてゐる。

### 山茶花に囀鳴く日の夕哉

これも佳句である。言水は「自ら鄙びたる家の後園に置く一籠、頃は小春の優にめで、日影のほひ此花に對す」を註してゐる。後園に一籠を置いた所が、多少例の彼のこのみにつきすぎてゐる感じを齎さぬでもない。しかし小鳥の聲にたそがるゝ山茶花の庭、小春の夕の情景はそこに餘蘊なく描かれてゐるではないか。

### 朝霧やさても富士のむ長次郎

長次郎は名高い手品師である。當時の浮世草子や談林の俳諧などには屢々その名が見える。例へば北條圓水の「晝夜用心記」に「鹽の長次郎が馬を呑み牛を品玉の曲」などゝある通り、牛馬などを忽ち呑み隠して人を驚かせたものだ

といふ。句は朝霧が眼前に富士の姿を隠してしまつたのを、長次郎の奇術に見立てたのである。且つ富士の山姿を「伊勢物語」に鹽尻のやうだと言つてゐる縁で、鹽の長次郎をもつて來たのだと言水は自ら説明してゐる。全く趣向に興じただけの句で、恐らく談林時代の作であらう。流石に言水も「初心も柏」の中に「予この句好まず、さりながら雜言の一つ、是慰にも」といふ言つてゐる。晩年彼が此種の句のさるべからざることを、十分に自覺して居た事が分る。さればこそ蕉風にも追隨し得たのであるが、「是慰にも」といふ言ひながら、自ら句帖に加へてゐるのは、まだどこか此句に全く捨ててしまへない愛着をもつてゐたからであらう。しかし實はこの未練を、彼は全く放すべきであつたのだ。

### 風の果てはありけり海の音

言水の句中最も人口に膾炙されてゐるものである。爲めに彼は「木枯の言水」を異名されたままで傳へられてゐる。山から森へ、森から里へ、果てもなく吹きすさんで行く木枯は、どこまであの寒い唸り聲をたてゝ行く事であらう。野を吹き里を吹きして行つたその果ては、やがて海に落ちてあの凄じい波の音となるのであらうといふのである。それを風の果ては海の音にあるのだと言つた所に、此句の面白味の全部がある。しかしそれは風そのものゝ姿を言ひおぼせたのでもなれば、風を聞く人の心境に深く觸れてゐるのでもない。要するに小さかしい主觀から生れた一種の解釋にすぎない。それも「果てを聞きけり」なら、まだ聞く人の心もちに觸れて居てよいが、「果てはありけり」では全く説明に墮して救ふ餘地がない。世間的に名高い句は、概して此種の小主觀をもこゝした分り易い小理窟を述べた



ものが多い。即ちさうした小理窟を含むが故に、汎く俗人に喜ばれるのである。この風の句などは、吹いて行く風の音の果ては何處だらうといふ着想に、決してつまらぬ點はないのである。否寧ろそれは極めて詩的な考にちがひない。しかもそれを「果てはありけり」に解釋してしまつたがために、通俗的には迎へられたが、實は藝術としての根柢を失つたのである。

才 麿

椎本氏。大和宇陀織田氏の臣で始め生駒氏に稱した。後大阪に住み、俳諧を西鶴に學び、又大淀三千風に師事した。ここもある。享保年間江戸に出て談林の一派を率ひ、晩年又大阪に歸つて天満に住んだ。元文二年正月二日八十二歳で歿した。その句集には天明五年一陽井素外の編した「狂六堂才麿發句拔萃」があるが、なほ遺漏が頗る多い。才麿が俳壇に認められ出したのは、延寶末年即ち彼の廿四五歳頃からで、随つて芭蕉に對しては寧ろ後輩の地位にある。「虛栗」や「次韻」(二書共芭蕉の條参照)の時代などには、實際芭蕉の下風に立つてゐるのである。しかし彼は結局談林の一派を支持して蕉門には屬しなかつた。且つ延寶時代から元禄を経て享保に至るまで、久しく俳壇に遊んで、蕉風以外の境地を保つてゐたのであるから、便宜こゝで説くこゝにした。

笹折て白魚のたえぐ青し

延寶九年刊の「東日記」に出てゐる。即ち才麿の初期の作である。「東日記」の中には芭蕉の「枯枝に鳥のしまりたるや秋の暮」の句も出てゐて、蕉風の萌芽が認められる言はれてゐる。その頃才麿はかうした作を示してゐるのである。芭蕉の枯淡な薄墨繪に對して、これは鮮やかな水彩畫である。鮮やかなばかりではない、もつと繊細な美しさがある。芭蕉などよりすつと細かな神経の顫ひが見られる。そして之が才麿の句に一種の魅力を持たせる所以である。さうした彼の特色はすでに夙くこの頃から認められるのであつた。だが彼の句がデリケートであればあるだけ、そこには潑刺たる力の感じが足りない。どうかすると美しく飾り立てただけで、魂のない人形のやうな句さへある。それは彼の傾向から生ずべき必然的の缺陷であらう。

鶯の細脛よりぞこぼれ梅

梅が香に更けゆく笛や御曹司

朧月たきもの薫賣がしめりかな

どれも悪い句ではない。しかしあまりに美しくこしらへ過ぎたといふ感じは確かにする。ところがまた

猫の子に嗅かれてゐるや蝸牛

五月雨や梅の葉寒き風の色

時雨そめ黒木になるは何々ぞ

などになると彼でなければ言ひ得ないと思はれるうまさがある。これは本當に詩人のこまやかな感じで見出せない境地である。



美しい皺を見せけり芥子の花  
朝顔や少しの間にて美しき

かうなると繊細美を少し強ふる傾がある。かうした世界にあまり捉はれ過ぎて居るとさへ思はれる。

思ひ出て物なつかしき柳かな

夕暮のものうき雲やいかのぼり

柔かな情緒が感ぜられる。そしてしみじみとした哀れさが伴つてゐる。しかしそれは芭蕉の句に感ぜられる深い寂しさではなくて、感傷の甘さに浸る悲しみである。才磨の句の弱さはこゝにも見られる。

素堂

山口氏。名信章。甲斐山口の郷土で、のち江戸に出で不忍池畔に寓し、天和年間また葛飾のほとりに移り住んだ。儒を林春齋に、連俳を北村季吟に學び、葛飾移居後は芭蕉等と相往來して専ら俳諧に遊んだ。俳號は始め來雪といひ、なほ素仙堂・其日庵・今日庵等の號がある。享保元年八月十五日歿、年七十五。句は「俳諧五子稿」中に集められてあり、又門人子光の編した句集もあるが、之は稿本のまゝで出版されなかつた。なほ坎窩久菴編の稿本素堂文集もあつて、五子稿と共に俳諧文庫「素堂鬼貫全集」中に收められてゐる。

小僧來たり上野は谷中の初櫻

諸曲「鞍馬天狗」に「花咲かは告げんといひし山里の使は來たり馬に鞍」といふ文句がある。これは頼政の歌をつたので、末句は「馬に鞍おけ」である。句は之をもぢつて上野谷中の初櫻を告げに、小僧がやつて來たといふのである。此句は延寶六年刊の「江戸新道」に出てゐて、すなはち談林調に心酔してゐた時の作である。素堂はもと季吟に學んだが、延寶四年芭蕉と兩吟の百韻を試みた頃には、もう宗因風を學ぼうとするのに汲々としてゐた。當時の風調を知るためにこの一句を出しておく。

浮葉卷葉此蓮風情過ぎたらむ

「虚栗」に出てゐる。荷興十唱中の一である。蓮はレンと音讀せねば一句の手柄がないと芭蕉が評したといふ。それは要するに此句全體から受ける感じが、漢詩趣味だからである。ハスと訓んではその全體の格調を破る虞れがある。前にも述べた通り素堂は漢學に相當の造詣があつて、漢詩の作も大分残つてゐる。その素養をもつて彼は俳諧に談林以外の境地を拓かうとした。天和年間の「武藏曲」や「虚栗」等の風調は、もとより彼一人の力で作り出したものではなからうが、少くとも彼がその先達の有力な一人であつた事は疑ひない。芭蕉の「俳諧次韵」(延寶九年)なども、實は素堂の風調に負ふ所が多かつたのであらう。素堂は芭蕉よりも年長で、芭蕉も常に心友として敬意を拂つてゐた。素堂の此漢詩調は、俳諧としては到底生硬たるを免れないけれども、談林の行詰つた句風を一新した功は少くない。況んや芭蕉も一度は此道を通つて、遂に貞享の「冬の日」に達したのであるから、蕉風の變遷上から見ても、この作風は注せねばならない。尤もこれも大分極端に走つた作もあつて、「去來抄」に詩か語か分らぬと冷評されたも



のなどもある。荷興十唱は右の外

鳥うたがふ風蓮露を磔てけり  
そよがさず蓮雨に魚の兒躍る  
荷たれて母にそふ鴨の枕蚊屋

青蜻花のはちすの胡蝶かな

おのれつぼみ己れ盡きてはちすらん

花芙蓉美女湯あがりて立てりけり

荷をうつて霰ちる君みずや村雨

蓮世界翠の不二を沈むらく

或は唐茶に酔座して舟ゆく蓮の楫

の九句で、いづれも同様の調である。「磔てけり」、「はちすらん」など随分無理な語法もあり、談林風な趣味もまだいくらか残つてゐるが、すべてにどこか高踏的な意氣が見える。

春日もはや山吹白く苜苦し

褪せた山吹の色と、暮の立つた苜の味とに暮春の感を深くしたのである。所謂物によつて情を生ずるもの、必しも山吹と苜とに限らないが、空しい櫻の梢、老いた鶯の聲では俳諧としての新し味がない。山吹と苜だから面白いので

ある。「續虛栗」に出てゐる句。

鎌倉にて

目には青葉山時鳥初鰓

延寶年間の作でまた談林心酔時代の句であるが、當時すでに諸書に採録されて、素堂の句中最も名高くなつてゐる。初夏の風物として時鳥と青葉とは古來歌人の詠にしばしば上つてゐる。西行も「郭公聞く折にこそ夏山の青葉は花に劣らざりけれ」とよんだ。そこへ更に江戸子の喜ぶ初鰓を持つて來た所が俳諧である。一見單に名詞の羅列に終つてゐるが、實は最初の「目には」で以下「耳には」、「口には」を類推させた所が、談林風時代の素堂には會心の點であつたのだらう。句としてはもとより大したものではないが、その輕快なリズムが諷諷に快いと、初松魚のあしらひ方がいかにも氣がきいてゐるのが、大いに人氣を博せしめた所以であつた。其角の雨乞の句をはじめ、川柳子の題材になつた俳句も大分あるが、此句などもその大關株の一つであらう。

目に青葉切りで句のなき京の夏 (柳樵廿八編)

目と耳はいゝが口には錢がいり (同 三十編)

見るべし、景氣のいゝ初松魚が大いにこの句の人氣を呼んだ事を。そして

目と山と耳と口との名句也 (柳樵三十六編)

とすつかり名句にしてのけたのである。



西瓜ひとり野分を知らぬ朝哉

路通の「勸進帳」に見える。元祿になつてからの作だ。三宅嘯山は「俳諧古選」の中にこの句を探つて、「飄然中見<sup>ニ</sup>閑雅<sup>ナ</sup>」と評してゐる。枝は折れ垣は倒れて、昨日の野分の物凄さを語る朝、もとく地べたに轉つてゐた西瓜だが、昨日とちつとも變つたさまがないといふのである。もとより幾分の滑稽味は持つてゐるが、それだけではな<sup>い</sup>。野分のあとの静けさが、その地上に横はつたまゝの大きな西瓜のさまに深く感ぜられる。嘯山の評は當れりといふべきだ。

南瓜やずつしり落ちて暮淋し

この句もいゝ。ずつしりといふ言葉も、此場合最も適切な表現であらう。

冬瓜におもふ事かく月見哉

瓜の陳列會のやうだが、ついでだから此句もあげておかう。これは梶の葉に思ふ事を書いて牽牛織女に奉るといふのを、轉じて冬瓜と月見とにした俳諧手段である。即興の句としてだけの面白味しかない。

唐土に富士あらばけふの月も見よ

此句も話書に出てゐて名高い。九月十三夜の吟である。一體後の月を賞することは、わが宇多法皇の折から始まつたことで、支那の方には無い風習である。富士は勿論我國の名山。即ち富士も後の月も、共に我日本に特有なもので

ある事を誇つた句である。やつぱり俗受けのする句で、眞の文藝的見地から見たら、價値の低いものにすぎぬ。

松陰に落葉を着よと捨子かな

芭蕉は富士川のほとりで捨子を見て、「猿を聞く人捨子に秋の風いかに」とよんだ。「いかにぞや汝父に悪まれたるか、母にうとまれたるか、父は汝をにくむにあらじ、母は汝をうとむにあらじ、唯これ天にして汝が性の拙きを泣け」と言つて、只袂から食物を投げて通つた。しかし芭蕉の心には熱い涙がにじんでゐた。わが性の拙きに泣けといふのは、又芭蕉自身に言つて聞かせる言葉でもあつた。だが素堂の此句には涙がない。「落葉を着よ」といふのは、捨てる親の心としてはあまりに餘裕のある言葉である。そこに芭蕉との性格的相違があるのであらう。

あはれさやしぐるゝ頃の山家集

「陸奥千鳥」(元祿十年刊、桃隣撰)にて出ゐる。芭蕉追悼の句で「亡友芭蕉居士近來山家集の風體をしたはれければ、追悼に此集を讀誦するものならし」と詞書が添へてある。素堂と芭蕉との交遊の狀をしのぶすがにもなるであらう。

鬼貫

上島氏。攝津伊丹の人。八歳の時すでに「來い〜といへど螢が飛んで行く」といふ句を作り、十三歳の頃松江維舟に従つて古風の俳諧を學んだが、十六歳頃から更に宗因の風にうつつた。然るに彼は俳諧の根本問題について



疑義を抱き、深く思ひを潜めた結果貞享二年廿五歳の春、誠の外に俳諧なしと悟つた。爾來此信念を以て進み、蕉風興隆時代別に伊丹風一派をなした。彼は壯年の頃筑後の柳川侯、大和の郡山侯、越前の大野侯等に仕へたが、のち致仕して大阪京都等に住み、享保以後は大阪に定住して島の内饒谷で歿した。時に元文三年八月二日、享年七十八。彼の句は明和年間太祇の編になる「鬼貫句選」によつて汎く知られ、又自選の遺稿「七車」も出版されてゐる。鬼貫がまこと、を俳諧の根本義であると提唱したのは、藝術原理としては必しも彼の創意ではない。はやく歌學に於て論じて居る所で、特に彼が心と詞とよく應ずべき事を説き、妾詞をのみ巧みにする態度を排斥してゐる如きは、公任卿の「新撰髓腦」(歌學としてまとまつた體をなしたものと最初の書)以來すでに説かれてゐる所である。故に鬼貫の説が、歌學からの暗示を多く受けて居る事は、否定する事が出来ない。しかし彼は歌學の原理をそのまゝ俳諧にうつしたのでは決してなかつた。彼自ら言つて居る通り、俳諧の根本義に對する深い懷疑が、彼をこの結論に導いたのであつた。即ちそこに達するには十分な心的體驗の道程を経て來てゐるのである。而して彼にこの體驗をさせたものは、また時代の力であつたことを思はねばならぬ。即ち俳諧に對する遊戯的氣分に懐らないで、更に何かを求めようとしてゐた俳壇全體のなやみが、鬼貫を通して個人的にあらはれたのに外ならぬ。随つて彼のまこと、の原理が、たとひ創意的のものでなくとも、彼の言説には十分の重みと力をもつてゐる。眞に藝術的根柢をもつ俳壇を出現せしめた先覺者として、彼こそはまづ第一に數へらるべき人なのだ。彼の俳論はその著「獨言」(俳諧文庫・俳書大系等)によつてよく窺ふことが出来る。彼は實際の創作では、遂に芭蕉に及ばなかつたけれども、

その俳論は單に俳諧史上に於いてのみならず、我が國文學史上最もすぐれた藝術論の一といふべきである。

### 春の水とところぐに見ゆる哉

鬼貫は「獨言」の中に、彼が自然に對する句作の態度を述べてゐる。それは要するに四季折々の草木生類すべて詳しくその所詮を辨へ知つて句にせよといふのである。所詮とはその物の本質特性など、解してよい。そして彼は「春の雨は物ごもりて淋し、夕立は氣晴れて涼し、五月雨は鬱々とさびし、秋の雨は底より淋し、冬の雨はするどにさびし」などと、四季の風物の趣を短い詞で巧にあらはしてゐる。かうした特殊の趣致を捉へるには、自分の心を自然に没入させなければならぬ。口先ばかりで言ひおほせるものではない。我が心が自然の心に通じた時、巧まずして句も歌も自らに生れる。春の水が所々に見ゆるといふたゞそれだけの事だが、この句を繰返しく誦して見ると、夏の川にも秋の水にも感ぜられない長閑な氣分が、どこからとなく湧いて來る。それが即ち所詮を辨へ知つたのであり、自然の姿に徹したのである。鬼貫の句にはかうした客觀句で、なほすぐれたものが少くない。

### 曙や麥の葉末の春の霜

軒うららに去年の蚊うごく桃の花

行く水や竹に蟬鳴く相國寺

などは、決して器用さのみで出来る句ではない。深く物の姿に見入つた時に、始めてこの詩境が眼に映するのである。



草麥や雲雀があがるあれさがる

鬼貫は「七車」の序に誠の意を解して、「乳房を握るわらべの花にふみ月に向ひて指さすこそ天性のまことにはあらめかし、いやしくも智恵といふもの出でて、その朝を待ち其の夕を樂しとするより、偽のはしとはなれるなるべし」といつてゐる。草麥——青麥のこと——の野に雲雀が高く舞ひ上り又舞ひ下る、それをそのまゝ子供の言葉で、すらくと言つたのが此の句である。それは彼の所謂まことに發した聲である。

名月や雨戸をあけてとんで出る

ひうくと風は空行く冬牡丹

これも子供の感じである。偽りはない。しかし偽りが無いといふだけで、藝術的の感興を伴つて居ない。文學としてあまりに索漠たらざるを得ない。尤もこの二句などはまだよい。名月を早く見たいといふ童心、空吹く寒い風の音に對する子供らしい表現、それはなほ讀者の興味をつなぐに足るが、この鬼貫のまことが極端に擴充された結果は、詩的感興を全く伴はない所謂たゞごとまでを、屢々彼は正しい俳諧と認めた。

禪門に入て申しける

庭前に白く咲いたる椿哉

しよろくと常は流るゝ大井川

夏は又冬がましぢやといはれけり

之等の句は、彼にとつては寧ろ窃かに得意とした所であつたかもしれぬ。第一句の如きは前書によつて見ると、禪の悟りめいた事をこの句で表はしたものと見える。しかしたとひ言句を絶した藝術の極致が、法悦の三昧境と合致しようとも、此句だけでは少くとも藝術としてはたゞごとたるを免れない。第二句第三句に至つては、誠の説の樂がきゝすぎた形である。之は確かに彼の短所の一面であつた。因にいふ第三句は嵐雪編の「其袋」によつたので、「鬼貫句選」には「冬は又夏がましぢやと言ひにけり」とある。

そよりともせいで秋立つ事かいの

彼にはかうした口語調の句がかなり多い。談林や來山の句などにも、すでに口語は用ひられてゐるが、彼の句には特に多く目につく。それは姿詞を徒らに飾るまいとする彼の主張から、當然生れるべき結果であつた。そして彼の所謂心の誠を失はないために、この調子は相當有效にはたらいてゐる。

なんと今日の暑さはと石の塵を吹く

會話語を取入れることもすでに來山などの試みてゐる所である。しかし鬼貫に於ては特に會話語と見るより、これも彼の口語調の一つとして見てよからう。

風が吹く梅のつぼみはしつかりと



鶯が梅の小枝に糞をして  
 鶯のなけば何やらなつかしう  
 春の夜の枕嗅ぐやら目が腫れた  
 いならとの花の前なりや留められぬ

之等の句によつて、彼の特色の一半は更によく窺ひ知らるゝであらう。巧まない素朴さ、言ひすてたまゝの子供の言葉、さうした特色はどの句にも見られる。只最後の句の如きは、些か口語調を濫用した傾がある。一體この口語調は、のち伊丹俳人の喜ぶ所になつて盛んに用ひられ、惟然などもその風にかぶれて、随分極端な句を作つたものである。

なほ彼の句については評釋すべきものが多いが、紙面の都合上あとは佳句と思はれるもの、及び人口に膾炙されてゐるもの十數句を選んで掲ぐるに止めておかう。

梅散てそれよりのちは天王寺  
 打暗れて障子も白し春日影  
 一鉢や折敷にのせし董草  
 又も又花に散られてうつらく

やれ壺に澤瀉細く咲きにけり

野徑に遊ぶ

秋風の吹きわたりけり人の顔  
 によつぼりと秋の空なる富士の山

契不逢戀

油さし油さしつゝ寝ぬ夜哉  
 さゝ栗の柴に刈らるゝ小春哉  
 古寺に皮むく棕櫚の寒げなり  
 麥蒔や妹が湯を待つ頬冠り

歳暮

惜めども寝たら起きたら春である  
 秋は物の月夜鳥はいつもなく  
 面白さ急には見えぬ薄哉  
 行水の捨て所なき蟲の聲  
 骸骨の上を粧うて花見哉



「秋は物の」以下の四句は世に汎く知られてゐる句である。藝術的にすぐれて居る「いふのではない。殊に最後の句の如きは、道歌的の價值以外にはとる所はなからう。

【註】 ○猫の戀(四三頁) 猫の交尾期をいふ、春季。 ○はじかみ(四四頁) 生糞。 ○花咲いて(四五頁) 花が咲いては流石に浮世に執着が残つて死にたくもないが、この病では仕方がないと歎じた句。 ○飯噲(四五頁) 噲の一種、形小さく頭に飯粒のやうなものがある。春季。「果てるげな」は一生を終るの意。 ○蘭の舟(五〇頁) 前赤壁賦に「桂柳兮蘭葉擊空明兮泝流光」これはもご楚辭によつたので桂や蘭の香をめで、それを楫や棹に作つたさいふ。蘇東坡がそんな舟に乗つて月見をしたといふ故事から、こゝでは遊女などをのせた川舟を蘭の舟といつたのである。 ○相國寺(六三頁) 京都にある禪寺。 ○なんと今日の(六五頁) 「なんと今日の暑さはひどいぢやないか」といひながら、木陰に立寄つて石の塵を吹いて腰を卸すさまである。 ○折敷(六六頁) 片木板を折曲げて作つた盆。

【第二講正誤】

- 二二頁七行 (誤)「井筒に在原寺 (正)井筒に「在原寺
- 二四頁一三行 (誤)談林千百韻 (正)談林十百韻
- 二八頁一〇行 (誤)ふるは泪か (正)ふるは泪か
- 三三頁四行 (誤)くわくわい (正)くわくわい

五、蕉 風 時 代

芭 蕉

俳諧が滑稽諧謔を主とする遊戯文學の領域から脱して、和歌や連歌と同じく立派な風雅の具として認められるやうになつたのは、芭蕉といふ一人の力によつてであつた。勿論俳風革新の機運は、談林の新調が倦きられた頃から、俳壇全體に萌して來てゐたので、前講にも述べた通りたとひ芭蕉の出現を見なくとも、俳諧の面目は必ずや何等かの形で一新さるべきであつた。しかしもし芭蕉の如く不退轉な精進の念に富み、また高潔圓滿な人格を具へた人物を得なかつたとしたら、果して俳諧があればどの高い地位にまで急に達し得たかどうかは疑はしい、少くとも俳諧文學が我國文學史上重要な一分野を占めるに至つたのは、芭蕉を中心とした所謂蕉風時代以後の事であつた。蕉風の俳諧が存したればこそ、その母胎として貞門・談林の俳諧も研究するに値ひし、又遙かに天明・明治の俳諧をも呼び起すことが出來たのである。芭蕉といふ個人の力も亦實に大きいといはなければならぬ。それで今芭蕉の經歷やその句風の變遷等を説くことによつて、自ら蕉風俳諧の變遷發達のあとをも辿る事が出来るであらう。

芭蕉は正保元年伊賀の上野に生れた(柘植生れといふ説もある)。父を松尾與左衛門(一説儀左衛門)、母をいよ(之は母が伊豫國の人であつた所から誤傳された名とも思はれる)といふ。その間に二男四女があつた。長子は半左衛門命清、次子が即ち芭蕉である。芭蕉は幼名金作、長じて忠右衛門宗房と稱した。少年の頃上野の城代藤堂家に出仕して、城主新七郎良精ヨシキミの嗣子良忠ヨシタカの侍臣となつた。良忠は貞室や季吟を師とし、蟬吟と號して俳諧を嗜んだ。芭蕉が俳



道に志すもく／＼の機縁はこゝに結ばれたのであつた。當時芭蕉は十四歳にして

犬と猿の世の中よけれ酉の年 (奥細道菅菰抄)

の吟があると傳へられてゐるが、これは確證がないので直ちに信することは出来ない。芭蕉の作として現在知り得る、最初のものは、寛文四年刊松江重頼撰の「佐夜中山」に、伊賀松尾宗房として入集してゐる左の二句である。

姥櫻 咲くや老後の思ひ出 (佐夜中山)

月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿 (同)

【句解】

1、姥櫻は彼岸櫻に似てや、花季は遅い。落花に至るまで葉がないので、老女の齒無きに比し姥櫻といふ。句はその姥といふのから思ひついた趣向で、年増女が老後の思ひ出に花を咲かせてゐるといふ意である。「櫻」と「さくや」と同じ調子を合せたのも意識的であらう。

2、「入らせ給べ」と「旅」さいひかけてあり、又入るは月の縁語である。句意は月が出るともう旅人も宿をとらねばならぬ。即ちあの月こそは宿へ導く案内者であるから、早くこちらの宿に入らつしやいさいふのである。

寛文四年は芭蕉が二十一歳の時である。句はもとより古風の作意にすぎず、たゞ彼の最初の作品として、注意すべきにとゞまる。翌五年には蟬吟の主催で貞徳十三回忌が営まれ、宗房も亦その追悼百韻に加はつた。ところが蟬吟は寛文六年四月廿五日病歿したので、宗房は主君の遺髪を奉じて高野山に登り、一旦歸國したが哀傷の情にたへずして、その年初秋同僚城孫太夫の許に、

雲とへだつ友かや雁の生別れ (繪詞傳等)

の句を残して亡命上京したといふ。但しこれは翌年の春のことだともいひ、又寛文十二年東下の折の吟だといふ説もあつて確かでない。しかしその後間もなく芭蕉が伊賀に歸つてゐて、しかも「貝おほひ」の如きかなりふざけた文辭を弄したりしてゐるのを見ると、少くともその遠からぬ以前に通世亡命などの事があつたらうとは思はれない。主君の死が若い宗房の傷みやすい心に、大きいショックを與へた事は否み難い。がさりとてその爲め直ちに彼が出家したとは思はれない。恐らく主君の死によつて自然退職となり、別に身を立てるために上京したものであらう。そして在京中俳諧を季吟に、漢學を田中桐江・伊藤坦庵に、書を北向雲竹について學んだが、數年にして彼は再び故郷に歸つた。そして寛文十二年正月には彼の處女著作たる「貝おほひ」を、上野釣月軒の寓居で撰んだ。この書は上野天満宮に奉納した三十番發句合を芭蕉が判したもので、判詞はすべて當時の流行唄の文句を取入れ、頗る遊戯氣分に満ちたものである。例へば彼自身の句を合せた一番を引用して見ると、

九番 左勝

鎌できる音やちよい／＼花の枝 露節

右

きても見よ甚兵衛が羽織花衣 宗房

左、花の枝をちよい／＼とほめたる作意は、誠に俳諧の親々ともいはまほしきに、右の甚兵衛が羽織は着て



見て我折りやといふ心なれど、一句の仕立ても悪く染出す言葉の色も宜しからず見ゆるは、愚意の手づみも申すべし。其上左の鎌のはがねも堅さうなれば、甚べがあたまもあぶなくて負けに定め侍りき。

【句解】 ちよいくは當時若衆歌舞伎の役者などをほめる時の言葉で、句意は花の枝の美しさをほめるのを鎌で切る音にいひかけたまでである。其兵衛が羽織は列詞にもある通り當時の小唄の文句であらう。「きても」は着てと来てとの言掛。句意は背の短い尻の裂けた羽織を着て、花見に来て見よといふのだらうが、小唄の出所が分らぬため十分解し難い。

右のやうな類で、後年の彼の句風のみを知るものには、これが芭蕉の句であり又文章であらうかと驚く位であらう。しかし彼の偉大な藝術も實はかうした所から出發したのであつた。寛文十二年といへば彼が廿九歳の時である。なほ當時の彼の句風を知るべく、いくらかの例をあげて見よう。

花の顔に晴うてしてや朧月 (續山井)

餅雪をしら糸となす柳哉 (同)

春風にふき出し笑ふ花もがな (同)

寝たる萩や容顔無禮花の顔 (同)

霞まじる帷子雪はこもんかな (同)

【句解】 1 晴うては物の晴れがまじさに壓倒されること。即ち花の美しさにけおされて、月は十分顔を出せないで、朧に霞んでゐるのだらうとの見立て。

2、餅雪は雪の白いのを餅に見なした語。糸の如く垂れた柳の細條に積つた雪は、自ら白糸のやうに見えるといふ句意。

3、吹出しに風と笑との縁をからませた作意。

4、容顔美麗といふ語を容顔無禮ともちつた所が句のねらひ所。しかも容顔と花の顔と二つまで顔の字が重出してゐて、技巧としても拙なるを免れない。

5、帷子雪は薄片の雪をいふ。それを帷子の地にとりなし、霞をその地に散らした小紋模様に見立てた作である。

いづれも幼稚な見立てか、文字の技巧に過ぎない作ばかりである。

かうして故郷上野に俳諧宗匠でをさまつてゐた芭蕉は、どういふ動機からであつたか、「貝おほひ」を撰んだ翌二月遠く江戸へ下ることになつた。それは或は日本橋本船町の名主小澤卜尺を頼つて行つたのだともいひ、或は小田原町の鯉屋市兵衛の世話を受けたのだなど、傳へてゐるが、恐らく當時青年の覇氣に燃ゆる芭蕉は、かの幻住庵記の一節に「一たびは仕官懸命の地をうらやみ」と言つて居る如く、田舎の宗匠生活などに懽らずして、新興の地江戸に出て大いに青雲の志をのばさうと思立つたのであらう。かくて卜尺・杉風(市兵衛)等の世話を受けつゝ功を立てる道を求めたものと見える。小石川關口の水道工事に關係したのは、この東下した當初の頃の事である。だが現世的の立身出世は到底芭蕉の性格には望めないことであつた。不幸にして當時の芭蕉の生活を知るべき確かな文献が、今日何にも残されてゐないので、單に臆測のみに止ることになるが、「ある時は佛龕祖室のとぼそに入らむとせしも」と述懐してゐる彼の事である。延寶初年の江戸に於ける芭蕉は、きつとこの物神兩面の理想を前にして、深い内的闘争と煩悶とをつゞけたにちがひない。而して結局彼は風雅の一筋につながつて生くべき道を發見した。そこに芭蕉の尊さが潜



む。もし彼が物質的小成に安んじたとしたら、遂にわが俳人芭蕉の出現は望むことが出来なかつたであらう。彼がかくて俳諧を以て身を立てようと決心したのは、江戸へ出て間もなくの事であるらしい。延寶二年にはすでに其角が入門したと傳へられて居り、翌三年には折から東下した宗因を迎へて、幽山・信章(素堂)等數人と共に百韻の連句を催してゐる。その表八句だけをあげて見ると、

延寶三卯五月東武にて

いと涼しき大徳也けり法の水	宗因
軒を宗と因む蓮池	礎齋
反橋のけしきに扇ひらき來て	幽山
石壇よりも夕日こぼるゝ	桃青
領境松に残して一時雨	信章
雲路をわけし跡の山公事	木也
或は日く月は海から出るとも	吟市
よみくせいかに渡る鴈がね	少才

(寫本談 林俳諧)

【註】「いと涼しき」の發句は「梅翁宗因發句集追加」によれば江戸本所で高野大徳院興行のをりの句だとある。發句は大徳院の住僧に對する挨拶の句で、脇句もその住僧が宗因に敬意を表した挨拶である。

桃青の號はこの連句に始めて見えるので、即ち遅くも延寶三年には改號してゐた事が分る。さうして當時彼がすでに古風の俳諧を喜ばずして、宗因の新風に傾倒して來た事は右の一卷によつても察せられる。のみならず翌四年の春、山口信章と兩吟の二百韻を催した時などは、

梅の風俳諧國にさかんなり	信章
こちとらづれも此時の春	桃青 (江戸兩吟集)

と、梅の風即ち梅翁の風調に心酔してゐるのである。かうして延寶年間には信章・信徳との「江戸三吟」、杉風との「兩吟百韻」や「田舎句合」・「常盤屋句合」等の判詞を始め、諸種の俳書にその作品を多く見出すことが出来る。以て彼が江戸俳壇に於て漸くその地位を確立して來た狀が窺はれる。ことに延寶八年四月にはその門人二十人の歌仙を收めた「延寶二十歌仙」が出版された。もとより彼は好んで門下を作ることなどはしなかつたらうが、かうして門人だけの作品が、桃青門下の廿歌仙と銘打つて世に公にされた位であるから、彼の聲望は決して他の先輩知友にも多く劣らなかつたであらう。今彼の當時の作品を少しあげて見よう。

年は人にとらせていつも若夷	(千宜理記)
命こそ芋種よ又けふの月	(同)
天稗や京江戸かけて千代の春	(當世男)
大比叡やしの字を引て一かすみ	(六百番發句合)



猫のつまへつひの崩れより通ひけり (同)

龍宮もけふの汐路や土用干 (同)

あら何ともなきのふは過ぎてふぐと汁 (同)

庭訓の往來誰が文庫より今朝の春 (江戸廣小路)

内裏誰人形天皇の御宇かとかや (同)

木を伐つて本口見るやけふの月 (同)

實にや月間口千金の通り町 (江戸通り町)

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍 (江戸蛇の館)

夏の月御油より出で、赤坂や (向の岡)

今朝の雪根深を園のしをり哉 (同)

【句解】 1、若夷は元日紙札に惠比須神の像を描いたものを賣歩き、之を門戸などに貼つて壽福を祈るをいふ。句意は若夷は毎年自分の年を人にとらせるので、いつまでも年寄らず若いのであらうといふ幼稚な趣向。

2、句の上半は「命が物種」といふ諺にもとづき、又句全體は西行の例の「命なりけり佐夜中山」の歌によつた作意である。即ち半種があつて又今年の名月にも芋が出来るといふのと、命が物種で生きて居たればこそ又今年の名月も賞せられると、兩方の意をかけたのである。

3、天祥さかけて、こは縁語。句意は京も江戸もいづれ優り劣らぬ目出度い新春だといふのである。千代の春は歳旦を千代に寄せて壽ぐ語。

4、此句は「江戸廣小路」にも同じ形で見えるが、「彼此集」、「泊船集」には中七が「しを引捨てし」となつて居り、「芭蕉句選」等はこれに従つて居る。一休禪師かつて叡山に遊んだをり、衆徒が大字を望んだので、坂本の里まで紙をついでしの字を引捨てたといふ故事によつた作で、これは叡山にたなびく霞を横書きにした一文字のし字に見立てたのである。

5、伊勢物語の樂平が二條の后に忍んで、築地の崩れから通つて行つた話をもちつたので、懸猫が龜の崩れから通ふといふ洒落である。これなどは單なる言葉の技巧に陥らず、頗る輕妙な滑稽味がある。「六百番發句合」で判者が「へつひの崩れより通らば在原ののらにや、宵々ごごにうちもねうくとこそ啼くらめ。云々」といつて勝たせてゐるのも尤もである。

6、これは土用干の句でなく汐干の句である。「上巳」を題してゐる。句は汐干のをりが龍宮の土用干にあたるだらうといふ幼稚な想像。

7、「江戸三吟」には「あら何ともなや」とやが一字多い。そして「寒さしきつて足の先迄」と信章が脇を付けてゐる。以下檀林風として是最巧妙な一卷が興行されてゐる。「あら何ともなや」は謠曲によく用ひられてある語で一種の間投詞である。それを文字通り「あゝ何ともない」の意にとつて、昨日飯汁を食つたが一向中つた氣配もなく、今日になつても何の異狀もないといふ洒落である。謠曲の詞章を取り入れるのは、檀林風の一特色であつたことは、既に述べた通りである。

8、庭訓往來は僧玄惠の著で十二ヶ月の消息往來の範を示したもので、寺小屋などで手本によく用ひたものである。句意はその庭訓往來の正月の部を、今朝の春に誰がまづ文庫から引出して手習ひする事だらうといふので、正月から書きはじめられてあ



る消息往來を、新春に取合せたのが趣向である。

9、内裏難を人形天皇と見立てたのである。「芭蕉句選」などには下五が「御字かとよ」となつて居る。

10、本口は木の本の方の切口をいふので、末口<sup>ウラ</sup>に對する語。今伐つたばかりの生々しく白い木の本口を、満月のさし出たさまに比した句である。因にいふ、この句を生々しい木の切口に月光がさしてある景色をよんだのだといふ風に解するのは、句としては面白いが、それはこの句の時代を無視した僻説にすぎない。此句がその所出の俳書の刊行年代から、延寶六年頃の作品であることが明かになれば、芭蕉が當時決して木の切口に月光がさして居る光景などを、そのまゝ句にする筈がないことも自ら分る。即ちこの句のねらひ所はそんな單なる客觀描寫にあるのではない。生々しく白いまんなる木の切口と、所謂三五夜中新月の色との相似に趣向を構へたものであることは争へない。ある作品の正しい鑑賞批評をなすべく、年代の考證事實の詮鑿等が、また決して等閑に附せらるべきでない所以がこゝに存する。又此句は普通「芭蕉句選拾遺」等によつて、中七が「本口見ばや」と傳へられてゐるが、「句選拾遺」は遙か後世の書で原據とするに足りない。之等も再案などの傍証がない限り、なるべく確實な出典に基いて句を解くべきである。

11、此句は江戸の俳人蝶々子の子息二葉子といふ少年と連句を催した時の發句で、二葉子の居が通り町にあつたから、土一升金一升の江戸の真中では間口千金にもあたると、相手の住居をほめた挨拶の句である。それに月の光りが冴え渡つて、この景色も千金に値するといふ意をかけたのである。この句に對して二葉子は脇句に「爰に數ならぬ看板の露」と謙辭を述べてゐる。

12、江戸時代には長崎に來船する蘭船の甲比丹<sup>カピタン</sup>が、三月の朔前後江戸へやつて來て將軍に謁するならばしであつた。句はオランダ人も春になると馬に鞍おいて、はる／＼花のお江戸までやつて來るといふのであるが、下五字は謡曲鞍馬天狗などに取ら

れて名高い頼政の歌「花咲かば告げんといひし山里の使は來たり馬に鞍おけ」によつたのである。「カピタン」もつくばはせけり君が春」も恐らく同じ頃の作であらう。いづれも日本の威光を見せた所がある。

13、御油<sup>ゴユ</sup>、赤坂は東海道五十三次中、最もその宿<sup>しゆく</sup>の間の距離が短い所である。僅か十六町しか無いといふ。句は夏の夜が短くて月も出たかと思へばすぐ明けてしまふのを、御油から出て赤坂に入る間しかないと喩へたのである。「赤坂や」のやは歌辭。

14、根深は葱のこと。しをりは道しるべのために途中の枝を折つておくこと。句意は今朝は一面に雪が降つて、どこが闇かどこが路かの區別さへもつかぬが、只その中に青く見える葱だけが、闇の目じるしだといふのである。

いづれも全く談林風の作意で、どこかに一と趣向を構へてないものはない。素直に自然に對して、その詩美を會するといふやうな事は、當時の芭蕉にはまだ望めないことであつた。だが延寶末年の頃はすでに俳壇全體が、何か新しいものを捉へようと動き出してゐた時で、芭蕉自身にとつてもまた漸く句風一新の兆を見始めたのである。延寶八年には信徳等の七百五十韻に次いで、之を千句満尾させるため「俳諧次韻」二百五十句を興行した。其角・才丸・楊水との四吟である。そのはじめの數句を引用して見ても、

鷺の足<sup>シジ</sup> 雉<sup>シ</sup> 脛<sup>シ</sup> 長く 繼ぎ 添へて 桃 青  
這<sup>コ</sup> 句<sup>コ</sup> 以<sup>テ</sup> 莊<sup>テ</sup> 子<sup>ヲ</sup> 可<sup>レ</sup> 見<sup>ル</sup> 矣 其 角  
禪骨の力たわゝになるまでに 才 丸



しばらく風の松にかしき 楊水

【註】「鶯の足云々」は七百五十韻中最後の一卷の五十句目なる「又かかねての春もあるべく 常之」の句に於いて、發句ではない。随つてこれを芭蕉の俳句集等に加へてあるのは誤である。句は次の其角の附句で説明して居る通り、莊子駢拇篇の「長者不爲有餘、短者不爲不足、是故堯舜雖短續之則憂、鶴脛雖長斷之則悲」といふ寓言に基いてゐる。即ち前句の「重ねての春」といふのについて、永日の春に縁ある長い足をもつて來たので、且つすでに七百五十韻の長々しい鶯の足に、更に二百五十韻の無用な雉の脛をつぎ足すといふ意を寓してある。

の如く、著しく從來の句風と趣を異にしてゐる。一體芭蕉はこの頃頗る老莊趣味に耽溺してゐたものらしく、「田舎の句合」の序には「判詞莊周が腹中を呑んで希逸が辯も口にふるす」といひ、自ら栩栩齋（莊子齊物論の「栩栩然蝶也」によつた號）の別號を用ひて居るのもその凝り方が分る。勿論何といつてもまだ當時の句風の基調は、談林の滑稽を離れてゐなかつたので、只老莊趣味から來た漢語調の言ひ廻しが多少の清新味を齎らしたといふにすぎない。しかしこの傾向はやがて次の「虛栗」に相接するもので、芭蕉の句風の變遷上見のがす事の出來ない一時期であつた。翌天和元年に刊行された言水の「東日記」には桃青の發句が十五句出てるが、そのいづれにも舊套を脱しようとする努力のあとがうかがはれる。例へば

愚にくらく棘をつかむ登哉  
枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

いづく時雨傘を手にかけて歸る僧

【句解】 1、笠をつかまうとして棘をつかんだ愚かさをよんだのである。上五文字には人間の愚に迷ふ心の闇の意を寓して居る。  
2、このまゝの寫生句である。のち「曠野集」に入れるをり中七を「鳥のさまりけり」と直した。一般にはこの直したのちの形で知られて居る。

3、傘を手にかけて僧が歸つて來るが、どこかで時雨がしたのだらうかといふ意。目前の景は勿論暗れてゐるのである。

等、よほど句風の變遷が窺はれる。一は棘を掴む滑稽さがよんだものであるものゝ、迷ひの愚かさを嘲る哲理的な背景が濃く出てゐるし、次は「鳥のとまりたるや」といふ表現の形式がまだ談林風を離れてゐず、内容も漢語の寒鴉枯木を翻譯したゞけのものにすぎないが、かく閑寂枯淡な景をそのまゝ句にしたやうなものは、從來全く見ない所であつた。最後の作にも句面以外の煩はしい趣向はない。一體「東日記」はその序文の中に「これより先き三度句帖を顯はし三度風體をかへて三度古し」とある通り、この撰集そのものがすでに句風革新の努力を物語るものであつた。しかも芭蕉は最もよくその革新の實をあげ得たので、「枯枝に」の吟の如きは、實に蕉風俳諧の端をこゝに發するものと言はれる位である。

芭蕉はこれよりさき延寶八年（天和元年といふ説もある）の冬、深川六間堀の杉風の別墅に移り住んだ。門人李下に贈られた芭蕉を植ゑて芭蕉庵と號した。天和二年刊の千春撰「武藏曲」に

茅舎の感



芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉

深川冬夜の感

櫓の聲波を打つて腸氷る夜や涙

【句解】 1、野分の爲に戸外には芭蕉の葉がばさばさ〜と烈しく音を立てて居り、枕元には雨漏りの雫が盥にぼと〜と聞えるといふ危しい感じをよんだのである。幸田露伴博士は盥を手水盥であると解して、「常に芭蕉に雨をきくのであるが、こゝではそれが野分に折れてしまったので、盥にそれをきくのである」(續々芭蕉俳句研究)と、言はれてゐる。一解ではあるがどうも雨漏の盥の方が趣があるやうだ。「芭蕉野分して」といふ如き字餘りは、なほ談林の餘風を存して居るのである。

2、深川の寒夜波を打つて響いて来る櫓聲に、斷腸の涙を流す想ひをよんだのである。句境は全く談林の臭味を脱してゐるが、句形は前句と同じくまだ異風たるを免れない。

等とあるのは當時の庵居のさまである。だがその草庵も天和二年師走の急火に焼かれ、芭蕉は水に投じて殆んど命からく〜猛火の圍みを脱した。其角は「芭蕉終焉記」に「これぞ玉の緒のはかなき初め也。爰に猶如火宅の變を悟り、無所住の心を發して」を記して居る。芭蕉が爾來一所不住の行脚をつゞけて、身を野さらしと觀じたのは、實にこの偶然な災厄が深く彼の心を動かしたのであつた。庵を焼かれた芭蕉は一時甲斐地方に流寓してゐたが、翌三年九月素堂・其角等の幹庵で深川芭蕉庵が再建されたので、再びこゝに歸り住んだ。而してその再入庵に先つて、其角の撰んだ「虚栗」が世に公にされた。この書は「次韻」、「武藏曲」について談林から蕉風にうつる過渡期の句風を最もよく代表してゐるものである。今「武藏曲」とこの書の中から芭蕉の句を少し抄出して、天和時代の彼の風調を示さう。

梅柳さぞ若衆かな女かな (武藏曲)

貧山の笠霜に啼く聲寒し (虚栗)

ろくひすを魂に眠るか嬌柳 (同)

憂方知酒聖貧始覺錢神

花にろき世我が酒白く食黒し (同)

和角蓼螢句

あさがほに我は食くふをとこ哉 (同)

憶老杜

髭風を吹いて暮秋歎ずるは誰が子ぞ (同)

茅舎置氷

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり (同)

【句解】 1、梅と柳を一つは美しい中にもきりつとした所のある若衆(美少年)に、一つはたをやかな女の姿に見立てた句である。「さぞ」は「いかにも」といふ程の意。見立ての句ではあるが、梅柳の情趣を靜かに味はつてゐる心もちがある。

2、貧山は貧寺の意。笠が霜に鳴くといふのは、支那の豊山の鐘が霜夜にはひとりでに燃然と鳴るといふ故事(日本でも高砂の尾上の鐘が霜夜に鳴るなど歌に作られてゐる)をもちつたのである。句は貧乏寺の炬にかけた笠が、霜夜にじい〜と鳴る。



その聲がいかにも寒く感ぜられるといふので、古い註釋書に「言葉の續きこはしけれど、淋しみ言外に有て尤正風といふべし」と言つてゐるのは適評であらう。即ちなほ文字の用法に借風生硬な點はあるが、佗びとさびとかいふ心境には、すでに十分通ずる所がある。因にいふ、この句原本に「啼聲寒し」とあるので「啼く聲」と詮假名したのであるが、實は啼も鳴の意に用ひたので、「鳴る聲」とよませるつもりかも知れない。

3、莊周は夢に胡蝶になつたといふが、あのをくしだれた柳はいかにも眠つたやうな姿だが、それは何を夢みて居るのだらう。折から優しく啼く鶯こそは、その柳の夢中の魂だらうといふのである。「魂に」は「魂として」の意。此句も莊子などから思ひついた趣向で、まだ蕉風としては興味中心な所がある。

4、前書は白樂天の詩句で貧居のさまをよんだものである。句は世間は花盛りで浮れさわいで居るが、我が貧居は酒は白い濁酒、米は黒い半搗米で、陽氣な花見気分にもふさはぬといふのだ。前書の酒の聖といふのは清酒をいふので、随つて句中の白い酒といふのは濁酒をいつたのである。

5、前書は同じく「虚栗」中にある其角の句「草の月に我は盡くふ螢哉」(「盡くふ虫もすきん」といふ俚諺によつて、自らかたよつた性癖のあることを寓した句)に唱和したといふ意である。一體其角は酒を好んで遊里に沈溺したりする事もあつたので、芭蕉は自分そんなしやれた事は出来ない、朝顔の開く頃から起きて飯食ふだけの平凡な男だと答へたのである。夜更かしの酒飲みに対して朝起きの飯食ひを對させたのだ。多少其角を諷する意もあつたかも知れぬ。とに角此句は其角の句に對して始めて、味はよるべきで、一句獨立して解いては不十分である。

6、前書は杜甫の詩句「杖藜嘆世者誰子、泣血迸空回白頭」の句を憶つて作つた句だから、かく題したのであらう。句の「髭風を吹いて」といふのは、「風髭を吹いて」といふべきをわざとかく言つたので、所謂倒語法である。例へば杜甫の秋興八首中に「香稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝」の句があるが、これは「鸚鵡啄餘香稻粒、鳳凰棲老碧梧枝」の意をそのままに言つては平凡だから、わざと倒装法を用ひて奇趣あらしめたのである。(この杜甫の倒語は名高い例であるから、或は前書の「憶老杜」といふのも、句中の倒語に主きをおいて言つたのかもしれない。)句意は淋しい風に粗髯を吹かせて、暮れゆく秋を歎じてゐるのは誰だらうといふので、「誰が子」とは自分のことを暗に句はせたものであらう。

7、この句も莊子逍遙遊の「偃風飲河、不過滿腹」の語(どぶ鼠が大河の水を飲んでも、その小さな腹一杯を満たすに過ぎないといふので、物には分があり足るを知るべきことの喩)によつた作で、僅かの水で渴を醫したといふだけの作である。但し「氷苦く」といつたり、前書にわざと「氷を買ふとあつたりするので、芭蕉が病床にでもあつた時の吟かと思はれる。

「虚栗」は古來芭蕉の句風變遷上最も重要な一時期を劃するものとして、芭蕉研究家に所謂虚栗時代と稱せられるくらゐである。それは句形の借風贅牙な點に於て、或は又故らに險奇晦澁を銜はうとした點等に於て、談林風のな好みを全く脱しては居ないが、その句境はすでに幽玄閑寂の詩趣に觸れ、頗る高踏的な意氣を示してゐる。芭蕉は自ら此書の終りに、跋して「芭蕉洞桃青鼓舞書」と署し、李杜の心酒を嘗め、寒山が法粥を啜つて、しかも白氏(白樂天)が歌を假名にやつさうといふやうな事を述べてゐる。彼が李白や杜甫の詩腸を探り、寒山拾得の禪骨を味はつて、之を俳諧にうつさうとした抱負が明らかに見える。尤もこの漢語などを交へた險怪な調は、必しも「虚栗」乃至芭蕉一派だけの特色でなくて、當時の一般の風調でもあつた。たゞ芭蕉の詩眼が特に傑出してゐた爲に、その形式の末のみに捉はれないで、よく李杜の詩境に通じて蕉風の正しい進路を開拓し得たのであつた。勿論この頃までは芭蕉といへど



も、まだ形式の奇を喜んで内容の正を顧みない弊は少くなかつた。しかし過渡期の一現象として、殊に平俗を離れて高雅に赴かうとする際として、かゝる耳遠い漢語を用ひたり、故らに語を顛倒したりしたのも決して無理ではなかつた。後年享保以後の俳壇の俗化を濟はうとして、加賀の麥水が革新運動を起した時に、まづ俗調を脱するには平易通俗の語をさけて、寧ろ難解奇僻の言を用ふべしとして、この「虚栗」の調にならつて「新虚栗」を出したのもこれが爲めである。さてかうして「虚栗」に至つて、蕉風の第一歩は先づ踏み出されたといつてよい。連句についてはこゝに多く説く餘裕がないので畧するが、これも「虚栗」に至つては、發句以上に「冬の日」などの詩境に著しく接近して居る事が認められる。

貞享元年八月、芭蕉は門人千里を伴つて故郷の伊賀に旅立つた。彼は出發の始めに、

野ざらしを心に風のしむ身哉

【句解】 旅に出たならば何處の野末で果てるかもしれぬ。さうして野ざらしになることを覺悟してゐると、秋風が特に身に入みて覺えるといふ意。「心に」といふのは極めて複雑な味をもつた表現であるが、まづ「さういふ心をもつてゐて」、即ち「野ざらしを覺悟してゐて」といふ位に言ひかへてよからう。

こ悲痛な覺悟を抱いてその旅程に上つたのであつた。この句にはもはや技巧も術氣もない。彼の心のそのまゝの叫びである。醇厚なる蕉風の趣教が十分に味はれる。かくて彼は東海道を經て伊勢に出で、九月の始め頃故郷に歸つた。それから更に大和の國に行脚して、千里の舊里葛下郡竹の内に暫く足をとどめ、吉野まで行つて引返し、近江・

美濃を經て名古屋にやつて來た。こゝで芭蕉七部集の第一に數へられる「冬の日」、即ち尾張五歌仙が成つたのである。さうして一旦伊賀に歸つたが、翌年また奈良から京に上り、三井秋風や伏見の任口上人などを訪ね、近江・美濃をすぎて、熱田の桐葉子の許に淹留日を重ねた。さうして初夏の頃木曾路から甲斐を經て卯月の末深川の草庵に旅裝を解いた。この間九ヶ月間の紀行が「野ざらし紀行」又は「甲子吟行」等と呼ばれるものである。その中の句はもはや「冬の日」とほぼ時代を同じくし、なほ多少の談林臭を残してゐないのではないが、芭蕉の句として十分藝術的鑑賞に堪ふべきものであるから、この以後の句はすべて之を最後に一括して評釋することとし、一先づ芭蕉の經歷を述べ終へる事にしよう。

貞享三年には尾張蕉門の人々が「春の日」を編んだ。「冬の日」につゞ蕉風の代表的撰集で、その中にはかの名高い

古池や蛙とび込む水の音

の句も見えるのである。この句は世に芭蕉が俳諧の心眼を開いた劃期的の作として喧傳せられるもので、「冬の日」になほ奇矯の調を帯びて居るのに對し、これは頗る平淡の味を加へて、蕉風の圓熟境に向はうとする傾を示してゐる。翌四年には曾良・宗波の二弟子を伴つて、常陸鹿島に月を見、根本寺の佛頂和尚を訪ねた。和尚は江戸に留錫中芭蕉がついて禪を修めた師である。この時「鹿島紀行」が成つた。それから間もなく十月には吉野行脚へと出かけた。その旅中の有様は「笈の小文」(又「芳野紀行」)、「卯辰紀行」等とも呼ばれる。に詳しく記されて居る。その冒頭に彼は百骸九竅の中に物有り。かりに名づけて風羅坊といふ。誠にうすものゝ風に破れ易からんことをいふにやあらむ。



かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす。或る時は倦いて放擲せん事を思ひ、或る時は進んで人に勝たむ事をほこり、是非胸中に戦うて是がために身安からず。暫く身を立てむ事を願へどもこれがために障へられ、暫く學んで愚を曉らん事を思へどもこれがために破られ、終に無能無藝にして只此一筋につながら。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、その貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの造化に隨ひて四時を友とす。見る所花にあらずといふ事なし。思ふ所月にあらずといふ事なし。儂花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。

【註】 ○百骸九竅 人の身體をいふ。百骸は多くの骨節、九竅は二目二耳一口二陰の九孔をいふ。○風羅坊 芭蕉の別號。芭蕉

の號は芭蕉の風に破れ易いのを愛したので、風羅といふのも同じ心もちで名づけたのである。○狂句 俳諧のこと。

○これが爲に 三ヶ所の「これ」も次の「此一筋」もすべて狂句即ち俳諧をさしてゐる。

と言つて、自ら俳諧に身を委ねた経路を叙し、又風雅が造化と通ずる理を説いて、彼の詩人的態度を明らかにしてゐる。之をかの「幻住庵記」と併せ味讀したならば、芭蕉俳諧の眞骨頭を得るものがあらう。誠に芭蕉の風雅はこゝに至つて天地の活機に悟入し、圓融無碍の自在を得たのであつた。さて神無月の初空定めなきけしきに、風葉の行末なき身を觀じて、

旅人と我が名よばれむ初しぐれ

と首途の一句をよみ、三河の伊良古崎に杜國を訪ねたり、熱田に暫く滞在して尾濃の門人と相會したりして、師走の十日あまりに故郷に入つた。翌春伊勢に遊び、更に萬菊丸(杜國のこと)と相携へて吉野の花を賞し、高野・奈良・須磨・明石と經廻り、そこから引返して五月近江・美濃を経て尾張にやつて來た。尤も「笈の小文」には須磨で平家の昔を偲んだ所まで筆を擱き、その後の事は記してない。尾張から彼は越人を伴つて更科の月を見、それから善光寺に詣で、九月江戸に歸つた。さうして

木曾の瘦せもまだ直らぬに十三夜

と、歸庵してすぐ又後の月を見る情を述べてゐる。この更科の月見を記したものが、即ち「更科紀行」である。

翌年は元祿二年である。この年尾張の荷兮はまた「曠野」を撰んだ。芭蕉は遙かに序を送つて、その「冬の日」「春の日」二集の光をつぐべき由を述べた。三月草庵を人に譲り、門人會良と二人かの奥羽の大行脚に出かけたのである。江戸を立つたのは彌生も末の七日、曙の空朧々として有明の月影に愁思たへ難い折であつた。かくて日光・白河・松島・平泉を經、尿前ウツマエの關から出羽に入り、三山・象潟を巡遊し、越後を過ぎて七月加賀についた。それから山中の温泉に浴し、そこで會良と別れて越前・若狹を經九月美濃の大垣に入つた。こゝに門人等と相會してかつ悦びかついたはつたが、旅の物うさもまだ止まないのに、伊勢の遷宮を拜まうと又舟に乗つて、

蛤のふた見に別れ行く秋ぞ

と人々と袂を分つた。その間の紀行がかの名高い「奥の細道」である。この書は芭蕉の俳風の最も圓熟した時代の作



品であつて、「猿蓑」と共に蕉風俳諧の精髓と稱すべきものである。彼が自然詩人として、透徹した觀察と沈潜した靜思とを以て、いかに天地の幽韻を傳へ造化の機微を闡いてゐるか。それは彼の大文章に直ちに參するものゝみが、始めて傾會し得る所であらう。さて伊勢から一旦故郷に歸つた彼は、更に近江に遊んで湖南の門人たちの許に流寓してゐた。かの石山の奥なる幻住庵にしばし閑を樂しんだのもその間のことで、そこに元祿三年四月から九月頃まで筇をとめてゐた。九月庵を出て粟津木曾塚の無名庵に入り、元祿四年の春を迎へた。この湖南流寓の間に、膳所の濱田氏珍碩によつてさきに「ひさご」が撰ばれたが、この年また去來と凡兆との撰になる「猿蓑」が出来上つた。前者は芭蕉・珍碩・曲水・路通・乙州等の歌仙五卷を收めた小冊子であるが、なほ正風の鴈を見せたものとして推稱せられ、後者に至つては正に蕉門撰集中の白眉として、世に定評がある。句風は温雅の間に俊邁の氣を藏し、平易にしてしかも膚淺に陥らず、所謂幽玄閑寂の趣致が最も渾然たる形で發露されてゐる。許六が之を俳諧の古今集と稱して尊んだのも尤もである。誠に蕉風の圓熟境は、最もよく此集の中に示されてゐるといつてよい。

同年四月芭蕉は門人去來の別莊なる嵯峨の落柿舎に入つて、十餘日をそこに暮した。その間の日記が即ち「嵯峨日記」である。それから京・近江の間をさまよつて十月江戸に向つた。途中江東平田の李由や三河新城の白雪等の許を過り、十一月初めに江戸に歸りついた。去々年三月奥羽の旅に上つてから丁度滿二年八ヶ月目である。

都 出 て 神 も 旅 寝 の 日 數 哉

(己が光)

ともかくもならでや雪の枯尾花

(北の山)

の二吟は、この歸東の時の作であるといふ。芭蕉庵は三年前出發のをり人に讓つてしまつたので、今年は橘町の假寓に冬籠りして、翌元祿五年の春を迎へた。五月半ばの頃深川舊庵のほとりに、また芭蕉庵が再興されたのでこゝに入り、爾來門を閉ぢて客を謝し、自ら「閉關の説」を作つて戒めた。その一節に

人生七十を稀なりとして、身の盛なることは僅に二十餘年なり。初めの老の來れること一夜の夢の如し。五十年六十年の齡傾くより、あさましくくづほれて、宵寝がちに朝起きしたる、寢覺の分別何事をか貪る。(中略)唯利害を破却し老若を忘れて、閑にならんこそ老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辯あり。出でゝは他の家業を妨ぐるも憂し。孫敬が戸を閉ぢて、杜五郎が門を鎖さんには。友無きを友とし、貧しきを富めりとして、五十年の頑夫自ら書し自ら禁戒となす。

朝 顔 や 晝 は 鎖 お ろ す 門 の 垣

と言つてゐる。老來漸く行脚の勞苦にも耐へ難くなつた彼は、こゝに閉關して靜かに性を養ひ情を慰めようとした。「人來れば無用の辯あり、出でゝは他の家業を妨ぐるも憂し」といふのは、全く人を厭ふの念ではなくて、暫く俳諧の風魂を臆裡に養はうといふのであつた。されば時には岱水の亭を訪ね、或は許六や酒堂を引いて俳を談じた。ことに酒堂の「深川集」は、彼が東下して芭蕉庵を叩いて居る間に成つたものであつた。この書また芭蕉晩年の風格を示すものとして、「炭俵」と共に著聞するものである。

元祿六年も深川の草庵で暮した。五月許六が木曾路を経て舊里に歸るのを送つて、「柴門辭」を作つた。その中には



又芭蕉の風雅論を見るべき言葉が多く、或は「予が風雅は夏爐冬扇の如し、衆にさかひて用ふる所なし」(夏爐冬扇とは實用を離れたる意)と喝破し、或は「其細き一筋を辿り失ふこと勿れ。なほ古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよと南山大師の筆の道にも見えたり」(細き一筋とは風雅の神髓を言つてゐる。南山大師とは空海の事。)と教へてゐる。翌七年の春も同じく深川で迎へた。野坡等の編になる「炭俵」がこの前後に成つた。この集は芭蕉晩年の變風を最もよく代表するもので、所謂高く悟つて俗に歸するといふ彼の理想の一面がこゝにあらはれて居るのであつた。輕みを喜ぶ野坡一派は、後年之を以て蕉門の法華經とまで崇めたのであるが、しかし爲めに一方平俗に墮する端緒が開かれたのもあつた。同じく當時の句風を代表する「別座敷」もこの頃子珊によつて撰ばれた。その序に「麻の生平のひとへに衣うちかけ、身輕くなり行く程、翁近く旅行思ひ立ち給へば別座敷に伴ひ、春は歸庵をうち歎きて」云ある如く、この頃又芭蕉の心には旅行の思ひがたえず浮んでゐた。さうして五月上旬いよいよ江戸を立つことになつた。この度は西國にわたり長崎にもしばし足を止めようといふ豫定であつたから、門人たちも特に名残を惜んで川崎あたりまで見送つた。

麥の穂を力につかむ別れ哉

と留別の句を残して、芭蕉は一人飄然と東海道を西へと辿つた。思へば之が江戸と永訣の時であつたのである。途中大井川の川止にあつて島田の塚本如舟の許に逗留し、尾張・尾賀を経て京に上り、久しぶりで去來・丈草等の門人と相會した。七月一度郷里に歸つて盆會を營み、そこから支考惟然と共に九月奈良を経て大阪に向つた。さうして住吉に

詣でたり、車輦や畦止の亭で連句を興行したりして、九月二十六日園女の招きに應じてその家に赴いた。

白菊の目に立てゝ見る塵もなし 芭蕉

紅葉に水を流す朝月 園女

と主客の挨拶があつて、以下歌仙一卷が催された。この日饗應の中にあつた茸を多食したのが基になつて、芭蕉は二十九日の夜から下泄甚しく、始め之道亭に病を養つてゐたが、容態が益々悪くなるので、御堂裏花屋仁左衛門の裏座敷をかりうけて、そこに病床を移した。かくて支考・惟然はもとより、膳所の正秀、京の去來、天津の木節・乙州・丈草、平田の李由等も馳せ集り、江戸の其角さへをりよく來合はせて、各々看病につとめたけれども遂にその効なく、十月十二日申の刻眠るが如く寂を示した。享年五十一歳であつた。その夜遺骸は竊かに川舟で伏見に送り、十三日朝伏見から大津に着いた。さうして十四日の夜遺言に従つて義仲寺境内に埋葬したのである。その終焉のさまは其角のものした芭蕉終焉記「枯尾花」、及び支考の「笈日記」等によつて詳しく知ることが出来る。なほ芭蕉病中の日記として、世に「花屋日記」といふ一書が傳はつて居るけれども、これは後世の偽作でそのまゝ信ずる事は出来ない。

### 芭蕉傳記參考書

芭蕉の傳記について參考すべき書は甚だ多いが、明治以前の木版本は容易く入手し難いから、その翻刻本のあるものゝみに止めた。尤も重要なものは大概翻刻されてゐるので、これ以外のものは特に見る必要はさし當りなからう。なほ芭蕉の句解及び彼の藝術全般に關する參考書は最後にあげる事にする。



○芭蕉行狀記 路通著、元祿八年刊。  
師に勤賞されたこと傳へられる路通が、師の歿後追善のために編じたもので、年代が古いだけ信用すべきものである。今俳書集覽中に收められてある。

○芭蕉翁全傳 竹人著、寶曆十二年刊。

伊賀の門人土芳の口傳に基いて記されたもので、参考とすべき點が多い。大阪天香堂刊古俳書文庫中に收められてある。

○芭蕉翁繪詞傳 蝶夢著、寛政五年刊。

蝶夢は最も忠實な芭蕉研究家で、本書も相當信すべき資料によつて、芭蕉一生の傳を記したものである。芭蕉傳として最も汎く知られたもので、特にその挿繪が面白い。博文館の俳諧叢書中に收められ、又單行本(富山房刊)もある。

○芭蕉翁略傳 湖中著、弘化二年刊。

湖中も名高い芭蕉研究家である。近時翻刻本が出来た。

○芭蕉庵春秋 素蓮著、嘉永六年稿。

元祿元年の條までしかないが、極めて學究的な好著である。從來稿本のまゝで傳はつてゐたのを、近時萩原羅月氏によつて刊行された。

○芭蕉庵桃青傳 内田魯庵著。明治三十年刊。

これは博文館刊俳諧文庫芭蕉集の附録として添へられたもので、明治になつてから出た芭蕉傳中最も精細なもの、最初といつていゝ。魯庵氏はなほ同文庫素堂鬼貫全集の附録に芭蕉の後傳をもつてゐる。併せ見るべきである。

○芭蕉論考 佐藤紅綠著、明治卅六年刊。

小冊子で手頃にまとめてある。

○評傳芭蕉 天生目杜南著。明治四十二年刊。

著者獨特の見方がしてある。

○俳人芭蕉 山崎藤吉著、大正五年刊。

初學者者には分り易い。

○芭蕉研究 樋口功著、大正十二年刊。

從來の研究を集大成した觀があり、且つ著者の獨創的見解もあつて、此種の研究中白眉のものである。

○詩人芭蕉 萩原羅月著、大正十五年刊。

最も豊富な資料によつて、諸家の説を比較論評しつゝ、詳細な記述をしてゐる。芭蕉研究家必讀の書であるが、初學者者には考證がやゝ煩はしきに過ぎる虞れがあるかも知れない。

次に芭蕉の貞享以後の作品中、代表的なものを選び出して評釋を加へよう。句の排列は句風の時代的變遷を知る便宜上、大體年代順にあげることにした。句の下に註したのはその作句年代と、出所とした俳書の名である。

道のべの木槿は馬にくはれけり (貞享元年 野ざらし紀行)

紀行には「馬上吟」と前書がついてゐる。自分の乗つて居る馬が、馬士が一寸立止つてゐる間か何かに、路傍の木槿をばくりと一口食つてしまつた眼前の即景を、そのまゝ句にしたのである。これを「出る杭はうたれる」といふ教訓的の寓意があるやうに解するのはいけない。或説に芭蕉の禪の師である佛頂和尚が、芭蕉に俳諧の如き綺語を弄することを戒められた所、芭蕉は「俳諧は只今日の事目前の事にて候」といつて此句を即吟した。すると和尚は「善哉々々俳諧もかゝる深意あるものにこそ」と感じて、以後は俳諧を制しなかつたといふ。これは勿論實説ではあるまいが、少くとも此句の眞意を領した逸話として面白い。この句には確かに禪味を帯びた所がある。鬼貫の「庭前に白く咲いたる椿哉」と相通する趣をもつてゐる。しかも此種の句は往々にして藝術的感興の稀薄な結果、ひとりよがりの理窟といや味とさうして結局平凡とに陥る虞れがある。然るに此句は流石にさうしたわざとらしい厭味から脱して、眼前の即景を淡々と描き去つた所に妙味が存する。素堂はすでにこの紀行の序に「山路來ての菫道ばたの木槿こそ此吟の秀逸なるべけれ」と評し、許六は「滑稽傳」の中に談林を見破つてはじめて正風體を見届け、躬恒貫之の本情を探つた句だと稱讚してゐる。

秋風や藪もはたけも不破の關 (貞享元年 野ざらし紀行)



新古今集「人住まぬ不破の關屋の板庇荒れにし後はたゞ秋の風」をふまへた作である。芭蕉が通つた頃は勿論その板庇の趾すらもない。昔のあとには藪となり島となつて、物悲しい秋風が空しく吹いてゐるだけだ。そこに立ち盡した芭蕉は、この藪も島も古への關屋の趾であらうと、感慨深い歎息を洩らした。それがこの句である。

明ほのや白魚白きこと（貞享元年）一（野ざらし紀行）

伊勢の桑名での吟である。紀行には句の前に「草の枕に寝あきてまだほの暗き中に濱の方に出て」と記してある。芭蕉が旅寢の曉の所在なきに、宿を出てふら／＼海岸を散歩してゐると、折から濱に引上げられた白魚が、まだほの暗い中にくつきりと白く見えた。しかもそれが一かたまりの白さでなしに、長さ一寸ぐらゐの白さが一つ一つ鮮かに眼に映つた。「白きこと一寸」といふ叙法が、この情景をはつきり描き出してゐる。一寸といへば冬の末から春の初め頃へかけての白魚の大きさだといふから、この句は益々實景を十分に捉へてゐるわけだ。沼波瓊音氏の解に、「あけぼのや」の大景に「白魚」の繊細が對照された點を説いてゐるのも面白い。なほ支考の「笈日記」によると、此句はもと上五「雪薄し」とあつたのを後に「明ほのや」と直したのだといふ。芭蕉が推敲のあこを見るべきである。

山路來て何やらゆかしすみれ草（貞享二年）

紀行によると「大津に出づる道山路を越えて」とあるから、逢坂山あたりでよんだらしい。ところが其角の「新山家」、越人の「鵲尾冠」等をはじめ數書には箱根山での吟だと傳へて居り、又「數箱物語」には尾張の白鳥山での吟として記されてある。しかし紀行は芭蕉自身のかいたものであるから、それを正しいとする外はあるまい。且つよし箱根

山での吟であつたとしても、場所の如何は此句の解釋上さして必要な問題ではない。それがどこかの山路でさへあればよい。旅人がその山路でふと見つけた一莖の菫草、普通路傍で見ても大して心も惹かれないのに、かうした寂しい山中で見つけると、異境で知人にめぐりあつたやうな氣さへする。何となくつかしまれてじつとその可憐な花に見入らずには居れない。「何やらゆかし」とぼんやり言つた所に、その取りとめもなく一莖の花に心が惹かれて行く情が、よくあらはれてゐる。大きくいへば芭蕉が自然に對する愛の發露である。否更に人間に親しむ真情のあらはれである。だがそこまでは言はぬ方がよい。どこまでも何やらゆかしいほのかな情の動きである。此句初案は「何となく何やらゆかし」であつたといふ。これはまたあまりに漠然としすぎてゐる。やはり山路といふ境地が定まつてゐる方がよい。

湖水の眺望

辛崎の松は花より臙にて（貞享二年）

其角の「雜談集」によると大津尙白亭での吟だとし、千梅の「鎌倉海道」には此句に千那が「山は櫻を絞る春雨」と付けた脇句があるのを證として、堅田の千那亭での作だといつてゐる。しかしこれも作つた場所の如何は解釋上殆ど穿鑿する必要がない。要するに湖水の眺望である。湖水一帯が臙ろに霞んでゐる中に、辛崎の古松が蜿蜒と這ふやうに聳つてゐるさまは、花よりも一段と趣が深いといふのである。花を賞するのは普通であるが、それよりも臙々と霞む古松の趣を捕へた點が見つけ所である。この句は古來切字がないのでやかましい議論になつてゐて、辛崎祕傳などよい



ふ愚にもつかないものまである。しかし切字は畢竟形の上のみの事ではなく、意が切れよばよいのであるから、「にて」と餘韻をもたせたまゝで一句は切れて居るのである。なほ此句について晝夜の論があるが、隴は季題としては元來夜である。尤も俳諧では晝にも全く用ひないではないが、此句としては「花」が主題となつてゐず「松」は無季だから、やはり「隴」を季題とする外はない。さうするとどうもその本來の用ひ方に随つて夜景と解した方がよからう。但し之は解する人の心もちにもよる事だから、強ち執するわけではない。

古池や蛙飛びこむ水の音 (貞享三年春の日)

古來やかましい句である。支考は「俳諧十論」の中に此句を以て、芭蕉が始めて幽玄の體に眼を開き、俳諧の一道を弘める基となつたものだと言つたので、美濃派の人々には特に尊ばれてゐる。しかしすでに越人は此説を駁して次韻を以て當流開基だとし、又其角なども次韻が蕉風の根元をなしたものと云つてゐる位で、必ずしも此古池の一句で突然芭蕉が俳諧の心眼を開いたものと解する必要はなからう。特に「古池眞傳」などといふ書が傳はつてゐて、これを全然宗教的な悟りに附會して説いて居るが如きは、此句を尊重するのあまり、所謂最眞の引倒しになつたものである。又これを深川の芭蕉庵の實景だと泥んで解するにも及ばぬ。要するに此句はどこでもよい、青く水の淀んだ古池がある。そこへ突然ボチャンと蛙の飛び込んだ音が聞えたのである。そして水面に大きな波紋を残したまゝで、やがて又もとの靜寂にかへる。さうしたいはゞ靜中の動、動中の靜といつたやうな刹那の境界を捉へたのである。しかもそこには永遠の相を物語る深い言葉が藏されてゐる。靜かに目を瞑つて蒼く湛へた古池を思つて見るがよい。そしてその

靜けさを破つて突然勢よく跳び込んだ蛙の音を想つて見るがよい。徒らに千言萬語を費す必要はないのである。箇中の消息は自ら領會するものがあるだらう。なほ支考の「葛の松原」によれば、此句は最初「蛙飛び込む水の音」といふ七五だけを得て、上五文字を案じてゐた時、其角が傍らにゐて「山吹や」とつけた。しかし芭蕉はそれをとらないでたゞ古池と定めたのだといふ。そして支考は「山吹といふ五文字は風流にして花やかなれど、古池といふ五文字は質素にして實也」といひ、更に然るを山吹のうれしき五文字を捨て、只古池となし給へる心こそ淺からね」と芭蕉を讚美してゐる。此話は支考の作りごとではなからう。いかにも山吹では其角らしい花やかなさはあるが、到底古池の落ちついた深みは得られない。山吹を配したのでは、畢竟寫生以上の何者をも言ひあらはし得ないであらう。古池だからこそ此句が芭蕉の名と共に不朽の作となつたのである。因にいふ。此句は「春の日」に始めて出てゐるのだが、同じ貞享三年に刊行された西吟の「鹿櫻」には

古池や蛙飛んだる水の音

といふ形が出てゐる。しかし勿論之は誤傳にちがひなく、「飛んだる」では味ひがすつかり稀薄になつてしまふ。ぜひとも「飛込む」でなくてはならぬ。

對友人

君火をたけよきもの見せむ雪丸げ (貞享三年續 虛 栗)

會良の遺稿「雪丸げ」には此句に「會良何某此のあたり近く假りに居を占めて朝な夕なに訪ひつ訪はる。我食物營む



時は柴を折くぶる助けとなり、茶を煮る夜は来りて軒を叩く。性隠閑を好む人にて交り金を断つ。或る夜雪に訪はれて」といふ詞書がついてゐる。即ち芭蕉が深川の草庵で、雪の夜に門人から訪はれて作つた句である。——謙遜な芭蕉は門人に對しても、多く自分では友人と言つてゐる。——曾良は當時宗波・苔翠等の人々と、常に師翁を訪ねて薪水の勞にも服して居たのであつた。「雪丸げ」の深川八貧の句などを見るに、芭蕉のその頃の清貧の狀が想はれる。さて此句意は、「あ曾良か、いゝ時に来た。一人で淋しがつて居たのだよ。と言つてお客様に差上る御馳走もなし、まあ爐に火でも焚いてあたつて居てくれ給へ。いゝものを見せて上げるから。それこの庭の雪で一つわしが雪丸げをこしらへて見せるよ。」といふので、芭蕉が雪夜に客を得て軽く興じた心もちが見える。そして主客の親しげな對座のさまもなつかしまれる。

よく見れば薺シラネ花咲く垣根哉(貞享四年續盧栗)

詩人の心は萬物をいとほしむ心である。どんな小さな自然の中にも彼は天地の悠久と造化の驚異とを感じるにちがひない。さうした心が此句を生んでゐる。

草庵

花の雲鐘は上野か淺草か(貞享四年續盧栗)

前書によればやはり深川の草庵に居ての句である。陽春三月世は花盛りで、上野淺草あたりには只花の雲が霞と共にたなびいてゐる。その花の雲を渡つて響いて来る鐘の鐘——夕の鐘でもよいかも知れぬが、句全體から受ける感じ

は眞晝の暖かさ長閑さである。——それも霞んで上野の鐘とも淺草の鐘とも聞定められない。眠たい程長閑な心もちである。作者は草庵の中に靜かに横はつてゐるのであらう。花の雲は窓外にそれと見えて居てもよいが、勿論實際に見えなくても差支へない。——尤も其角はこの前年芭蕉がよんだ「觀音のいらか見やりつ花の雲」と共に、此句は一聯二句の格だと言つて居るから、實際淺草觀音の屋根位は見えたのであらう。——たゞ花に包まれた都のさまを想ひやつて居ればよい。そして鐘の音を聞いて居る。「上野か淺草か」と疑つた叙法が、いかにもさうしたゆるやかな心境を自然にあらはして居る。なほ此句は貞享元年作といふ説もあるが、今姑く「續盧栗」刊行の年代に従つておく。

旅人と我が名呼ばれむ初時雨(貞享四年千鳥掛)

此句は貞享四年十月十一日江戸を立つて古郷の伊賀に歸省しようとした時の吟である。「千鳥掛」には句の前に「はやこなたへと夕露の菴の宿はうれたくとも、袖を片敷きて御とまりあれや旅人」といふ謠曲梅枝の文句を、そのまゝ「曇譜ふらふらまでつけて添へてある。それから此時の紀行文「笈の小文」には「神無月の初空定めなきけしき、身は風葉の行方なき心地して」とあつて此句が出てゐる。降りみ降らずみ初時雨の空定めなき頃、かうして寂しい旅に出る。だがその自分を旅人として客觀的に眺めて見ると、いかにも面白い。どこか行暮れた菴の宿で、御泊りあれや旅人ともてなしてくれる所もあるかも知れぬといふので、寂しさの中に旅を喜ぶ情がある。「旅人と我が名呼ばれむ」と自分を突離して、そこに初時雨に濡れつゝ急ぐ旅人の姿を想見したのである。

故郷や臍はらの緒に泣く年の暮(貞享四年千鳥掛)



芭蕉は江戸を立つて東海道を上り、尾張の鳴海に暫く足をとどめ、越人三伊良古崎の杜園を訪ねたりして、その年も暮れる頃故郷にやつて来た。此句はその時の作で、次のやうな長い詞書がついてゐる。

代々の賢き人々も故郷は忘れ難きものにおもほへ侍るよし。我今は始めの老も四とせ過ぎて、何事につけても昔なつかしきまゝに、兄弟の數多齡俵きて侍るも見捨て難く、初冬の空のうち時雨るゝ頃より雲を重ね霜を経て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛の昔も悲しく思ふ事のみあまたありて。

芭蕉は三年前にも故郷で歳の暮にあつた。しかしまだかうした述懐は洩らして居ない。だが今度は自分の身にも老境を覚え、兄や血族の人々の老い行く事も悲しく思はれたのであらう。自ら亡き父母の事も一入思はれるのであつた。臍の緒といふのは今も田舎ではやつて居る通り、子供が生れるとその生年月日を記した紙片等と一しよに大切に藏つて置いたものである。句は芭蕉が歸省中兄の家で、はからず自分のその臍の緒を見せられて、急に父母を思ふ情で胸が一杯になつたのである。但しこの臍の緒といふのは、只兩親に繋がる血縁を具象化しただけで、實際の物を見て居る譯ではないといふ説もある。しかしそんな抽象的な聯想だけでは、此句の悲愴な感じは到底捉へられない。「臍の緒に泣く」といふ表現は決して只血縁を具象化した言葉ではない。もつと強く切實に響いて来る。實際眼の前に臍の緒その物を見て居なければ出て来ない痛切さを持つて居る。長い詞書は只此句の註釋に過ぎないのである。かうした悲寥凄愴な調は誠に芭蕉獨特の詩境で、何人も追隨し得ない所がある。芭蕉を單に風雅な自然詩人とのみ解するのは、その一面しか見ない誤つた觀察である。

お子良子の一本ゆかし梅の花 (元禄元年 笈の小文)

これは「お子良子」が難語であるからこゝに一寸解を加へる。此句は伊勢での吟で、紀行には「神垣のうちに梅一本もなし。いかに故有る事にやと神司などに尋ね侍れば、只何とはなし、自ら梅一本もなく、子良の館の後に一本侍るよしを語り傳ふ。」とあつて此句が出てゐる。お子良子といふのは伊勢神宮の神事に奉仕する少女の稱で、未だ經水を見ない者を選ぶといふ。その少女たちの居る所が子良の館である。芭蕉はその子良の館に一本だけ梅があると聞いてそこまでわざ／＼出かけた。するに廊下などでふと見かけた一人のお子良子、神に奉仕する無垢な少女のさまが、そこに咲く一本の梅の氣高さにも似通つて居たので、つい「一本ゆかし」といふ句が浮んで來たのであつた。句の表面は勿論梅を季題としてよんで居るのであるが、芭蕉の感興はむしろふと見かけたお子良子の清楚なさまにあつたのであらう。

景清も花見の座には七兵衛 (元禄元年 泊船集等)

これもやゝ難解の句だから解しておく。當時の芭蕉としては——尤も此句の年代は確かには分らない。今「芭蕉發句集」に従つて元禄元年としておいた——一寸變つた行き方である。句意は景清といへば平家でも聞えた豪勇の武士、何となく武士張つたし、かつめらしさを感じるのだが、その景清も清水あたりの花見の座では、名もいさゝか柔らかい七兵衛殿でをさまつて居るといふので、滑稽の句體である。特に景清をもつて來たのは、それがすぐ勇士としての聯想があるばかりでなく、一面五條坂の遊女に馴染んだなどいふ傳説があるからであらう。支考は此句と「昔聞け秩父殿さへ相撲取」といふ句とを即興體としてあげ、こゝを俳諧の滑稽とすと知る可しと説き、江戸の俳諧を俗化



させた不角などは、芭蕉風といつても古池の句の趣一途ではいかぬ。この景清の句を味へと言つて、自分の方に都合よい解釋をしてゐる。それだけ此句には談林や後の江戸座風の、感興本位なところがあつて、勿論芭蕉の句として取立てゝいふべきものではない。

草臥れて宿かる頃や藤の花 (同の小年)

「泊船集」には「大和行脚の時に丹波市とかやいふ所にて日の暮れかゝりけるを、藤の覺束なく咲きこぼれけるを」といふ前書がついて居る。芭蕉は元禄元年の春を故郷に迎へて、伊勢参宮をした後、三河からかねての約をふんでやつて来た杜國と一しよに、吉野の花見に出かけたのである。此句はその途中大和の丹波市でよんだものと思はれる。一見平凡なやうでしかも容易に到り得ない俳諧の真趣を捉へて居る作だ。一日の旅に歩き疲れた足を重く引ずつて、とある村里にさしかゝつた。もう日も暮れかゝつたし、今日はこゝらで宿を求めようかしら。さう思つてあたりを見廻すと、そこに覺束なく咲きこぼれた藤の花。春の夕の淡い旅愁と疲れた心もちとが、その眼前の景色のうちに渾然として融け合つて居る。誠に景情一如縹渺として盡きない趣が味はれる。

高野

父母のしきりに戀し雉子の聲 (同の小年)

吉野の花を見た芭蕉は、それから高野山に登り、和歌の浦で行く春に追ひついて、灌佛の日は奈良へやつて来た。そして須磨明石まで遊んだのである。この句は高野山での吟で、行基菩薩が高野でよんだと傳へる「山鳥のほろ／＼

と鳴く聲聞けば父かと思ふ母かと思ふ」といふ歌をふまへたのである。故郷で臍の緒に泣いた芭蕉が、高野——特にこの靈場の高野で、しきりに亡き父母を戀ふ情に堪へなかつたのは、さもあつたであらう。

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月 (同の小年)

明石あたりでは今も蛸壺で蛸を漁つて居る。芭蕉も夜泊のり濱で蛸壺を海に沈めるさまでも見たのであらう。明日は海から引上げられるのも知らず、蛸は壺の中ではかなき夢を食つて居る。それがはかなく明ける短い夏の夜の月の趣と通つて、こゝに芭蕉の詠歎となつたのである。「はかなき夢を」のを下に受ける言葉がない。「見るらむ」といふやうな言葉が略された形ではあるが、それははつきりさうときめてしまふ必要はない。寧ろかうぼんやり言ひ廻した所に蛸壺のはかなさと夏の月の儂さが、一句の中にかすかなしかも複雑な關係で結び付けられるのである。これは一種の俳諧的修辭であつて、普通の文法で律するわけには行かない。

面白うてやがて悲しき鵜船哉 (同の野年)

岐阜での吟である。「笈日記」には「鵜舟も通り過る程に歸ると」とあり、鵜飼を見ようと夕方から誘はれ、人々稲葉山の木陰に席を設け盃をあげて、「又やたぐひ長良の川の舳陰」などと興じた後の作であるといふ。すると句意は最初は鵜飼の面白さに興じて居たが、やがて夜も更け人も散じ、鵜舟も通り過る程になつたので、歡樂極まつて哀情多き感にうたれたといふのである。あの徒然草に祭を本當に見たといふのは、その祭が果てたあとの淋しい大路のさまを



見てこそ言ひ得る事だと言つてゐると、一脈似通つた心境がある。篝火の光も次第にまばらになつて、鵜舟は空しく流れ過ぎて行く。さつきまであの木陰で打興じて居た心もちを振返つて見て、今の淋しさは何と云ふ變り方であらう。あゝ面白うてやがて悲しい世の中であるわい。芭蕉は目の前に流れ行く鵜船を見ながら、低く此句を口吟んだ。此句は芭蕉の自筆に

面白うてやがて流るゝ鵜ぶね哉

と書いたものがあるさうだから、「悲しき」は後案であるかもしれない。あまりに主観的な叙し方であるが、この歡樂から哀情に移り行く心境は、やはり「面白うてやがて悲しき」といふ方に深く味はられる。そして最後の「鵜舟哉」で、眼前の景を點じて、説明的な主観の單調さから救はれて居る。なほ此句を鵜が魚を捕る面白さから殺生の罪を思つて悲しくなつたと解する人もあるが、それでは全くつまらない句になつてしまふ。「流るゝ鵜船哉」といふ別案が傳はつて居るのでも、決してその意でない事は明かであらう。

棧かたはしや命をからむかたはし葛かつら（同科紀行年）

芭蕉はこの年尾張から江戸へ歸るのに、折から仲秋の頃であつたので、門人の越人を誘つて更科の月を見に出かけた。その途中の吟である。木曾路の險阻なさまは紀行の中に委しく記されてある。その危うい木曾の棧道に、葛かつらが纏ひついて居るさまを自分の心に移して見て、「命をからむ」と言つたのである。命限りとからみついて居るのは葛葛であるが、しかも實はその棧を通り過ぎる芭蕉の心である。

冬籠り又寄添はむこの柱（同野年）

去年の冬は旅で過したが、今年はこの草庵に冬籠りをする事だ。いつも自分が寄りかゝる癖のある一本の柱、今年もまたこの柱によりかゝつて冬を暮すことかなあ。さう泣きながらしみくゝとその柱を撫でゝ見てゐる芭蕉の姿が想はれる。「より添ふ」といふ言葉に十分の親しさと懐かしさとが含まれて居る。この句をよむと芭蕉といふ人が本當に好きになつて来る。

草の戸も住みかはる代ぞ誰の家（元祿二年奥細道）

芭蕉は元祿二年の春又も道祖神のまねきにあつて、門人會良を伴ひ奥細道の旅に上つた。此句はその紀行の最初の吟で、「住める方は人に譲り杉風が別墅に移るに」といふ文からつゞいてゐる。——以下紀行の本文を一々引かないから、讀者はなるべく奥細道（同書は單行本、註釋書等も數多く出版され）を座右に置いてよんで頂きたい。——なほ「笈日記」には「昔此叟深川を出づるとて此草庵を俗なる人にゆづりて」とあるから、出發前急に芭蕉の空庵に入りたい人があつて、そのために芭蕉は一時杉風の別墅に引移つたものと見える。句意は今まで自分のやうな世捨人に住み古されたこの草庵も、いよく住み替らるべき時節がやつて來た。これからは世間並みに三月のお節供には、誰も飾られる事だらうといふのである。「誰の家」と言つたのは折から上巳の節句に近い頃だつたので、その季節のものをもつて來たゞけで、實は五月なら甲人形の家、七月なら掛針の家でもいゝわけである。即ち誰の家で世間なみの生活をする人の家といふことを表はしたにすぎない。しかし誰の家だと自ら今度住替る人が、女の子なども居る華やかな一家らし



さが想はれる。芭蕉は今までの自分のシンプルライフと對照して見て、一寸微笑を口のほとりに浮べたことであつたらう。雜商人が芭蕉のあとに移り住んだなどいふ説は、もとより附會の俗解である。

行く春や鳥啼き魚の目は涙 (同 上年)

千住で見送りの門人たちと別れた時の句である。非情の魚や鳥さへも、春の逝くのを惜んで悲んでゐるのに、況んや自分は今親しい人々と別れて程遠い旅路にさまよひ出るのである。「前途三千里の思ひ胸にふさがり、幻のちまたに離別の涙を濺ぐ」といふ悲痛の感は、やがてかうした句となつて芭蕉の胸から迸り出たのであつた。魚鳥の情は即ち芭蕉の情である。杜甫の「感時花濺淚、恨別鳥驚心」の詩句もおもはれて、誠に多感な詩人の情がよく抒べられてある。

あらたふと青葉若葉の日の光 (同 上年)

日光での吟。今の若い人が此句を卒讀すると、青葉若葉に照りかゞやく陽光を禮讚したものと早合點する。西洋の詩などを讀みなれた人には、その方がまたピタリと心に合ふのである。しかし此句の主眼點は太陽禮讚ではない。紀行の本文を見ると分ることだが、「日の光」といふのは東照宮の神徳を稱へた言葉なのである。そこにはよほど技巧的な要素が含まれてゐる。かう解するとこの句も平凡な句、芭蕉も平凡な人物のやうに思はれてしまふが、しかし時代をよく考へて見るがよい。芭蕉の生きて居た時代に、徳川家の祖家康がどれほど偉い人物に考へられて居たか。これは御座なりの阿附の言ではない。やはり深い敬虔の念から發した言葉である。だからこそ此句がさうした技巧的な要

素を持つて居るにもかゝらず、少しもいや味を感じしめないものである。全山を掩ふ青葉若葉の日のかゞやきに對する尊さの念と、金碧燦然たる社殿を仰いで神徳を稱へる念とが、一句の中に渾然と融和されてゐる。芭蕉の俳諧的手腕のえらさを思はずには居れない。

田一枚植ゑて立去る柳かな (同 上年)

西行が「道のべに清水ながるゝ柳陰しばしとてこそ立止りつれ」と詠んだといふ、下野國菅野の里の所謂遊行柳の陰でよんだ句である。句意は「師走袋」——芭蕉の發句を註した書——に「此句は早乙女を譽めたる句なり。たをやかなる柳腰の女共が田一枚を植ゑて各々立去りしと也」と解してゐる。普通なら「植ゑて」と「立去る」とは成程同一の主語をもつべき述語であるが、しかしさう解しては古歌に名高い柳陰に佇んで、低徊去るに忍びない情は、何處にも求められない事になつてしまふ。此句がその低徊味を眼目にして居る以上、多少無理ではあるが、植ゑと立去るとは主語を異にして解せねばならぬ。即ち植ゑたのは早乙女であるが立去つたのは芭蕉自身である。これがあのかねて音に聞いてゐた柳であるかなあと、古人を思ひ古歌を口吟んで暫し去りかねて居る。するとそこに早苗をとつてゐた少女たちは、いつかもう田を一枚植ゑてしまつた。はて俺はそんなに長い間こゝに居たのかしらと、ふと氣づいてやつとそこを立去つたといふのである。だがこのまゝの形では、さう解するべく確かに語法上の無理はある。勿論前にも言つた通り、俳句は限られた短詩形であるから、普通の文法では律せられないが、これは少々無理である。いかに芭蕉の句だと言つても、形の上の不備は免れないと思ふ。支考は「植ゑて立ちよる」と傳へたものがあると言つて、その方を



大いに推賞して居るが、いづれにしても芭蕉の句としては、優れた方の作ではあるまい。

夏草や兵どもが夢のあと (同 上年)

高館での吟である。こゝの紀行の本文は「奥細道」の中でも殊にすぐれて居る。夏草の上に笠打敷いて低側願望、功名の夢きをあはれみ榮華の空しきを歎じて、冷たい涙の頬に傳はるのを拭はうともしない芭蕉の姿。それは何といふ寂しくも尊い姿であらう。句は目前に茂る夏草を見て、往年將士の夢の跡を覗いたのである。杜市の「國破山河在、城春草木深」と同巧異曲ではあるが、少しも踏襲のあこを見ない。芭蕉の俳魂が打込まれたやうな金玉の名句である。

五月雨の降残してや光堂 (同 上年)

此句に對しては二解がある。一は降残すを空間的に解して、折から五月雨の空薄暗く四邊は濛々として居るのに、光堂のみが金碧燦爛たる面影を残して眼を驚かす。こゝだけは五月雨も降残してかう明るく光つて居るのだからかといふ意にとる。又一はこれを時間的に解して、中尊寺の大部はすでに頽廢してしまつてゐるのに、光堂のみがかうして残つてゐるのは、幾百年の五月雨もこゝだけは降残したのだらうかといふ意に見る。二解いづれも通ずるが、しかし此句は眼前の即景ではなく、懐古の意が深い事は紀行の本文によつても明かである。既に懐古の意が深いとすれば、やはり後の時間的に解する説を正しいとせねばならぬ。「四面新たに圍みて墓を覆ひて凌ぐ。暫らく千載の記念となれり」といふのは、光堂のみが幾春秋の風雨を凌いで、暫らく千載の記念として残つたことを言つたのである。且つ「降残してや」ので、やは過去に對する詠歎に外ならないであらう。依つて今前説はとらない。又時間空間兩様の意味を

含んで居るとする説もとらない。幾年の風雨、それを當季の五月雨で代表させたわけである。

閑さや岩にしみ入る蟬の聲 (同 上年)

普通山寺といはれてゐる立石寺といふ寺での吟である。「佳景寂寞として心すみ行くのみおぼゆ」と本文には記してある。そこで蟬の聲を聞いたのである。全山がしんと沈まり返つた中に、たゞ一筋の蟬の聲、それがその大きな岩の中にしみ入るかとはかり聞かれて、静けさは更に加はる。騒がしいものとされて居る蟬の聲を——尤も芭蕉が山寺に行つた頃は五月で、まだ初蟬の頃ではあつた。——この寂寞裡に捉へたのもよいが、更に「しみ入る」といふ言葉に至つては、流石に芭蕉だなど思はずには居れない。それは静かな深い心で自然を凝視する者のみが、始めて言ひ得る言葉であらう。なほ此句が「初蟬集」には

さびしさや岩にしみ込む蟬の聲

と傳へられて居るが、勿論「閑さや」でそして「しみ入る」でなくては、句の味は深くならない。

五月雨を集めて早し最上川 (同 上年)

芭蕉は最初この句の中七を「集めて涼し」と作つた。後に早しと直したのであるといふ。涼しと早しとでは感じがすつかり變つて来る。芭蕉が最初實景を見た時は、兩岸の青葉の色を映して滔々と流れる水を涼しく感じたのであらう。しかし最上川といふ大河から全體的に受けた印象、それをあこで振返つて考へて見ると、涼しでは何か物足りなかつた。庄内の山河に降り注ぐ雨を集めて、矢の如く流れ行く大河、それはやつぱり早しと端的に言つてしまはな



くては、あの豪壯な感じは出て来ない。さう思つて芭蕉は後で早しと改めたのであらう。一體芭蕉は一度句を作つても、それをそれつきり捨てしまふといふ事はなかつた。折にふれ再案三案、屢々舊作をも練り直した。かの

大井川浪に塵なし夏の月

といふ句は、自作の「白菊の目に立てゝ見る塵もなし」と、紛らほしいからといつて、

清瀧や波に散込む青松葉

としかへた話などは、「笈日記」に傳へられて居て人のよく知る所であるが、すべての句に亘つてかうした良匠の苦心はあつた事であらう。涼しと早しとでは全く感じがちがふから、芭蕉も實感に即しない机上の句を弄したのでなど、解するのは誤りである。

象潟や雨に西施が合歡の花 (同 上年)

「纏尾集」・「陸奥千鳥」等の書には

象潟の雨や西施が合歡の花

とある。その方が句意は聞き易いが、「や雨に」の含蓄ある叙法が、寧ろ縹緲とした句趣にふさはしい。句意は象潟の景は紀行の本文にも恨むが如しと言つて居り、しかもその雨中の趣はさながら西施が惱んで眠つてゐるやうだといふので、眠を當季の植物合歡の花にかけたのである。そしてこゝへ特に西施を持ち出したのは、本文にも引いて居る蘇東坡の詩「水光潑潑晴偏好、山色空濛雨亦奇、若把西湖比西子、淡粧濃抹兩相宜」をふまへたのであり、又合歡の

花は掛詞ではあるが、自ら花葉の容姿が女性的な美しさとしをらしさとを持つて居るからである。大體技巧的な句ではあるが、かうした故事古典等をふまへて、しかも智識的な興味のみで終始して居ない。雨に糺糊たる象潟の景趣が彷彿として浮んで来る。合歡の花も技巧的に持出したゞけでなく、きつとそこらに咲いて居たのであらう。そしてその雨に濡れた花の感じが、しつくりと此情景に合つてゐると芭蕉は思つたにちがひない。

荒海や佐渡に横たふ天の川 (同 上年)

これも有名な句で、句意は解するまでもなく明かである。「風俗文選」の「銀河の序」などによると、此句は芭蕉が越後の國の出雲崎から、海上十八里のあなたに横はつてゐる佐渡ヶ島を望んで作つたのだといふ。「日既に海に沈んで月ほの暗く、銀河半天にかゝりて星きら／＼と冴えたるに、沖の方より波の音しば／＼運びて、魂削るが如く腸ちぎれてそゝろに悲しび來れば」と言つて居る。俯して北海の夜の荒波の音を聞き、仰いで半天にかゝる銀河の流を見る。この天地の大景が僅か十七文字の間に、かくも雄大に言ひおほせられたのは、誠に神技といふ外はない。「横たふ」の自他の論の如きは、この句の大ききの前には自ら消滅してしまふであらう。

赤々と日はつれなくも秋の風 (同 上年)

これは句意が誤解されがちであるから特にあげておく。この句では「つれなく」は、中古語の無感情を表はす意に同じく用ひてゐる。無情、心なく等の意ではない。芭蕉時代もつれなしは難面などいふ字をあて、中古語と同意に用ひた場合は多く見受ける。——勿論無情の意に用ひたものも多い。——それから「も」はとも、又はどもの意である。



即ち句意は、もう秋に入つてゐるのに日はそれには無頓着に、相變らずあか／＼と暑く照りつけてゐる。けれども流石に風のみは争へない。何といつてもやつぱり秋の風だといふのである。露伴先生が此句を杜甫の詩句「風吹客衣日杲々」の面影に通つて居ると言はれたのは、一讀成程さう感ぜられはするが、しかし曾良の遺稿「雪丸げ」に「旅愁慰めかねて物憂き秋もやゝ至りぬれば、流石目に見えぬ風の音づれもいとどしくなるに、残暑なほやまさりければ」とあつて此句が出て居るのを見ると、今解した説以外には解しやうがない。要するに残暑の句である。暮秋の句でないことに注意せねばならぬ。なほ或書に此句の解として「須磨は暮れ明石の方はあか／＼と日はつれなくも秋風ぞ吹く」といふ歌を引いてある。果してそんな古歌があるのかどうか知らぬが、もし有るとすれば芭蕉の句は殆んど存在の必要を認めなくなる。どうもこの古歌といふのは信用し難いと思ふ。但し此句は残暑の句として解すれば、あまり佳作とは思へない。

石山の石より白し秋の風 (同 上年)

加賀の那谷寺での吟。この附近は岩石が多くて紀行の本文にもある通り、観音の御堂もその岩の上に造りかけてある。その白くからびた石山に冷たく吹く秋風を、石よりも更に白しと観じたのである。四季を色に配すれば秋は白で素秋の稱もある。随つて秋風を白しと形容するのは、決して新しい見方ではないのであるが、それを目前の石山より白しと言切つた所に此句の主観の深さがある。

蛤の二見に別れ行く秋ぞ (同 上年)

半歳の餘に亘る長い行脚を終へて、元禄二年の秋も半ば過ぎた頃、芭蕉は門人達に迎へられて美濃の大垣に入つた。そしてそこで旅の疲れを休める暇もなく、又伊勢の遷宮を拜まうと、舟に乗つて人々と別れたのである。此句はその留別の吟で、「奥細道」の紀行は此句までと終つてゐる。「蛤の」は蓋の縁で二見の枕詞に用ひたので、「別れ行く」から「行く秋」にかけてある。

初時雨猿も小叢をほしげなり (同 養年)

「猿養」巻頭の句で、集の名の基く所である。芭蕉は伊勢の遷宮を拜して一旦故郷の伊賀に歸つた。その歸る山中での吟であるといふ。淋しい山中で思ひもかけず初時雨がハラ／＼と降つて来た。ふと見るとその岩鼻か木の枝にも、猿が雨に濡れながら寒さうにしよんぼりしやがんで居る。芭蕉の情は即ち猿の情に移つて行つた。「あいつも叢でも欲しさうにして居るな。」さう言ひながら芭蕉はその小猿を憐れむやうに、又親しむやうに暫く見やつて居た。猿に小叢と思ひついた所に俳諧の眞趣がある。其角は「猿養」の序の中に「我翁行脚の頃伊賀越えしける山中にて、猿に小叢を着せて俳諧の神を入れ給ひければ、忽ち斷腸の思ひを叫びけむ。あたに懼るべき幻術なり」と感嘆して居る。少々其角式の大形な言ひ方であるが、此句が當時門弟たちの間にももてはやされた事は分る。

都近き所に年をとりて

薦を着て誰人います花の春 (元禄三年 袋)

芭蕉は伊賀に歸つてすぐ奈良から京都へ出、都の夜の鉢叩きを聞き、湖南の膳所で春を迎へた。その歳旦の吟であ



る。一寸難解の句であるが、「説叢大全」に素堂の話として、「是はこれ片岡山の餓人なり、十二月に太子の對面ありし歳且にも程なければ、橋のもとを乞食を見るにつけて、何となく思ひ出して吟ぜし由 翁もさいつ頃物語なりき」と見える。その話の眞偽は別として、とにかくこれは芭蕉が實際薦を着た乞食を見て、ふと聖德太子の故事を思ひ浮べ、——太子が片岡山で飢者に會ひ、自ら紫衣を脱して與へ給うた。その飢者は實は達磨であつたといふ故事。——あの姿でもどういふ立派な人でいらつしやるかも知れぬと感じたので、それを折からの花落あたりの華かな歳且と對照して一句にしたものであらう。芭蕉が此句を記して門人に送つた手紙の中にも「五百年來のむかし西行の撰集抄に多くの乞食をあげられ候に、愚眼故よき人見付けざる悲しさに、二度西上人と思ひかへしたる迄に御座候」とある。即ち西行上人のやうにあの薦着た乞食の中からも、偉い人物を見つけたといふ心もちで、花の春に浮れ騒ぐ世俗の人々に對して、些か感懐を洩らした所がある。なほ此句は右の手紙などには、

誰人か菰着ています花の春

となつてゐるが、北枝宛の手紙で見ると上五を「何人か」とも考へ、又「菰を着て誰人いますとも」と言添へたりしてゐるから、最初の案は手紙の通りの形であつたのだらう。しかし其袋、卯辰集、花つみ、泊船集、かくれさと等元禄寶永年代の諸集には、皆「薦を着て」の形で出てゐるから、芭蕉は後その方に句を定めてしまつたものと見るべきである。

花見

木の下に汁も鱧も櫻かな (同 年)

句意はこのまゝである。樹下に設けた花見の席、花は繽紛と散りかゝつて、汁の中にも鱧の上にも。「三草紙」によれば芭蕉は自ら輕みを以て此句をしたと言つてゐる。誠に花見の心にふさはしい輕さと明さとを持つて居る。深い句ではないが快い句である。なほ此句はひさご・花摘・木の本等の諸集には此通りの形で出てゐるが、陸奥千鳥・浪花火躰・渡し舟等には上五が「木の下は」となつてゐる。句意はその方が明瞭だが、それではあまりに説明的な叙法で、餘意といふものが全くなくなる。「ひさご」では此句を發句として、膳所の珍碩が脇をついで、一卷の連句を興行してゐる位だから、勿論「ひさご」の句形に従ふべきである。はとにと僅か一字の相違であるが、それだけで句趣に大きなちがひを生ずる。古句を傳へるものは實に一字をも苟くしてはならないのである。

四方より花吹入れて 鴉の海 (同 年)

此句は前記の「ひさご」を撰んだ濱田氏珍碩(酒堂とも號する)の居酒落堂での眺望をよんだのである。此句と共に芭蕉の作つた洒落堂記といふ文がある。鴉の海は琵琶湖の異稱。句は湖畔の花がすべて琵琶湖に散り浮ぶといふ大觀を叙したのである。「四方より」、「吹入れて」思ひ切つた言ひ方をした所に、大きな眺望が眼前に展けて来る。古い註に千載集の「櫻咲く比良の山風吹くまゝに花になり行く志賀の浦浪」いふ歌を引いて、「此歌の風情相似たり」と言つてゐる。

先づ頼む椎の木もあり夏木立 (同 年)

名高い幻住庵記の終りにある句である。幻住庵は石山寺の近くにあつて、芭蕉が元禄三年四月暫らく旅杖をとめて







居なければ、本當の味は分るものではない。

住みつかぬ旅の心や置火燧(同 養年)

旅を生涯とした芭蕉にもかうした心がある。それは人情の自然である。悪く悟りすまさない所、そこに芭蕉の人間的な親しみを一層深く感ずる。

饑乙州東武行

梅若菜鞠子の宿(元祿四年)の汁(養年)

乙州は天津の門人である。芭蕉は元祿四年の春はまだ湖南に居たので、乙州が江戸へ赴くのを送つて此句を饑にしただのである。句は折から道中は梅も咲き若菜も萌え、鞠子の宿の名物とろ汁も甘からうといふので、旅中の景物を只漫然とならべたゞけのやうであるが、とろ汁一つで全體に俳味を横溢させて居る。凡手の言及べない點である。乙州は自らこの句に「笠新しき春の曙」と脇句をついで、早春の東海道を軽い足取で下つて行つた。

山里は萬歳遅し梅の花(同日記)

山里は萬歳がやつて来るのも大分遅い。その頃には丁度梅も盛りだといふのである。何の奇もないやうであるが、春がやつて来るのさへ遅い山里の長閑な氣分と、暖かに咲きそめた梅の花とが、實に自然な調和を保つてゐる。

望湖水借春

行く春を近江の人とをしみける(同 養年)

「人と」は「人と共に」の意である。句意は明瞭であるが、「去來抄」に次のやうな話が出てゐる。天津の門人尙白が此句を難じて、行く春を近江の人と言つても丹波の人と言つても同じ事だと言つた。然るに去來は尙白の言を反駁して、「近江の人と惜み給ふは湖水朦朧たる折節の住家なればならし。暮春もし丹波に在さば固より此趣向浮ぶまじ。歳暮又近江に在さば元より此感なかるべし。風流は自ら其場にあるものを」と言つた。芭蕉は之を聞いて、「去來汝は風雅を語るべきものなり」と感賞したといふのである。これは實に味はふべき逸話で、俳句で動く動かぬなどと言ふ事が、此話でよく了解が出来る。動くといふのは例へばこの近江の人の代りに、丹波の人でも若狭の人でも大した變りはないやうな場合をいふので、動かぬといふのはその句としては近江の人以外之に代ふべきものがないといふ場合をいふのである。勿論動く句では作者の手柄がない。動かぬ所を見定めるのに作者の苦心が存するのである。芭蕉の此句の如きは、成程一見尙白の評のやうに動く句と見えるが、當時芭蕉が近江に居て、朦朧たる湖水に行く春の感懐を寄せたとすれば、まさに「近江の人」との中七字は動かすべくもない事に氣がつくであらう。

京にても京なつかしや時鳥(同 光年)

どういふ折かこんな心もちは誰も感ずることがある。その心もちをそのまま打出した所に、此句の捨て難い感じがある。非常にすぐれた作とは思はないが、好きな句である。

ほとゝぎす大竹藪をもる月夜(同 嵯峨日記)

俳句俳文評釋



元祿四年の四月十八日、芭蕉は嵯峨に遊んで去來の落柿舎に入つた。さうして五月のはじめまでそこに滞在して居た。その間の日記が即ち「嵯峨日記」である。落柿舎の舊蹟は——それが去來時代と全く同一の場所であるか否かは疑問だが、大體の見當は勿論違はない。——今も嵯峨に残つて居るが、あの邊は一體に竹藪が多い。全く大竹藪と大の字をつけて言はねばならぬ程の深い竹藪である。その藪を洩れて斜に月の光がさす、折から空に裂帛の一聲。暗い凄味と清爽な感じとが句に溢れて居る。一に「大竹原」ともなつて居るが、やつぱり藪の方が實感が深い。

うき我を淋しがらせよかんこ鳥 (同 上年)

此句を解するには是非日記の本文を引かねばならぬ。

廿二日、朝の間雨降る。今日は人もなく淋しきまゝにむだ書して遊ぶ。其詞

裏に居るものは悲しきみあるじとし、酒を飲むものは樂しきみあるじとし、愁に住するものは愁あるじとし、つれづれに住するものはつれづれあるじとす。

さびしさなくばうからましと西上人の詠み侍るは、さびしさを主なるべし。又詠める

山里にこはまた誰を呼子鳥ひとり住まんと思ひしものか

ひとり住む程面白きは方し。長嘯隱士の曰く、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失ふと。素堂此言葉を當にあはれむ。予も又

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

とは、ある寺に獨居していひし句なり。

といふのである。獨居して淋しさをあるじとする芭蕉が、この物憂い我が心をお前の淋しい鳴聲で、もつと淋しがらせてくれよと、閑古鳥に呼びかけた句である。寂の世界に徹したいといふ心願が見える。「憂き我」こいつたのは、まだ本當に淋しさの世界に住みきらぬ自分への不満をあらはして居る。閑古鳥に呼びかけたのは、即ち自分自身に呼びかけたものとも見られる。閑寂に生きようとする芭蕉の理想があらはれた句である。閑古鳥は和歌の呼子鳥と同じもので、淋しい山中などで鳴く鳥で、俳諧では夏の季節になつて居る。その正體は郭公カウコウであるといふ。

なほ此句は日記にもある寺での作だとなるが、その寺といふのは伊勢長島の大智院のこと、奥細道の旅から歸つたをり、曾良のゆかりで暫らくそこに滞在したらしい。同院には今も芭蕉の眞蹟だといつて、寺での吟を傳へて居る。但しその句は下五字が閑古鳥でなくて「秋の寺」となつてゐる。芭蕉がその寺に足をとどめたのは秋であるから、秋季を結んだのは尤もであるが、「秋の寺」ではすつかり句の味ひが平淺になつてしまふ。それで大智院に傳へる眞蹟を否定する人もあるが、——私も嘗て大智院を訪ねてその眞蹟を見たが、まづ少くともその來歴だけは信じてよいと思つた。——しかしそれは「秋の寺」から「閑古鳥」と再案した所に、却つて芭蕉の心の進みを見るべきではなからうか。前にも言つた通り芭蕉は非常に句の推敲に骨を折つた人である。しかもその推敲は新たに作りかへるといふよりも創作當時の心境を深めて行くのであつた。「秋の寺」から「閑古鳥」へ、そこにもさうした芭蕉の精進のあとは見られるではなからうか。

五月雨や色紙へぎたる壁の跡 (同 上年)



句の前に「明日は落柿舎を出でんに名残をしかりければ、奥口の間々々を見廻りて」といふ文がある。一間々々とあるから當時の落柿舎はかなり廣かつたらしい。一體この落柿舎はもと小堀遠州の建てた茶室で、昔は中々立派なものだつたらしい。日記の廿日の條にも

落柿舎は昔のあるじの作れるまゝにして處々頽破す。なか／＼に作り磨かれたる昔のさまよりも、今のあはれなるさまこそ心とどまれ。彫せし梁斷ける壁も、風に破れ雨に濡れて奇石怪松も群の下に隠れたる竹縁の前に柚の木一もと花かうばしければ、

柚の花や昔しのばむ料理の間

とある。見廻つた中のある部屋には、昔色紙短冊などを美しく貼り交ぜてあつた壁があつたのだらう。その色紙もいつの間にかへぎ取られて、その跡だけが薄黒いにちんだやうな色をして居る。それが五月雨のしめつばい物憂い心、ことには明日はもうそこを出るといふ侘しい心もちとしつくり合つて居る。これもあの「山里は萬歳遅し」の句と同じく、自然の調和である。

座右之銘

人の短をいふ事なかれ

己が長をとく事なかれ

物いへば唇寒し秋の風(同 年 庫?)

これは勿論教訓の句である。——座右之銘とあるから人に教へるといふより、自ら慎む意が深い。——教訓だから

藝術にならぬといふ事はない。芭蕉はこの自誠の箴を藝術的表現に求めて、さうして此句の形をとつたのである。随つて此句からは道徳的な理窟だけでなく、秋風に吹かるゝ唇の寒さも同時に感ずるのである。そこに此句が單なる概念の十七字化と異なる點がある。

白露をこぼさぬ萩のうねり哉(同 年 枯 集?)

畫讚の句である。實景を見ての作ではない。しかしうね／＼と戦々萩のなやかな姿がよく言ひおほせられて居る。上五を「白露も」と傳へたものが多いが、もでは理窟が加はつて俗に墮する。一字を忽せにしてはならぬ事である。木枯・翁草・泊船集等信すべき書には、皆「白露を」となつて居る。

於大津義仲庵

三井寺の門たゝかばや今日の月(同 年 雜 談 集)

句意は明かである。賈島の「僧敲月下門」の詩句をふまへた作である。支考の「和漢文操」に芭蕉の月見賦といふ文のせ、その中にも此句が入つてゐる。此月見賦はやゝ疑はしいものだと言はれて居るが、一讀すれば當夜の有様がよく分る。

庵にかけむとて句空が書かせける兼好の繪に

秋の色糠味噌壺もなかりけり(同 年 原 集?)

句空は加賀金澤の門人で、この句を巻頭として「草庵集」を撰んだりしてゐる。句は徒然草の九十八段に「一言芳談」



「後世を思はん者は糞汰瓶じんたびん一つも持つまじき事なり」といふ言葉を引いてあるのに基いてゐる。この風味噺も持たぬといふのは、兼好の理想である。それをそのまま兼好の人物をあらはす言葉として用ひたのは面白い。さうしてその執着を離れた境涯を、清爽の天地秋の色に配したのである。秋の色は即ち糞汰瓶も持たぬ聖僧の生活が、象徴されたものともいへる。秋の空・秋の風・秋の暮・秋の人、そんなにくらかでも具象的な言葉をもつて来ないで、秋の色と書いたのは、やはり芭蕉でなければ言へないやうな氣がする。

菊の後大根の外さらになし (同奥千鳥?)

元稹が菊を詠じた「不是花中偏愛菊、此花開後更無花」といふ詩句に趣向を構へたので、成程菊花謝して後は愛すべき花もないが、我が俳諧にはなほ大根があるといふのである。「の外更に無し」と否定形で言つてゐるが、實は大根を大いに肯定して居る。あの洗ひ立てた肌の白色、風呂吹にした味、菊後賞すべきは只この大根のみといふのである。古詩をふまへてしかも大根の平俗を點じた所が俳諧である。芭蕉は春雨の柳は全體連歌で、田螺とる鳥は全く俳諧だといふやうな事を教へたといふ。風雅の境は即ち和歌連歌と同じで、しかも取材構想の範圍を平俗に求めたのは、蕉風俳諧の一特質であつた。尤も此句の如きは寧ろ詩句に基いたといふ智的興味が主で、全體として大した句ではない。只此機會に所謂和歌趣味と俳諧趣味との異なる點を説いたとだけである。

梅が香やしらゝ落窪京太郎 (元禄年間 柿表紙)

これも難解の句だからあげる。しらゝ・落窪・京太郎は皆室町時代に行はれた小説の名である。成美の「隨齋諧話」に

も引いて居るが、淨瑠璃十二段草子の中に

まなの上手にかなの一、よみける草子はどれくぞ。源氏・狭衣・古今・萬葉・伊勢物語・しらゝ・落窪・京太郎・百餘帖の虫盡し、八十餘帖の草づくし、扇流しに覗わり云々。

と見える。そしてこの落窪は平安朝の落窪物語ではなくて、やはり室町時代に出来た小落窪の方だらうといふ事である。とにかく是等の古い物語の名で、古風なお姫様の部屋の有様などが聯想される。それに上品な梅が香をとり合せた作である。此種の古典趣味的な作は蕪村の最も得意とする所で、芭蕉の作にはあまりない。

三日月に地は朧なり蕎麥の花 (元禄五年 浮世の北)

空には淡い三日月の光がかゝつてゐる。地には蕎麥の花がその光をうけて、黄昏の暗い色の中に白く朧に浮び出て居る柔らかな靜かな感じである。此句はなほ次の如く種々の形で傳へられて居る。

三日月や地は朧なる蕎麥島 (三日月日記)

三日月の地は朧なり蕎麥島 (泊船集)

三日月や地は朧なる蕎麥の花 (畫兄弟)

今は一番古く刊行された書物に出てゐる形に従つたのだが、上五は「三日月に」より「三日月の」がよく、下五は「蕎麥島」より「蕎麥の花」がよい。さうした方がいづれも限定されなくて柔か味が加はるからである。

三日月の地は朧なり蕎麥の花

この形にきめたいと思ふ。



爐開や左官老い行く鬢の霜 (同奥千鳥)

爐開は冬になつて防寒のため爐を設ける事で、又特に茶湯の爐を開くこともいふ。こゝはいづれでもよいがまづ一般の爐開を解した方がよからう。その爐開の折漆喰など塗りかへるので、毎年左官に来て貰ふ。今年もその左官がやつて来たが、一年の間にすつと鬢の白髪も増したやうだ。この左官も大分老けて来たなといふのである。そして左官の鬢の霜を嘆ずるのは、やがて作者自身の老いを覚える心である。寒い冬を待つわびしさと、老境を歎ずる心とが此句の中心になつてゐる。

年々や猿に着せたる猿の面 (元禄六年 猿舞師)

句の表にはそれと定かにあらはした季の詞はないが、これは歳旦の吟である。——猿廻しは初春のものだから自ら歳旦の句として成立つ。「去來抄」に「年々」に季感があるやうに解してあるのは、それで特に年の改つた意が含まれるからであらう。季語としてはやはり「猿の面」に正月気分がある。——句意は「三草紙」に「此句歳旦、師曰く人同じ所に留りて同じ所に年々陥る事を悔いて言捨てたるとなり」とあるので盡してゐる。毎年人は新たになつたやうに思つてゐるが、實は一向進歩して居ない。丁度猿が面を冠つて躍つて居るやうなもので、人間の眞似をしては居るやうだが、冠つて居るのは相變らずの猿の面だといふのである。人間の愚かさを言つて自嘲の意も籠つてゐる。此句もやつぱり實際猿廻しを見て感を發した句であらう。

郭公聲横たふや水の上 (同 實年)

芭蕉はこの句と同時に

一聲の江に横たふや時鳥

こいふ形も案じた。二句いづれに定めようかと決しかねて居る時、水間沾徳セツトクが訪ねて来たので兩作の評を乞ふと、水の上の方をとつた。その中に素堂・安適などもやつて来て遂に水の上の聲よろしきに定つて事やんだと、芭蕉自ら門人に送つた消息の中に言つて居る。又許六は「扁突」の中でこの二句の制作過程について臆測を試み、去來の難詰を受けて居る。句は芭蕉自ら註して居る通り、前赤壁賦の「水光接天白露橫江」の趣を時鳥の聲に移したのであるが、さて二句の中果して「水の上」の方がすぐれて居るであらうか。芭蕉が自らそれを決しないで、他の批判に任せた所は、實は芭蕉自身では二句の間に大した優劣を感じなかつたのであらう。さうかと言つて同じ趣の句を二つ共出すわけには行かないので、先づ人のいひなりに従つたものだらうと思ふのである。許六の臆測の如きはあまりに獨斷的である。とに角二句いづれにしても「横たふや」が眼目で、廣々とした江水の上を斜に横ぎつて、鋭い時鳥の一聲が聞えたといふので、「水光接天白露橫江」といふ原句の大きな景趣が十分にあらはされて居る。

煤掃は己が棚釣る大工哉 (同 俵年)

いつもはよその仕事にばかり働いて居る大工が、今日自分の家の煤掃をして見ると、道具をしまふのにいろ／＼勝手が悪い事に氣附く。ちやこゝらに一つ棚でも釣つてやるかなと、そこは御手前もので早速棚をしつらへる。自分で自分の家の仕事をするのはあたり前の事だが、よその仕事ばかりしつけて居る大工には、何だかそれがをかしく感じ



られるのである。その一寸したをかしみを捉へたのが此句である。芭蕉の句が「炭俵」の頃から次第に軽みに移つて行つた。その軽みといふのは即ちかうした日常茶飯事の間に、一脈の俳味を見出すことである。それは寂びに捉はれない寂びとも言はうか。一度寂びの境界に徹した者が、再び平俗の世界に返つて眺めた姿である。

生きながら一つに氷る海鼠哉 (同會の翁年)

海鼠が容れられた器物と一しよに氷りついてゐるさまである。「生きながら」といふのに海鼠の遅鈍な情が含まれて居て妙味がある。

蓬萊に聞かばや伊勢の初便 (元祿七年)

蓬萊は初春の祝ひとして、串柿・野老・柑子・勝栗・昆布・穂俵・海老等を三方に飾つたのをいふ。「去來抄」に「都故郷の便とも侍らず、伊勢と侍るは元日の式の今様ならぬに神代を思ひ出で、便り聞かばやと道祖神の胸中を騒がし給ふごこそ承り侍る」と、去來が解したので句意は盡して居る。この「蓬萊に」の「に」を只「蓬萊のところ」で、「蓬萊に對しながら」と解する説もあるが、「聞かばや」といふ語氣は蓬萊その物に直接呼びかけたものでなければならぬ。蓬萊の神々しさから伊勢の神事を聯想して、すぐその床飾りに呼びかけたのである。しかしその初便といふのに、伊勢の門人などからの便りを期待した心もちが籠つて居る事は勿論であらう。なほ芭蕉は「便り」の一字の出所として、慈鎮和尚の「此のたびは伊勢の知る人音づれて便り嬉しき花柑子哉」といふ歌を自らあげたと「去來抄」には記して居る。又或書に伊勢海老に便りを聞かうといふ事だとあるが、成程その蓬萊の中の伊勢海老から特に伊勢の便りを聞かうといふ

心もちはあるかも知れぬ。しかしやつぱり蓬萊全體の古式な感じから伊勢を聯想したと見るが自然である。

梅が香にのつと日の出る山路哉 (同俊年)

山路を朝早く歩いて居るどこからか梅花の匂ひがかをつて来る。と向ふにのつと朝日がさし出たといふ景色である。野坡が此句に「ところ／＼に雉子の鳴立つ」と脇をつけて居る。早春の山路の景がよくあらはれて居る。誰にも分る句でしかも少しも卑俗に陥つて居ない。

八九間空で雨降る柳かな (同猿蓑年)

昔からいろ／＼やかましく論ぜられて居る句である。實際雨の降つて居る景色だとか、いや柳の糸を雨に見立てたのであるとか、さまざまに説いてゐる。しかし後年出版されたものではあるが、「花は櫻」といふ書には「春興」と題して

春の雨いと靜に降てやがて晴れたる頃、近きあたりなる柳見に行きけるに、春光きよらかなる中にも、したよりは

いまだをやみなければ  
といふ詞書がついてゐる。これで景色は明かであらう。八九間は柳の高さである。その八九間の空から柳の糸を傳つて滴る雨雫を、「空で雨降る」と言つたのである。但しあまり宜い句とは思はない。

春雨や蜂の巢傳ふ屋根の漏 (同依年)

全く寫生の句である。かうした句は芭蕉の作では稀な方であらう。同じ寫生でもやはり芭蕉の生命こした寂びの色



が自よつから浮んで来る。古い註の二三に、新今古の「つくく」と春の眺めの淋しきはしのぶに傳ふ軒の玉水」を引いて居る。和歌趣味と俳諧趣味とを對照するにはいゝ例である。

上野の花見にまかり侍りしに、人々幕打ち

騒ぎ物の音小唄の聲、さまざまなりける傍

らの松陰をたのみて

四つ五器の揃はぬ花見ごゝろ哉 (同 俵年)

五器は本来御器と書き食器の汎稱である。托鉢の僧などはその御器を五ツ——大鉢・中鉢・小鉢などいふ風に——一組として携へて居るものだといふ。芭蕉が支考に贈つた句の中にも、「この心推せよ花に五器一具」といふのがある。ところが行脚の僧などは簡便にその中一種だけ缺いた四ツ一組のものを持つ。それを四ツ五器といふのださうだ。句は人々が珍味嘉肴を携へ、太鼓や三味で騒いで居る中に、自分は何の御馳走もなく花を眺めて居るといふので、佗びを樂しんで居る風情がある。「揃はぬ花見心」といふのは、四ツ五器の揃はないやうな心、——即ち豊満しないどこか佗びた心で花を見て居るといふのである。

木がくれて茶摘も聞くや時鳥 (同 俵年)

折から茶摘時に時鳥の聲を聞いて、あの木隠れに茶摘に忙しい人たちも、しばし手を休めてこの聲に聞入つて居るだらうと思ひやつたのである。「別座舖」によればこれは實景によつて作つたのではないやうであるが、芭蕉はかうし

た情景を嘗て何處かで見えておいたのであらう。即興的の句として面白い。

麥の穂を便りにつかむ別かな (同 磯海年)

芭蕉は元祿七年の夏、また行脚を思ひ立つた。そして此度は西國に渡り、長崎にしばし足を留めて唐土舟の往來も見たり、聞馴れぬ人の詞も聞かうなどと思つて、五月八日(一説十一日)に江戸を首途した。門人たちはわざ／＼川崎まで送つて来て、それ／＼饒別の句などを贈つた。そのかへしとして芭蕉は此句をよんだのである。當時見送つた中の一人桃隣はその時のさまを記して「二時ばかりの名残別々時は互にうなづきて聲をあげぬばかりなりけり」と言つて居る。「便りにつかむ」といふのに、人々に別れて心細い悲しみの情が託せられてゐる。麥の穂は眼前の實景である。しかしつかむは實際でなくてよい。さうしたつかみたい心もちである。別離の眞情が流露して、惻々として人を動かす所がある。一に「力につかむ」となつてゐるが、やはり「たよりの」方が弱々しく縋つて行く情が深いと思ふ。

五月雨の空吹落せ大井川 (同 磯海年)

この句は又中七が「雲吹落す」とも傳へられて居る。江戸を立つて東海道を上る途中大井川の川止にあつて、島田の塚本如舟の家に暫く空の霽れるのを待つて居た。その時の吟である。さて句は「空吹落せ」と「雲吹落す」とでは意味がすつかりちがつて来る。こゝは雨の晴れるのを待つて居るのだから、やはり「空吹落せ」に従ふべきだと思ふ。幾日も降りつゞく雨に、大井川は濁流滔々として逆巻き流れ、空には暗雲が低く垂れていつになつたら晴れるのか分らない。いつそ一思ひにあの空ごとすつかり大井川に吹落してしまつてくれ。そしたら雨の根も絶えて晴れるだらうとい



ふのである。「吹き落せ」は風に對していふのだが、風を呼ばないで大井川に呼びかけたのは、句趣を複雑にしたのである。大きな豪壯な感じのする句である。

世を旅に代かく小田の行戻り (同日記年)

一寸分りにくい句だからあげる。これは途中名古屋で舊交の人々に會ひ、門人荷分のところでよんだ句だといふ。「世を旅に」は一生を旅としての意で、「陸奥千鳥」には此句のあとに「日來の境界を言捨て、唯一生を旅より旅にして栖定まらず」と言つて居る。代は苗代などの代で田地にいふ詞。代かくといふのは「師走袋」に田に水を入れて手でかきならすことだと言つてゐるが、又耕した田に嚙アサを作ることもいふ。とにかく田の中を往き返りしつゝやる仕事であらう。で句は自分は生涯を旅に送つて、かうして幾度も道中を往反するので、又諸君にもお目にかゝる事だといふのである。

水雞鳴くと人の言へばや佐屋泊り (有磯海年)

佐屋は尾州の地名。名古屋の露川等がそこまで送つて来て、その地の隠士山田氏の亭に一しよに旅寢した。そのをりの吟である。句意はここは水雞が鳴くと人がいふものだから、わざ／＼一夜を過す事にしたといふので、水雞聞きに立寄つた風流をよんだのである。「言へばや」のやは單に間に挟んだ感歎の助詞で疑問ではない。「言へば佐屋泊り」とつゞけて解してよ。

朝露によごれて涼し瓜の土 (續猿蓑年)

句意は明かである。爽かなそして新鮮な感じがする。此句は一に下五が「瓜の泥」ともなつて居る。「三草紙」にはそれについて「此句は瓜の土と始め有り。涼しきといふに活きたる所を見て泥とはなしかへられ侍る」とある。だが土と泥とでさう涼しさの感じがちがふやうには思へない。ただ土といへば多少乾いた感があり、泥の方は少し濡れて居るやうな感じはする。しかしすでに「よごれて」と言つて居るのだから、どちらでも大した變りはないやうに思ふ。

六月や峯に雲置くあらし山 (同日記年)

嵐山といへばすぐ春の櫻の景色が聯想されるのであるが、これは眞夏の嵐山の景である。山は鬱蒼と茂つて峯には暑さうな入道雲が立つて居る。春の女性的な色彩と異つて、これは男性的な強烈さがある。「六月や」と上五に打出した所に、まづ烈日を思ふ季節感が強められて居る。支考が之を音讀せよと言つて「人もしみな月と訓にとなへば語勢に炎天のひゞきなからんとぞ」と説いて居るのは、よく此句の眞趣を解した言である。

夏の夜や崩れて明けし冷し物 (同日記年)

これは芭蕉が京都から近江に行つて膳所の曲傘のところ、支考や惟然などと六月十六夜の月を賞しながら連句を興行した。その時の發句である。支考は「今宵の賦」——「續猿蓑」に出づ。——といふ文を作つてそのさまを記してゐる。冷し物は夏の料理に食物を冷しておくのである。短か夜がはや明ける、起きて見ると冷し物がいつの間にか崩れて居たといふのである。形の崩れた冷し物に、夏の夜明のぼんやりした心持が、所謂同じ匂ひでうつり合つて居る。匂ひ。響きといふ事は、主として連句の方で言つて居る事だが、その精神は發句の方にも移して説く事が出来る。



——なほこの事は後に言はう。——「崩れて明けし」とは誠に巧妙な言廻しである。曲翠が此句に「露ははらりと蓮の縁先」と附けて居る。

秋近き心の寄るや四疊半(同 初年)

「鳥の道」によれば元祿七年六月二十一日大津の木節庵での吟だといふ。そして木節の脇しどろにふせる撫子の露以下歌仙が催されて居る。その時一座には芭蕉と木節の外に惟然と支考が居た。四人は實際木節の家のはなれか裏座敷につゞいた茶室でも、話し合つて居たのだらう。もう朝夕の風には何となく秋が感ぜられる。あゝもう秋だな。さうした淋しさをみんなが心に抱きながら、四疊半に集まつて居る。しんみりと深く心にはひつて行くやうな句だ。「秋近き心」といふのは何といふ巧みな、そして深い味ひを持つた言葉だらう。

ひやくと壁をふまへて晝寝哉(同 夏日記年)

路通の「芭蕉翁行狀記」には「粟津の庵に立寄り、暫く休らひ給ひ残暑の心を」と記して此句が出て居る。又「笈日記」によればこれも木節亭での吟だとある。そして「此句は如何に聞き侍らんと申されしを、是は只残暑とこそ承り候へ。必ず蚊帳の釣手など手にからまりながら、思ふべき事を思ひ居る人ならんと申侍れば、この謎は支考に解かれ侍ると笑ひてのみ果てぬるをかし」と記してゐる。所在なさにごろりと仰向に寝そべつて、足をそこの壁にもたせかけて居る。とその足裏が流石に冷え／＼と感ぜられるのである。蚊帳の釣手でもいちづつて居る人のさまと支考が解したのも面白い。因にいふ此句は秋の句で「ひやく」がその季題である。晝寝は今では夏季の題として取扱つて居る。

が、昔は無季であつた。季題も時代によつて漸次ふえたり變つたりして來て居るから、古句をよむ際には注意せねばならぬ。

尼壽貞が身まかりけるとききて

數ならぬ身とな思ひそ玉祭り(同 磯海年)

壽貞尼は芭蕉と同郷の人で、——もと阿波の産だともいふが、とにかく伊賀に住んでゐた。——芭蕉が今度旅に出かけた時は江戸の草庵に留守番をしてゐたらしい。芭蕉は旅中はずもその訃音に接したのである。壽貞と芭蕉との關係については、近頃特に興味をもつて論ぜられてゐる。それは芭蕉の門人野坡の門下たる安藝の風律が書残した「小咄」といふ書の中に、壽貞は芭蕉の若い時の妾で次郎兵衛といふ子供があり、後に尼になつたといふ由の記述がある。この事が沼波瓊音氏によつて紹介されてから、芭蕉研究家の興味を一時ここに集めた觀があつた。しかし別に壽貞は芭蕉の乳母だといふ傳へもあり、風律の言だけを直ちに信ずる事も出来ない。勿論芭蕉とても若い時は人並に色戀の沙汰も全く無い事はなかつたらう。あの二十九歳の時に自ら撰んだ「貝おほひ」の中には「我も昔は若衆好きの」と言つて居る位である。殊に多感な詩人的素質を持つて居た彼が、何かかうした艶っぽい話を残して居るといふ事は、寧ろ當然の事かも知れぬ。だが壽貞をすぐ芭蕉の妾とよめてしまふのは、風律の「小咄」だけでは文献的確實性に乏しい。遺憾ながらこれは後日の研究に俟つ外はない。只此句に籠つて居る深い情愛から見れば、少くとも乳母か何か芭蕉と濃やかな關係を持つてゐた人にはちがひなからう。又「數ならぬ身とな思ひそ」といふ言葉から見ると、壽



貞がこれまで日陰者のやうにして淋しく暮して来た人であることも思はれる。今その亡き魂に對して、決して數ならぬ身だなどと思つてはくれるなど、強く慰めたのである。そしてその慰めは實は又芭蕉の悲しみを慰める言葉でもあつたのだ。なほ「數ならぬ身」といふのを芭蕉自身のことと解する説もあるが、それでは十分意が通ぜぬやうに思はれる。とにかく亡き魂を慰める言葉として、此句は始めて深い情愛が感ぜられる。

九月九日

菊の香や奈良には古き佛達(同日記年)

ここで少し句ひについて説かう。此句は同じ句ひをもつたものの調和である。句ひ、響き、位等言葉はちがつて居るが、意味する所は同一で、連句でいへばその句の全體的な印象とでもいふものである。例へば鋭さ、鈍さ、強さ、さういつたやうな抽象的に受入れられる感じである。そして前句に鋭い句ひがあれば、附句も又同じ鋭い句ひで相應して行く。それが即ち句ひの付で、意味の上には直接の關係がなくてもよいのである。例へば

くれ縁に銀土器を打碎き

といふ句に

身細き太刀の反る方を見よ

と附ける。この二句の間には何もその太刀で土器を打碎いたといふやうな、因果的の關係は全くないのである。只くれ縁に銀土器を打碎いたその細いピンとしたやうな響き、それに細身の太刀のピンと後に反つた同じ響きを以て應じ

たのである。そこに一脈の微妙な連鎖が保たれてゐる。所謂幽玄體の趣がそこから發するのである。そしてこの句附の精神は發句に於ても亦同様に見る事が出来る。即ち此發句で菊の香と奈良の古い佛達とは、何等その間に因果的な關係を持つて居ない。只菊花の典雅な香、それと奈良に年經ておはします佛たちの蒼古な感じ、それが同じ句ひをもつて微妙な調和を保つて居るのだけである。しかもその句ひが通ひ合つてゐる所に無限の妙味が存するのである。かうした同じ句の配合は芭蕉の句には甚だ多い。前にあげた「山里は萬歳遅し梅の花」でも、「草臥れて宿かる頃や藤の花」、「時鳥大竹藪をもる月夜」、「五月雨や色紙へぎたる壁の跡」等、皆その中には句の調和がある。これは芭蕉の俳諧の極めて著しい特色で、それ以前の貞門や談林の俳諧に於ては全く見られない所であつた。此句は必しも句の配合による幽玄味を代表した最上の作といふわけではないが、便宜上ここで説いたわけである。

ひいと啼く尻聲悲し夜の鹿(同日記年)

これも奈良での吟である。句意はこのままである。實感をそのまま句にしたのである。なほ「陸奥千鳥」には「ひい」が「びい」と濁つてあり、芭蕉自筆の眞蹟にもやはり「びい」とあるさうである。實際の鳴聲によらずに考へると、ひいの方が悲痛な感じがするが、眞蹟にわざ／＼濁つてあれば——古いものは濁音によむ所も濁音を附けないのが通常であるから、特に濁點を附したといふのは音をそのまま寫さうといふ考があつたのであらう。——それに従ふべきであらう。

白菊の目に立て、見る塵もなし(同年の菊の塵)



芭蕉は奈良から大阪に出て来た。そして一日園女の招きを請けて、その家に赴いた。その時の吟で「笈日記」には「園女が風雅の美をいへる一章なるべし」とある。即ち白菊の清さを園女の風雅心の氣高さに比したのである。だが始めからさうした比喻の句として見ず、單に白菊の清さを言つたものと解した方が、正しい見方ではあるまいか。その場合芭蕉が園女に對する比喻を意識して居た事は勿論である。しかし句は白菊の句である。その中に自から比喻が含まれたのである。同じ事かも知れないが、私はさう解したい。これはじつと一塵も留めない白菊の清さに見入つて居て、始めて發し得る言葉である。普通の人ならかうした挨拶の句といふものは、大抵お座なりの何の感激もないものになつてしまふが、芭蕉はそんな場合でも決して自分の感情を偽つて居ない。偉い所である。

旅 懷

この秋は何で年よる雲に鳥(同日記年)

「笈日記」による此句は九月二十六日清水の茶店に遊吟して、その朝から心に籠めて念じた句で、下の五文字にその胸をさかれたとある。即ち「雲に鳥」の五字は特に芭蕉が思ひを潜めて言ひ出した句である。芭蕉はそれが彼の死の前兆でもあつたのか、此の秋頃からとかく身體もすぐれず氣分も引立たなかつたやうである。しみくくと老いを歎く心も深かつたであらう。句は旅中この老境を歎ずる情を、無心の雲と鳥とに寄せたのである。雲に鳥は漂泊の旅を象徴したもので、必しも實際に雲や鳥をさして言つたのではない。陶淵明の「雲無心而出岫、鳥倦飛而知還」とか、蘇東坡の「倦鳥孤雲豈有期」等の詩句から、自から漂泊隱遁の情が含まれるのである。飄々として流れ行く白雲、飛ぶに倦

んで歸り行く鳥の姿、その雲鳥に情を勞しつつ、又今年も老い行く事かなあと歎じたのである。一讀その意を捕捉し難い句であるが、再讀三讀靜かに句の裏に潜む芭蕉の心に觸れ得たなら、始めて此句の言葉で説き難い眞趣を味ふ事が出来るであらう。

秋深き隣は何をする人ぞ(同上年)

難波の芝柏亭での吟。隣り合せて住んで居ながら、あるじは何をしてゐる人なのか滅多に顔を見せた事もない。家の中もいつも何だか森閑としてゐる。秋も更けて行く今日此頃は殊にひっそりとした氣がする。ふと「隣は何をする人ぞ」、さうした思ひが胸に浮んで來たのである。晩秋の寂しさに籠る人の一種の神秘的な空想ミステックが感ぜられる。前の雲に鳥の句にしても、それは寫生や配合やの句とは全く異つた趣を持つて居る。作者の全生活全人格の中から、自らにしみ出た言葉である。作つても出來ない、練つても出來ない。芭蕉と同じ心的體驗を経ないでは、この境には到り難

所 思

此道や行く人なしに秋の暮(同便年)

行人絶えて暮風冷かに吹く秋の淋しさを言つたのであるが、「所思」と題したのはその中に眞に我が俳諧の道に志す人の少いのを歎ずる意を寓したからである。「この道」は地上の道であつて、同時に芭蕉の理想の道をさして居る。「行く人なし」の中には蕭條と暮れ行く野徑のさまが思ひ浮べられると共に、眞に俳諧の正道を踏む人の少いのを淋



しむ芭蕉の心が思はれる。その景情は一にして二でない。なほ「笈日記」によれば、芭蕉は此句と共に

人聲や此道かへる秋の暮

といふ句を出して、此二句どちらがよいか支考に尋ねた、支考は「此道や行く人なし」と獨歩したる所誰か其後へに隨ひ候はん」と答へて、これに所思といふ題をつけたなどと言つて居る。支考は流石に芭蕉の意を悟つたのであらう。獨歩する者の淋しさ、天才や學者の抱く孤獨感、それが此句の中に含まれて居ないとは、どうして言へよう。

今一つの「人聲や」の句は又ちがった境地の淋しみを言つて居る。これは人の聲をなつかしんだ所がある。もう日も暮れかけた淋しい道、芭蕉は一人とぼくとそこを歩いて居る。と思ひがけなくその道に人聲を聞いたのである。「人聲や」と五文字に打出したのも、その人聲を聞いた時の親しさなつかしさの情がびつたりとあらはされて居る。空谷の登音の趣である。而して「此道や」の句が所思であるとすれば、「人聲や」の句もまた俳諧の眞の知己を得た喜びを寓したものと見なければならぬ。一體句を寓意的に強ひて解するといふ事は、すべて藝術的解釋として好ましい事ではないが、此句の場合の如きは全然寓意を離れて解したのでは、寧ろ芭蕉の本意を失ふものといふべきであらう。

旅に病て夢は枯野をかけ廻る (同 枯尾花年)

「病て」は泊船集・木枯集に「やんで」と假名書してあるから「やんで」とよんだ方がよからう。「廻る」は當時の諸書皆假名書きにしたものはないが、勿論「めぐる」で「まはる」ではない。此句は誰も知つて居る通り芭蕉の最後の吟である。芭蕉が病中此句を吐いたをりのさまは、「笈日記」や「枯尾花」によつてほぼ傳へられて居る。「笈日記」には芭蕉

は此句をよんでから、「生死の轉變を前に置きながら發句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠めて年もや半百に過ぎたれば、寝ねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山木野鳥の聲に驚く。是を佛の妄執といましめ給へる、ただちは今の身の上に覺え侍る也。此後はただ生前の俳諧を忘れむとのみ思ふは」と、かへすく後悔したと記してある。かくて遂に辭世としての辭世も残さず、此句が直ちに辭世の吟となつてしまつたのである。弟子が辭世の吟を乞うた時、芭蕉はそのをりくくの句がすべて辭世だと答へたといふ話も別に傳へて居る。「枯尾花」にも「常にかなき句どものあるを前表と思へば、今さらに臨終の聞えもなしと知られ侍り」とあるから、芭蕉は生前すでにこれらの句も辭世となるべき事を覺悟して居たのである。この句意は別に解するまでもなく明らかである。西は不知火筑紫の果てまでもと思ひ立つた旅路が、まだ半ばにも達しない中に、空しく客舎に病臥しなければならなくなつた芭蕉の吟魂は、誠に夢裡にも枯野を駆けめぐつた事であらう。詩に瘦せ旅に瘦せて一生を終つた芭蕉の最後の吟として、一層深い感慨を覺える。しかも旅へのさうした執着を妄執と觀じて、生前の俳諧を忘れようとした芭蕉の心は、あの方丈記の末章の言葉も思ひ合されて愈々尊い。

奈良七重七堂伽藍八重櫻 (泊船集)

名詞だけの羅列から成つて居るといふ特異の句體の爲め、特に名高い句である。「奈良七重」は先づ頭韻をふんで調子を取り、次に同じ名數の七堂伽藍から七重に對する八重櫻とつづけ、しかも七重八重に更に奈良から聯想される九重の都——「古の奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬる哉」の歌との聯想も勿論加はつてゐる——をも暗に對させて居



る。恐ろしく技巧的に仕立て上げた句である。随つてさうした技巧の味が主なので、句意などはどうでもよいのである。強ひて意を解すれば奈良の都には七重に莊嚴された立派な七堂伽藍が多くて、そこには八重櫻が今を盛りと咲きつて居るといふのである。但し此句は「泊船集」以外には當時の俳書に所見がなく、菴甘介我の如きは「俳諧あやめ草」の中に此句の作者を椎本才麿だと言つて居るので、近時介我の説に従ひ、これを芭蕉句集中から抹殺しようとする人もある。しかし元來此種の技巧的な、しかも奈良を中心として必然的に聯想さるべき趣向の句であれば、類想の句は自然他にもあるだらう。現にすつと古く寛文七年に出た「續山井」——その中には芭蕉の句も宗房の名で入集して居る——の中にすでに。

名所や奈良は七堂八重櫻 如 貞

といふ句がある。且つ芭蕉生前の集に見えないとしても、許六は元祿十五年に編した「字陀法師」に此句を芭蕉の作として三段切の例にあげてあり、又支考も「古今抄」に引いて居るから、介我の説だけで抹殺するのは早計であらう。しかし要するに人口に膾炙して居る割には、決して高く批判せらるべき句ではない。その作句年代も不明だが、勿論貞享以前の作だらうと思ふ。

### 木曾殿と背中合せの寒さ哉

句形は中七が「うしろ合せの」、下五が「夜寒哉」等色々に傳へられて居るが、とにかく普通此句は芭蕉の作として信ぜられて居る。芭蕉の墓が義仲寺の木曾塚と隣合つて居る所から、さう思はれたのも尤もであるが、實は此句は伊勢の又玄イハゲンといふ人の作で、その又玄が義仲寺境内の無名庵に芭蕉を訪ねて、木曾殿と背中合せに一夜を明かした時の吟

である。あまりに誤られすぎてゐるからその妄を辯じておく。なほ従來の芭蕉句集類に、かやうな誤りを犯して居るものは少くない。近頃發行された俳書大系の芭蕉一代集には、此種の誤を詳しく指摘してゐるから就いて見たが宜い。なほ左に特に誤られがちな數句だけを掲げて注意しておかう。句の下にあげたのが眞の句主である。

春雨や枕くづるる物の本 (支 考)

これは芭蕉句集として割合に信ぜられて居る「芭蕉句選」に誤られて居る。實は支考の作で且つ下五は「うたひ本」が正しい。「芭蕉句選」にはなほその外にも二三誤がある。

渺々と尻ならべたる田植哉 (蟻 道)

これは「笈日記」に見えるので特に困る。句主については蟻道以外の説もあるが、とにかく芭蕉の句でない事だけは確かである。

野の宮の花表に蔦もなかりけり (涼 菟)

船となり帆となる風の芭蕉かな (一 晶)

風國の「泊船集」に共に芭蕉の句としてあげてゐる。「泊船集」は芭蕉歿後最初に出た芭蕉句集として、特に名高いものであるが、やはりかやうな杜撰が絶無ではない。

によきくと帆柱寒き入江哉 (湖 春 ?)

教科書などによく採られてゐる句だが、これは元祿九年刊「復古集」に芭蕉の作としてあげて居る外に所見がない。「芭蕉句選年考」には湖春の作だといふ説を傳へてゐる。とにかく疑問の句として教科書などには勿論採るべきではない。



飛ぶものは雲ばかりなり石の上 (麻父)

那須の殺生石に芭蕉として碑まで建つて居るが、實はずつと後世の人の作である。麻父は安永天明頃越中の俳人。一體句碑などは句主の詮議などせず、勝手に建てたものが多いからうつかり信ぜられない。

山門を出れば日本の茶摘歌 (菊舎尼)

涼しさに四つ橋を四つ渡りけり (來山) (但し「花見車」には盤水の句とも傳ふ)

などまで、かつて宇治の萬福寺や大阪の四ツ橋の傍に、芭蕉の句として碑が建つて居たといふ話を聞いた事がある。

三日月やはや手にさはる草の露 (桃隣)

よく蕉風のさびと細みとを得た句である。これも芭蕉として句碑があつたらしい。又文壇知名の大家たちが芭蕉の句として論評した事もある。誠に芭蕉らしいといふ點からいへば誤るのも寧ろ尤もな感がある。しかし「三日月日記」に明かに桃隣の句として出てゐるから、とにかく芭蕉の句集からは除かねばならぬ。

おきなく起きば浮世の秋を見む

ある小説家の作中に芭蕉の句としてあつた。これもいかにも芭蕉の句らしい所がある。しかし確かな出所はない。又これを否定する反證もない。だがやはり確かな出所をあげ得る迄は保留しておく外はない。

鷺の足雉子脛ながく繼ぎそへて

山は皆蜜柑の色 黄になりて

右二句は共に芭蕉の作ではあるが、附句であつて發句ではない。

### 其 角

寛文元年七月江戸に生る。父竹下氏東順、母榎本氏。延寶初年十四五歳の時から芭蕉に師事して愛され、延寶八年にははやくも「田舎句合」にその才鋒をあらはし、蕉風の變遷上一時期を劃すべきかの「次韻」にも、作者の一人として加はつた。ついで天和三年廿三歳の時「虚栗」を撰して世の視聽を惹き、爾來嵐雪と共に江戸に於ける蕉門の中堅を以て目せられ、芭蕉も「草庵に桃櫻あり門人に其角嵐雪あり」と誇つた程であつた。彼は才氣煥發の人で豪放磊落の風があり、時に酒を被つて遊里に出入し、權貴に侍してその寵を受けるなど、芭蕉が閑寂枯淡の境に自適したのとは、全く生活様式を異にして居た。たゞ彼の天分はよく藝術を理解し、市井の間にあつて太しく卑俗に墮する事がなかつた。芭蕉が其角を推重したのも、全く彼のこの天賦の才を充分に認めてゐたからであらう。しかし才氣の人たる彼の句は、またその才のために煩はされて、徒らに鬼面人を嚇すやうな技巧と晦澁とに陥る事から免れることが出来なかつた。殊に師の歿後はこの險怪な風調は益々甚しくなり。所謂江戸座の俳風を成して江戸俳壇俗化の端を發いた。かつて蕪村がその「新花摘」の中に、「其角は俳中の李青蓮と呼ばれたる者なり。それだに百千の句のうちめでたしと聞ゆるは二十句に足らず覺ゆ。其角が句集は聞え難き句多けれども、讀むたび飽かず覺ゆ云々」と言つたのは適評であらう。其角はまたその磊落物に拘はらぬ所から、貞門談林など他門の俳人とも汎く交はり、一生の間に撰んだ俳書は二十餘部に達する。寶永四年二月廿九日歿、年四十七歳。句集には生前自ら編つておいた「五元集」、及びこれを坎窩久藏が四季に分ち收めて考訂した「其角發句集」があり、附合集としては百萬坊昏原の



編した「續五元集」、文集には「類柑子」がある。なほ近時勝峰晋風氏の編纂にかゝる「其角全集」は、其角撰述の諸書を集めてあつて便利である。其角の門からは老鼠肝湖十・松木淡々・桑岡貞佐・早野巴人・秋色女等の人々が出た。

### 日の春をさすがに鶴の歩み哉

貞享三年歳旦の句である。芭蕉の評語だといふ「初懐紙」の評に、「元朝の日の花やかにさし出で、長閑に幽玄なる氣色を、鶴の歩にかけて云ひつらね侍る。しかも祝言言外にあらはる。流石にといふ手爾波尤も感多し」と言つて居る。元朝の旭日を浴びて丹頂の鶴が庭をゆつたりと歩いて居るさまは、歳旦の景物として誠に此上もなくふさはしいものであらう。連句の場合發句の一般的條件としては、たけ高くと言ふのであるが、この句はその模範的例句として屢々引用されて居る。「日の春」は歳旦の祝語。

### 鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春

元禄十一年の歳旦吟で、「一日長安花」といふ前書がついて居る。江戸の繁華を言つた句で、梵鐘のやうな減多に需要のない物でさへ、流石に花の御江戸は諸國の人が入込むので、毎日一つ賣れない事はないといふのである。西鶴が「胸算用」に「さる程に大阪の大節季、よろづ賣の市ぞかし。(中略)一つ求むれば其身一代子孫までも譲り傳へる確日さへも、日々年々に御影山も切り盡すべし」と言つた言葉も思ひ合せられる。商賣の殷賑を側面から言つたのがねらひ所である。

### 四十の賀し給へる家にて

### 御秘藏に墨をすらせて梅見哉

前書によると貴人の賀宴に侍しての作と思はれる。——松平隠岐守の家中久松肅山侯の宴だといふ説もある。——御秘藏は殿御寵愛の美妾であらう。常時諸侯の邸に出入する俳諧師は、所謂殿の御機嫌とりで多少とも習間的色彩を帯びてゐた。この賀宴は表向き折目正しい方でなくて、ごく内輪の慰み半分のものであつたらしい。さてこそ俳諧師其角も召され、秘藏の美妾をも座に侍らせるといふ事だつたのだらう。その美妾に墨の香豊かに硯をきしまさせ、庭前の梅を見ながら短冊にかくべき句でも案じて居るのだらう。「御秘藏に墨をすらせて」といつた語氣に、其角がさうした習間的地位にありながら、少しも阿諛的な卑屈な所を見せず、あくまで俳人らしい面目が躍動して居る。そこが其角の群小俗衆と選を異にして居る點である。かの俗俳の本山ともいふべき立羽不角が、備角公に侍して京に上つた途次、大磯に泊つて

短夜ぞ不角行て寝いあす逢はう

備角

蚊も齒のたゝぬかしこまり

不角 (備角撰、繩袋)

と唱和した態度と比べて見ると、自ら氣品の異なる事が分るであらう。因にいふ「秘藏」はヒサウと清んでよむ。

### 遊大音寺

### 梅が香や乞食の家も覗かるゝ

大音寺は吉原の裏手にあつて、當時は全く田圃の中で附近には乞食小屋などが多かつた。さうした場末での即景で



ある。句意は明瞭であるが、理窟つばい主観が加はつて居るために、多少いや味に陥つて居る。

鶯の身をさかさまに初音哉

古來名高い句である。はやく許六は「鶯突」に「鶯といふ句はよのつねになり難き題也。晋子が身をさかさまと見出したる眼こそ、天晴近年の秀逸とやいはむ。亡師の餅に糞する（「鶯や餅に糞する」の句）とこなし給へる後、これ程に新しきは見えず」と激賞した。ところが去來はこれに對して、「この句は風情あり。然れども初音哉といへるいかゞ侍らん鶯の身を逆にするは戯れ鶯也。戯鶯は早春の氣色に非ず。初音の鶯は身を逆にする風情なし。初音ほのめくなどゝも詠あり。今其角が鶯を見るに、日頃その姿を覚えて句にのぞむ意を、畫屏などを見て作したる句也と難じらるゝも尤也」(旅寢論)と貶して居る。この兩評は一見相容れないやうであるが、實はその批評の立場を異にしただけであつて、いづれの言も當つて居る。即ち着想に新機軸を出したといふ點から見て許六の言は尤もである。しかし早春の鶯の性状といふ事實に即して見ると、其角の句は虚妄の譏りを免れぬ。ではこの場合事實を重んずべきか、着想に執すべきか。それは創作上一つの重要な問題となるべき事である。が結局それは作者の心もち一つに歸する事だと思ふ。即ちそこに作者としての特色が生ずるのである。其角のやうな作者であれば、事實よりも着想に重きを置いたのは當然であらう。——勿論それが全く事實として存在し得ない着想は許されないが、早春の鶯とてたとひそれが一般的でなくとも、身を逆さまにして鳴く特殊の場合には推想し得る。——さう解釋して私はこの句を佳句として肯定したい。なほ「五元集」にはこの句の上に「止丘隅」といふ大學の一句を題して居るが、これは彼の故事辭から題したゞけで、大學の本文と句の間には大した關係はないと思ふ。

京町の猫通ひけり揚屋町

「近隣戀」と題してある。句意は吉原の京町の猫が、揚屋町まで通つて行つたといふだけだが、傾城町での猫の戀だといふ所に興趣が湧く。講談などでよく引張り出される句だ。あとでも述べるが、彼の句には小唄や俗語に取入れられたものがかなり多い。それだけ彼の句は市井の趣味に富み、且つ大衆的な所があつたと言へる。

雀子やあかり障子の笹の影

其角の吟中難解のもの六十五句を選んで註した莊丹の「晋子發句撮解」によると、自註に「飛上りしやうしといふらんとあると言つて、井蛙抄にある爲氏の歌「古への犬きがやりし雀の子とびあがりしやうしといふらむ」さいふ歌を引いて居る。犬きは源氏物語若紫に見える雀の子を逃がした子供の名である。で要するにこの句はさうした故事を踏へて、表面は何氣ない體に言つて居ながら、その間に學才を仄めかさうとした意圖から作られて居る。爲氏の歌は明り障子の（題であるが、其角はそれを逆に行つて、明り障子で爲氏の歌を句はせたのである。其角崇拜の児童などは、「この下の句を裁ち入れて明障子といふ作意の手柄、しかも一句の打ちきゝもよく景情を備へ侍りて凡力の及ぶべき事にあらず」(新雜談集)と、ひどく感じて居るが、單に才人の才を見るだけで、作句の動機としても不純である。而してこの動機は其角の句をして、屢々智的興味以外に何物もない弊に陥らしめた素因を成して居る。

傘に時かさうよぬれ燕

「虛栗」に出てゐる。其角の早い時代の句である。雨に濡れつゝ飛ぶ燕を見て「自分の傘の中にはひつて來い。こゝ



に濡れないやうに袴を貸してやらう」と呼びかけたのである。俚耳に入り易くてしかもあまりいや味のない所が、この句のとりえであらう。京傳が「稻妻表紙」を草するに當り、不破伴左衛門の扮装が才牛（初代團十郎の俳名）の創意で、この其角の句意からとつて濡燕の模様とした。それ以來不破・名古屋鞘當の芝居では、雲に稻妻と濡燕とが會我兄弟の蝶千鳥の如く定つた扮装になつたといふ。そして濡燕といふ端唄の一節にも、「あけていはれぬ胸のうち、包むにあまる袖の雨、紋は三つの傘に袴貸さうよ濡燕」と、そのまゝ句が取入れられて居る。

美しき顔かく雉子の距かな

美しい顔と逼しい距との對照である。芭蕉はこの句に對して、「蛇食ふと聞けば恐ろし雉子の聲」を和した。二句とも名高い句であるが、いづれも概念的で詩的感興が稀薄である。

吉野山ぶみして

明星や櫻さだめぬ山かつら

山かつらは曉山の端にかゝる雲をいふ。名高い句であるが句意についてはいろ／＼説があつて、一向適解を見ない。定めぬのぬを完了の終止形に見る説もあるが、それは無理な解し方であらう。勿論打消の連體形である。まだ明星の光が淡くまたゝいてゐる靜かな明け方満山の櫻の間に曉の雲が搖曳して居る景色である。その曉雲と櫻花の色と共に灰白く匂つて居るので、いづれが櫻いづれが山かつらと定めかねる風情を言つた句にちがひない。それ以外に適解はないと信ずる。またさう解してはじめてこの句の風情は深い。幽玄味に於いてよく芭蕉の神を奪つてゐると言つてよ

からう。だから其角も自ら「句兄弟」の中に、この句をわざ／＼持出して「當座にはさのみ興感ざさりしを、芭蕉翁吉野山に遊べる時、山中の美景にけおされ古き歌どもの信を感じし紋、明星の山かつらに明残るけしき、此句の羨ましく覺えたるよし文通に申されける」と吹聴して居る。そして例の「撮解」にはかねて芭蕉は角の酒狂に心を隔てゝ居たのも、此句に感じて「角が酒は醒むる期あり、此句の匂ひ萬世消すべからず」と言つて勘氣を聴したといふ話まで書添へてある。

花中尋友

饅頭で人をたづねよ山櫻

「末若葉」に出てゐる。元祿十年の作である。句意は一向はつきりしないが、去來の「旅寢論」にこの句をあげて、「角が句は自讃といへり。然れどもその句意を聞けば、春花の間に遊んで、奴僕様のものに饅頭をとらせて、誰を尋ね来るべしといへる句となん。さりとは言足らず云々」と評してゐるので、さてはそんな意味かと始めて合點が行く。しかし確かに去來の評した如く言足らぬ句である。「饅頭で人を尋ねよ」だけで、「饅頭を駄賃にやるから誰それを尋ね出して來い」といふ意に解させようとするのは、全く無理と言はねばならぬ。しかも其角は自ら此の句を以て得意としたといふのである。恰度手品の種を割つてあつと言はせようといつたやうな作爲が、即ち其角の窃かに得意とした所であらう。而してこれこそ實に其角が自ら掘つた邪道の筈であつた。江戸座の俳諧はやがてかうした謎見たやうな句を喜んで、遂に濟ふことの出来ない類廢を來したのである。

越後屋に絹さく音や更衣

俳句俳文評釋



越後屋は江戸駿河町の三井呉服店で、江戸一番の本店であつた。「永代藏」には一日の賣高百五十兩あつたと言つてゐる。その店で初裕の帛を裂く氣持ちのよい音がスツ／＼とあつちでもこつちでも聞える。初夏の爽かな氣分が軽く浮き出て来る。許六は「俳諧問答」の中に新しいものと今めかしいものとの論をやり、この句の如きは今めかしい物を題材にしたので、其角ほどの相當の俳人が、こんな軽々しい事では困ると批難してゐる。しかしこの句はさう批難されるべきものではない。寧ろ都會人らしい敏感さから巧みに季節感を捉へ得た人事趣味の句として、江戸座の風調の善い方面を發揮したものといふべきであらう。

時鳥 一一の橋の夜明かな

一一の橋については諸説がある。「撮解」には江戸本所一ツ目二ツ目の橋だといひ、又京都東福寺門前大和大路にある一の橋二の橋だともいひ、或は又眞蹟に「淀」と題したものがあつたから淀の橋だともいふ。しかしこの句が叙景以外に、特殊の感懐をその中に寓してないとするれば、場所の詮鑿はさまで必要ではない。さうして私はこれを全く叙景の句であると解する。だから何處でもよい、一の橋二の橋と見渡されるやうな川のほとりに作者の位置を定める。そこを夜明に通るのである。四邊はまだ仄暗く川の面だけがぼつと白けて、その上に橋が一つ二つと數へられる。折から時鳥が一聲鳴き過ぎたといふのだ。其角の句としては素直なよい句である。因にいふ、この句はかつて國定小學讀本中に採録され、當時これは其角が遊里歸りの句だといふので、教育界に一問題を起した事がある。しかしこれを單に叙景の句とすれば、遊里歸りとか旅行の首途とか、種々のコンデイションをそこに設ける必要はないのである。——尤も實際遊里歸りといふやうな詞書でもおるといふのなら別問題だが、——其角の句だからと言つて早速吉原歸りを

理想されては其角も苦笑せざるを得ないだらう。

傾 廓

時鳥 あかつき傘を買はせけり

これこそ紛ひもない吉原歸りの句である。「類柑子」の「あかつき傘」と題した文の中にも出てゐる。廓から歸らうとする曉方、折からはらくと降り出た空に時鳥の聲が聞えたといふのである。雨の降り出した事を、傘を買はせたと言つたのはやはり其角らしい。そして曉傘を買ふといふので吉原情趣が溢れて來るのである。「傾廓」は傾城の居る廓の意。

かたつぶり酒の肴に這はせけり

「いつを昔」には「草庵薄酒の興友五に對す」といふ詞書がついてゐる。友五は江戸の俳人である。即興の軽い句として面白い。其角の磊落な風格が偲ばれる句である。

いき袈裟にすでんどうと打放されたるがさめて後

切られたる夢は誠か蚤の跡

人口に膾炙した句である。「去來抄」にこの句を評して、「其角は實に作者にて侍る。はつかに蚤の喰附きたる事誰かかくは言盡さん。先師(芭蕉)曰く、然り彼は定家の卿なり。さしてもなき事をことごとくしく言ひ連ね侍ると聞えし評、詳なるに似たり」と言つてゐる。芭蕉の評は流石に其角をよく知る者の言といふべきである。この句などは何で



もない事に奇想を構へて、人を驚かさうといふ考が實にあり／＼と看取される。生袈裟といふのは生きながら袈裟斬にすること。

水打つや蟬も雀も濡るゝほど

一讀爽涼の氣を生ずる。前の句とは全くその詩境を異にして居る。

夏の月蚊を疵にして五百兩

蘇軾の詩句「春宵一刻千金」によつた洒落にすぎぬ。

雲見草鎌倉ばかり日が照るか

「望相州」と題してある。雲見草は楊の異名。其角の句が屢々小唄俗語中に取られて居る事は前に述べたが、彼はまた自分の句に俗語趣味を漂はせる事も多かつた。この句などはその一例で、俗語に「坊さんよ沙彌さんよ、鎌倉五山へ行かんすか、一夜は泊らんせ、鎌倉ばかりに日が照るか」とあるのによつた作である。

夕立や田を見めぐりの神ならば

後世川柳子に屢々題材とされたもので、其角の句中恐らく最も名高いものであらう。「五元集」には「牛島三邊の神前にて雨乞するものにかはりて」と前書し、句の次に「翌日雨ふる」と書添へてある。牛島は向島で、その三圍神社でよんだ雨乞である。意は田を見めぐりといふ名を負うて居る神ならば、この早魁を傍觀する筈はあるまい、きつと夕立がするだらうといふのである。其角は自ら「翌日雨ふる」に書添へてゐるくらゐだから、大きに御利益があつたと

己惚れたものであらう。御本人がその氣だから、やがてそれが江戸中の話の種となり、遂には

ちつとべえ何か言はしつたれば降り

とか、須臾にして雨降るなど、大變な事になつてしまつたのである。要するにこの句の名高いのは、さうした世間的の理由によるので、決して藝術的價値が高いからではない。寧ろ其角が自選の集中にわざ／＼この句を採録した事を彼のために惜むものである。なほ馬琴は「燕石樓志」の中にこの句の上五を、「夕立てや」と動詞の命令形によむべきことを主張してゐる。成程その方が句意は解し易くなるが、この頃夕立つといふ動詞が一般に用ひられて居たとは考へられないし、且つ俳句の語法としては上五に切字があるから、直接中七以下と文法上の關係を持たなくてもよいわけである。だからやはりこれは「ユフダチャ」とよんで少しも差支へない。

香薷散犬かねぶつて雲の峰

香薷散は暑氣拂ひの藥として昔は一般に用ひられた。雲の峯が立つ日盛りの頃、あまりの暑さに犬までがそれを舐つて居るといふのだが、實はこの句には一寸した手品がしかけてある。それは鶏犬が鼎中に残つてゐた仙藥を舐めたために羽化登仙し、雲中に鶏が鳴き犬が吠えたといふ支那の故事を使つたのである。それで「日盛りや」などいはずに「雲の峰」をもつて來たわけも分る。種を明かせばつまらぬ事だが、かうしたしかけは其角が屢々好んで用ひた所である。だが要するにそれは機智を家愚に誇るにすぎない。

雨 後

雨蛙芭蕉に乗りて戦ぎけり



磊落な其角にはまた一面詩人らしい細かい神経のはたらきが見られた。鋭く物の性状をつかんで、それに最もふさはしい表現を與へる事が、一つのすぐれた藝術を生むとすれば、この句は正しくその註文にあてはまつて居る。芭蕉の葉にちよこなんと乗つて居る雨蛙の涼しげな姿、それは「戦きけり」といふ言葉以外に、どんな適切な言葉を選ぶことが出来るであらう。そこに其角の鋭い直観と繊細な感覚を見る事が出来る。

### 秋の空尾上の杉をはなれたり

この句も秋空の高く澄んで居るさまを、「離れたり」といふ言葉で巧みにあらはして居る。たゞこの場合あまりに巧みすぎるこいふ感がないでもない。

巴江

### 聲かれて猿の齒白し峯の月

巴江は支那の巴峽はつか。哀猿が叫ぶので名高く、例へば謝觀の清賦に「巴峽秋深、五夜之哀猿叫月」とあるなど、古來詩文によく書かれてゐる處である。其角の句も恰もこの清賦の句を翻したやうな作であるが、猿のむき出した白い齒を捉へた所に新らしいはたらきがある。「句兄弟」(其角撰、元祿七年刊)にこの句と芭蕉の

塩鯛の齒ぐきも寒し魚の店たな

の句とを並べ出し、自句については「是こそ冬の月といふべきに、山猿叫シ山月落と作りなせる物凄き巴峽の猿よよせて、峯の月とは申したるなり」と説明し、「此句感心のよしにて鹽鯛の齒のむき出たるも、すさまじくや思へよ

せられけむ」と、芭蕉も自分の句からヒントを得たやうな事を言つてゐる。然るに支考は「十論爲辨抄」の中に、實情と手づまの證文として、この其角と芭蕉の句を持出し、其角が猿の齒は例の詩を尋ね歌を探して、かれてといふ字に斷腸の情を盡し、峯の月に寂寞の姿をうつし、何やらかやら集めぬれば人を驚かす發句となれり」と言つて、これを手づまの標本としてゐる。芭蕉の句と比較すると確かにこの支考の評は當つて居る。又「三冊子」にも芭蕉の言として「猿の齒白し峯の月といふは其角也、鹽鯛の齒ぐきは我が老吟也。下を魚の棚とたゞ言ひたるも自句也」といふ言葉を載せてあるが、これも其角の傾向をよく道破したものであらう。芭蕉は日常茶飯事のうちに詩趣を味ひ、其角は奇想を天外より得來つて人を驚かさずんばやまぬ概がある。

### 鯛は花は江戸に生れてけふの月

西鶴の「鯛は花は見ぬ里もあり今日の月」の上手うまを行つたものである。魚河岸のいきい鯛、上野淺草の花、それに今日のこの名月、それもこれも江戸に生れて十分に樂しめるといふので、大に江戸つ子の氣焔をあげた句だ。

### 名月や疊の上に松の影

名高い句でそして決して悪い句ではない。誰にでもすぐ分つて、しかも名月の趣が十分にあらはれて居る。しかし名句といふ程のものではない。通俗的な佳句、それで語弊があるなら初心者や小學生などに、俳句といふのはこんなものだと示すのに都合のよい句といふ程度のものであらう。

宗因がまづ月をうるの句をとりて

### 芋はく凡そ僧都の二百貫

俳句俳文評釋



これは前書にもある通り、宗因の「芋はく先づ月を賣る今宵哉」の句をとり、更に徒然草の盛親僧都の故事によつて仕立てた例の智識的興味を主とした句である。

### 十六夜や龍眼肉のから衣

難解の句だ。「撮解」には「龍眼肉は殻を少し穿ちて實をとる形の、既望のはじめて缺くるに似たり。から衣は殻をいふ比喩なり」と言つて居る。すると全く談林風の見立ての句となる。又或る説には、十六夜は昨夜月見のため誰も夜更しをして、寝不足の赤い眼をしてゐる。それが龍眼肉の薄赤い色に似て居るので思ひついた句だといふ。大分窮した説のやうであるが、とにかくかうした持つて廻つた説き方をせねば、句意を解する事が出来ないのは事實である。しかも其角はその難解なのを以て、窈かに得意としたのではなからうか。少くともこの句を作つた動機が藝術的感興によつたのではなくして、謎か考へ物を出題するやうな智識的興味にかられたのである事は、容易に想像し得る。

### あれきけとしぐれ来る夜の鐘の聲

物淋しく時雨降り来る夜、咄もとだえてしんとして居る折柄、鐘の聲がどこからか聞えて来る。「あれ聞き給へ、鐘が鳴つてゐるよ」と誰かと言つた。浙瀝たる雨聲を縫うて餘韻爛々と響く鐘の音、それだけですでに好箇の詩材である。そこへ更に「あれきけ」と人語を加へた所に其角の面目が見える。

### からびたる三井の二王や冬木立

「からびたる」といふ言葉がこの句の生命である。そのからびた二王の姿と冬木立との配合が、冬枯の淋しくわびた情趣を十分に味はせる。蕪村の「三井寺や日は午にせまる若楓」と宜い對照だ。

### 爐開や汝をよぶは金の事

川柳のやうな軽い滑稽味を持つてゐる。その滑稽は「よつびいてひようと放たぬ案山子哉」から感ずるのと同じ性質のものである。即ち緊張感が突嗟に弛緩させられる事によつて生ずる滑稽である。爐開といふのでわざ／＼請待された。亭主は昔の主人筋にでも當るものだらう。今までついぞそんな請待など受けた事もないのに、今年はまだどうした事だらうと思ひながら客は出かけた。さて茶室に入つて一と通りの手前もすむと、亭主居直つて曰く、「さて今日わざ／＼お前を呼んだといふのは、實は」と切り出したので、はて何事の御用と胸ときつかせて承ると、「實はな、そのこれ／＼ばかり入るんだがな……」といふ御相談。

### 顔見世や曉いさむ下邳の橋

下邳橋は張良が黄石公の杓を拾つて軍法の秘書を授つた所。その時石公は張良に朝早くこの橋上で待てと約したが張良は來方が遅いので三度目にやつと虎の巻を授けて貰へたといふ。顔見世芝居を見物しようと、朝早くから起きてそは／＼して居るさまを、張良の故事に比した作意である。とにかく才のはたらいた句だ。

### 此の木戸や鎖のさゝれて冬の月



平家物語月見の條に「惣門は鎖のさゝれて候ぞ。東の小門より入らせ給へ」とあるのから、思ひついた句かも知れない。しかし句の趣致は勿論平家の月見と同じではない。これは寒さうな冬の月であり、嚴めしい城門のものである。所謂換骨奪胎の作といふべきである。「去來抄」によればこの句を「猿養」(芭蕉の七部集の一、元祿四年刊)に入集した時、書きやうが悪いため「此木戸」が「柴戸」によめた。それで芭蕉はわざ／＼大津から手紙をよこして「柴の戸にあらず此木戸なり。かゝる秀逸は一句も大切なり。たとへ出版に及ぶとも急ぎ改むべし」と言つてやつたといふ。又この句最初下五を冬の月・霜の月いづれにしようと思つたが、芭蕉は其角が冬・霜に煩ふべき句でもないと言つて、冬の月に定めたといふ。良匠の苦心一字も忽にしないさまが想はれてゆかしい話である。誠に去來も評してゐる通りこの月を柴の戸に寄つて見れば尋常の景色で、これを城門にうつして見ればその風情あはれに物凄しい事が限りない。そこに作者の苦心も存してゐる。芭蕉がたとひ出版済みでも、ぜひ改めよと言つたのも尤もである。

冬川や筏のすわる草の原

寫生の句として素直ないゝ句である。

日本の風呂吹といへ比叡山

風呂吹は大根・蕪などを輪切にしたのを茹で、味噌をつけて食ふ冬季の食品。叡山の寺院は昔は三千坊あつたといふ。それから思ひついて天台根本三千坊といふのを、台根を大根、三千坊を三千本ともちつて、さてこそ日本の風呂吹だとしやれたのである。これこそ全く謎の句だ。其角の最も悪い癖を見るべき作で、かういふ句を喜んだ結果がかの洒落風を生んだのである。

初霜に何とおよるぞ舟の中

狂言親猿の「舟の中には何とおよるぞ、苦を敷寝に楯を枕に」の文句取り。およるは寝るの意。句は淀での吟で、三十石舟に初霜の置く夜、乗客たちがどんな夢を結んで居ることだらうといふのである。狂言の文句がいかにも巧にはたらいて居る。流石に其角の才だ。敬せずには居れない。

夜神樂や鼻息しろき面のうち

舞人の吐く白い息が面の内に籠つて庭燎の光も氷るやうな夜神樂のさまである。但しこれは里神樂のさまと見た方が面白い。

佳句

我雪と思へば輕し笠の上

「笠へ重し吳天ノ雪」といふ詩句に據つた作である。句意は解するまでもない。詩句を逆に行つたといふ外に大した働きもない句であるが、その解し易く且つ人情を穿つてゐる點が世人の好みに投じたのであらう。「我がものと思へば輕し笠の雪」といふ形で、俗語として俚諺として汎く知られるやうになつた。

餅花や鼠が目には吉野山

餅花は餅搗のをり柳の枝などに餅粒をつけて小兒の翫びにする物。句は素堂の「茶の花や利休が目には吉野山」——古今集の序「吉野山の櫻は人丸が目には雲かとのみなむ覺えける」に據つた作意で、茶人たる利休の目には茶の花と



そ歌人の吉野山とも思はれるだらうとの意——を真似たしやれ。

小傾城行きてなぶらむ年の暮

これだけでも十分解せられる句である。だが「雜談集」には「世の中をいとふまでこそかたからめ」三わざ／＼前書がしてある。ではこの西行の歌——下句は「かりの宿りを惜む君哉」——は句と何の関係があるかといふと、この歌をもとにして仕組んだ謡曲現在江口に、「小傾城どもになぶられて云々」といふ文句があるからである。些かの事にもかうして故事を引き才學をほめかすのもまた其角の癖であつた。

嵐 雪

嵐雪は服部氏、幼名を久米之助といつた。父祖は淡路小榎並村の出であるが、嵐雪は江戸の湯島で生れた。一時新庄・井上の兩家に仕へ、又稻葉家に抱へられたりしたが、後には専ら俳諧を事とした。はじめ芭蕉に随つた頃は嵐亭治助と稱し、「桃青門弟獨吟二十歌仙」中に始めてその作が見える。其角と相並んで蕉門の桃櫻と稱せられ、其名が高かつた。寶永四年十月十三日、五十四歳で歿した。彼の句風は其角の華やかで險怪なのに對し、おとなしく尋常で、一面平弱單調の譏りは免れないが、何度よんでも飽きないといふ味ひも持つて居る。才の人としては其角の匹ではなかつたが、穩健で敢へて奇を求めない所に、却つて彼の俳諧は大成したのである。彼は雪中庵と號したので後世その傳系を雪門とも稱する、周竹・史登（二世雪中庵）等の門人がある。句集には百萬坊旨原の編した「玄峯集」（後に「嵐雪句集」と改題）、文集に「續其袋」がある。俳諧文庫の「嵐雪全集」は彼の作品及び註釋書等の主なものを收めてあるから、最も便である。

元日や晴れて雀のものがたり

一夜明けると世は春、空はうらくと晴れ渡つて、軒端に轉る雀の聲までが今朝は一入晴れやかに聞えるといふのである。晴れての三語は雀の聲の晴れやかなのと、空の晴れたの二兩意をかねて大いに働きがある。但しそこに俗受けのしさうないや味もある。雀の轉りを物語りといつたのは、可愛らしい雀の動作もおもはれて親しい言葉である。

濡縁や薺なづなこぼるゝ土ながら

濡縁は屋根の外になつてゐる外縁である。そこへ土の附いたまゝの若菜がちよいと置かれてある。僅かそれだけのさまだが、正月らしい氣分が自ら漂つて来る。

梅一輪一輪ほどの暖かさ

名高い句だが句意は屢々誤られて居るやうだ。元來この句は「寒梅」と題してあつて冬の句なのである——「玄峯集」にはその前書がなく、春季に入れて「此句ある集に冬の部に入たり。又面白きか」と書添へてある。——で句意は寒梅が一輪開いた。ぽつかりとどこやら紅味を帯びたその花を見てみると、冬とは言ひながらその一輪ほどの暖かさも感ぜられるといふのである。梅が一輪づゝ開くにつれて暖かさが増すといふ意ではない。づゝでなくほどとあるのに注意せねばならぬ。随つて「梅一輪、一輪ほど」と上五で切るべきで、「梅一輪／＼ほど」ではない。但しかう解する



と句意は誤つて居ないとしても、何だか理窟めいていやな句になるやうに感ずる。しかし「一輪くづゝの」といふ意に解した所で理窟つばい事は同一である。要するに名高い割に大した句ではない。

出がはりや幼心に物あはれ

出代は昔三月に奉公人が交代するならばしであつた、それをいふ。この句も嵐雪の作中最もよく知られた吟で、支考は夙く「葛の松原」(元祿五年刊)に「嵐雪が幼の一字にて人に數行の涙をゆづりける也」とほめて居る。この一年間居馴染んだ下女や下男が、今日は愈々暇をひして出て行く。幼な心にもそれが物あはれに感ぜられるといふのである。幼年時代に誰もが同じやうに抱いた感じ、それがそのままに言出されてあるので、この句をよむ誰もがまた心を動かさずには居れないのである。人情の眞を穿つて居るが故に、この句は何人にも理解され、同感され、さうして名高くなつて行つたのだ。

石女の雛かしづくぞ哀れなる

これも實情を穿つて居る。其角のやうに作つた句ではない。子を持たぬ女がせめて雛様でも飾り立てようといふ心持ちがしみくくと物哀れに感ぜられる。嵐雪の妻は實際石女で猫を可愛いがつてゐた。あまり可愛がりすぎて時々夫婦喧嘩までやつたといふのだが、この句も或ひは妻の實情をよんだのかも知れない。

鶯の來て染めぬらむ草の餅

「玄峯集」には中七「染めつらむ」とある。草餅のあの春らしい緑色は、鶯がやつて來て染めたのだらうといふ詩人

らしい想像の句である。なつかしい句だ。

兼好も蕙織りけり花盛り

兼好が阿部野に住んでゐた頃、蕙を織つて生活したといふ傳説によつた作である。しかし故事を用ひても、やはり其角だけのはたきは見せて居ない。

竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき

源氏物語横笛の卷に「御齒のおひ出づるに食ひあてんとて、筍をつと握りもちて嚼もよと食ひぬらし給へば云々」とあるのによせたのであらう。源氏の優雅で愛すべき趣が、よく十七字中に言ひおほせられて居る。

しだり尾の長屋々に菖蒲哉

「山鳥の尾のしだり尾の長々し」によつた作意であるが、それを一轉して「長屋々々」と俗にもつて行つた所が俳諧である。これなどは嵐雪としては、かなり小手のきいた技巧といはねばならぬ。長屋の軒毎にさした菖蒲が單調にすつと並んでゐるのは、成程しだり尾の長々しいと言ひたい感じだ。

初秋

秋風の心動きぬ繩すだれ

「嵐雪發句撮解」には後嵯峨院の「あし簾夕暮かけて吹く風に秋の心ぞ動きそめぬる」といふ御歌を引いてある。繩簾にそよめく風にもう秋が感ぜられるといふので、もしこの御歌によつたのであるなら、一句の手柄はあまりないわけ



であるが、蘆簾を繡暖簾なほのせんに化したのはやはり俳諧である。

名月の夜はいかならむはかりがたし

### 七夕は降ると思ふがうき世哉

年に一夜の逢ふ瀬を樂む七夕だか、さはり多きはうき世の常だから、降りはいまいかと心配されるといふのである。これは嵐雪が自ら得意にして居たか、或ひは當時世に喧傳された何らしい。伊達衣・柴橋・文蓬萊・青蓮・名兔等當時の俳書に多く採録されてゐる。だがこれも只解し易く且つ何人の情にも通ずるがために、汎く迎へられたのにすぎない。而して嵐雪の句の特色は、實にこの誰にもよく分るといふ點にあつた。その意味からいへば成程この句などは彼の句風を最もよく代表してゐる一つであらう。しかしこの誰にも分る句といふのは、千古に通ずる人情を道破した名句もあらうが、又屢々俗意凡情に扱じて平板卑俗に陥る虞がある。この句などは必しも卑俗といふ程ではないが、畢竟平弱の譏を免れる事は出来ないであらう。

### 相撲とり並ぶや秋の唐錦

これも多くの俳書に見えて居て名高い。力士たちの花やかなまはしの色を、秋の千草の織出した唐錦に見立てたのである。句に深い意味もなく、藝術的の句ひも稀薄である。しかも汎く人口に膾炙して居る所以は、これまた誰にも解し易く、特に「唐錦」の語が秋との聯想をすぐ呼起すので、そこに感心させられたものらしい。相撲は俳諧では秋季に定つて居る。

### 名月や烟這ひ行く水の上

眼前の景をそのままに寫して巧まぬ所が宜い。

### 沙魚釣るや水村山廓酒旗の風

杜牧の詩「千里鶯啼綠映紅、水村山廓酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中」の第二句をそのまま中七字以下に用ひて、原詩の春色を秋興に假りたのである。しかも少しもちぐはぐな感じがなくて、沙魚を釣る江村のさまがそのまま浮んで來る。

### 黄菊白菊其外の名はなくもがな

「その外の菊」と言はずに「その外の名」と言つたのが、先づ人を感じしめる。さうして實際赤白黄紫色さまざまの菊の中にも、やつぱり菊の清容にふさはしいのは白と黄である事は、また萬人が齊しく感じてゐることだ。この句が何人にも容易くうけ入れられて、名高くなつたのは尤もな事である。

### 蒲團着て寝たる姿や東山

柔らかな山姿の表現として、これまた萬人向きにする形容のしかただ。

### 今少し年寄見たし鉢叩

鉢叩といふものは惣じてわびしくかれた感じを持つたものである。ところが今見た鉢叩はまだなま若い色の小白い男だつた。何だか鉢叩情調を破られたやうな氣がして物足りない。もう少し年老つた奴は來ないかなアといふ心もち



を句にしたのである。これも分り宜い句。

去 來

去來は向井氏、兼時、通稱平次郎。長崎の儒醫向井元升の次男で八歳の時父に従つて上洛し、はじめは武藝を以て身を立てる考へであつたが、壯歳の頃すでにその望みを絶ち、兄元端を助けて堂上家に仕へ、且つ風雅に思ひを潜めた。貞享初年の頃其角の紹介で芭蕉の教へをうけるやうになつたが、資性忠實で師に事へる事も厚く、蕉門の關西奉行と呼ばれた。寶永元年九月十日歿、年六十二歳。去來の弟魯町・素行・妹千子等もまた俳諧をよくし、卯七風國等もその一族である。去來は洛西嵯峨に別墅を有し、落柿舎と呼んだ。芭蕉も元祿四年の夏しばらくこゝに杖を留めて、「嵯峨日記」を草した。去來は人と爲り温厚篤實であつたから、その句風も實實で華美の風を帯びず、且つ自ら風格の高きを思はせるものがある。かの蕉風の最も圓熟時代を代表する「猿蓑」は實に彼と凡兆とが力を併せて撰んだものであつた。師の歿後もその遺教を忠實に守り、其角等の師風を變ずる事を歎き、かつて一文を草して其角に贈つた事もあるくらゐであつた。随つてその著といはれる「去來抄」は最も芭蕉の精神を傳へたものとして貴ばれてゐる。句集には蝶夢の編纂した「去來發句集」(安永三年刊)がある。

元日や家に譲りの太刀佩かん

元旦の嘉例として家重代の太刀を佩くといふのである。去來の父兄は儒醫を以て身を立てたのであるが、去來自身はすでに述べた通り、はやくから武藝を嗜んで弓馬の道に通じ、かつて猛猪をしとめた事もある程の腕前であつた。

それでお自ら彼の句には武士らしい氣品をとどめたものがある。この句や

鎧着てつかれためさん土用干

秋風や白木の弓に弦張らん

などは彼のさうした經歷を背景にして味つて見ると、一層感じが深い。

鉢叩き來ぬ夜となれば朧なり

この間までは夜毎にそこの小路を通つてゐた鉢叩の音も、いつの間にか聞えなくなつた。「あ近頃はもう鉢叩も來なくなつたなあ」と、ふと氣が附いたやうに獨言をいひながら窓を明けると、月の光もいつか春らしく朧に霞んで居る。「朧かな」でなく「朧なり」と言ひ下したので、此間まで寒く冴えてゐたのにはや朧月だなと、ふいに朧夜を感じたさまが適切に言ひあらはされてゐる。

上り帆の淡路はなれぬ汐干哉

大阪へ上る西國船であらう。帆をゆるやかに孕まして淡路の島かげに浮んでゐる。それがいつまでたつても動くとも見えない。磯には汐干の人影が霞んでゐる。

瀧壺もひしげと雉子のほろゝ哉

瀧壺に落ち込む水の音が凄しく響いてゐる。とその水音もひしげとばかり、けたまほしい雉子の鳴聲が聞えたといふのである。「ひしげと」といふ四字に、雉子の鋭い耳を劈くやうな鳴聲が遺憾なくあらはされて居る。萬葉の「たぎのへの、淺野の雉子明けぬとし、立ちとよむらし」も思ひあはせられるが、萬葉の歌は單純な叙景であるし、この句



には流石に複雑な主観が伴つて居る。

### 何事ぞ花見る人の長刀

入口に膾炙した句である。花見に殺人劔を携へた不風流をなじつたのである。分りやすい通俗的の句だが、それだけ露骨で味ひがない。

### 一昨日はあの山越えつ花盛り

「葛の松原」・「去來抄」等に、芭蕉がこの句を評して三四年も早からう。數年待たねば聞く人があるまいと言つた話が見える。去來自ら窃かに得意としてゐた句らしい。見返ると遙か後の山つゞきは今櫻の花盛り、たゞ白雲と見えるばかりである。あゝあの山は一昨日越えて來た山だ。あのをりはまだ咲きそめたばかりと見えたとに、僅か二日のうちにはや満開になつたのかなあと、旅人は暫らくそこにイন্দまゝ花盛りの山をなつかしげに見入つて居た。さうした情景が此の句から想はれる。芭蕉が賞したのも去來が自負したのも、要するにこの餘情に富んだ點にあつたのだらう。

### 葉がくれをこけ出て瓜の暑さ哉

芭蕉が落柿舎に滞在中、去來が訪ねて行つた時の吟である。瓜までが暑さに堪へないでころげ出たといふので、輕いをかし味がある。

### 湖の水まさりけり五月雨

大きな景色を思ひ浮べさせる句である。毎日々々ふりつゞく五月雨に大湖の水も増したらうといふのを、「まさりけり」と断定したのでこの句に主観の深みを感じる。「まさるらし」では平凡に終るであらう。なほこの句は實際湖の水がまさつたのを見てよんだのではなく、降りつゞく五月雨に感を發した作だと思ふ。勿論句の表面通り、このふりつゞく五月雨のために、さすがの大湖も目に立つて水を増したわい。これだけの表面積に一寸だけの水が増したとしても大變な雨量だといふ風に解されぬ事はない。否寧ろそれが普通の解であらう。しかしそれではあまりに淺膚な句になつてしまふ。許六は「去來誄」にこの句を以て正風體の眼を開いた作だと激賞して居る位である。姑らく自説を主張して置く。

### 郭公なくや雲雀と十文字

名高い句である。しかし幼稚な句である。許六はこれも前の「湖の」と共に去來一代の秀逸に數へて居るが「青根が峯」参照、湖の句は成程許六自らかつて作つたといふ「湖の水もまさるや五月雨」にまさる事萬々であらう。だが此の句は畢竟談林風などの得意とした趣向だけの作にすぎない。時鳥は中空を矢の如く斜に、雲雀は麥畑の中から一直線に雲までもと飛び上る。それで恰度十文字になるといふのである。許六が心からこの句に感心したとすれば、彼もまた衆愚の眼をなほ一洗し終る事が出来なかつたといふべきであらう。

妹の追善に

### 手の上に悲しく消ゆる螢哉

妹といふのは元升の第二女千子で、清水氏に嫁し一子を儲けたが、元禄元年五月十五日歿した。俳諧をよくしかつ



て兄に従つて伊勢に旅行し、共に「伊勢紀行」を草したこともある。句は妹の辭世もえやすく又消えやすき蠻かなによつたのである。

舟乗の一濱留守ぞ芥子の花

全村の漁夫たちはすつかり沖に出はらつて、濱の晝は森閑と物音もない。納屋の片わきに美しく咲いた芥子の花がひっそりと午後の日を浴びてゐるといふやうなさまである。この句にはどが面白いといふやうな趣向もねらひ所もない。たゞそのまゝの句である。しかし男たちの居ない静かな漁村を背景として、その中に一輪の芥子の花を描き出すことは凡手の直ちに及び得る着想ではない。自然を見る心の修業がつんで居なければならぬ。

岩鼻やこゝにもひとり月の客

この句については「去來抄」に芭蕉と去來との問答が記されてゐる。今その全文を引いて見よう。

去來曰、酒堂は此句を月の猿とすべしと申し侍れど、予は客まさりなんと申す。先師曰、猿とは何事ぞ。汝此句をいかに思ひて作せるや。去來曰、明月に山野を吟歩し侍るに、岩頭亦一人の騷客を見付けたると申す。先師曰、「こゝにもひとり月の客」と名乗り出でたらんこそ、幾ばくの風流ならめ。たゞ自稱の句となすべし。此句は我も珍重して「笈の小文」註、吉野紀行とは別で、芭蕉が自ら門人の句を選んで一集としようと企てゝ居た書名。に書入れけるとなん。予が趣向は一等くだり侍りけり。先師の意をもて見れば、少し狂者の感も有るにや。

即ち去來は「月の客」を他の人として作句し、芭蕉は作者自身のことと解したのである。そのいづれの解が宜いかは別問題として、この問答によつて俳句が必ずしも定つた一つの解釋のみ持つべきものではないといふ事が明かに證せ

られて居る。俳句にせよ和歌にせよ、元來かゝる短少の詩形では、十分に意を盡す事が出来ないから、自然讀者の聯想に任せられる事が多い。隨つて俳句や和歌は、讀者の方にもこれを鑑賞すべく特殊の修養が多少なければならぬ。その修養の如何は、直ちにその句の解釋と關係をもつて來るのである。今芭蕉と去來の場合に明らかにそれは見得る。たとひ芭蕉の解が作者自身の意とちがつて居ても、それは鑑賞者によつて句が生かされたのであるから、決して誤解ではない。さうして去來の解もまた勿論正解である。即ち句は鑑賞者によつて種々に解釋される場合が有る事を知らねばならぬ。

魂棚の奥なつかしや親の顔

「去來抄」によるとこの句はじめは「面影のおぼろにゆかし魂祭」と作つて、手紙の中に「祭る時は神いますが如しとやらん。靈棚の奥なつかしく覺え侍る」と書いて芭蕉に送つたら、芭蕉は「靈祭尤もの意味ながら此分にては古びに落ち申すべく候。註に靈棚の奥なつかしやと侍るを何とて句になさざるや」と注意を與へたので、去來は直ちにその言に服してかう改めたのであるといふ。誠に亡き親をしのぶ悲しみの情は、「おぼろにゆかし」といふやうな生ぬるい言葉では言ひあらはせない。「奥なつかしや」とそのまゝに言放つた所に眞情が溢れて居る。

故郷も今は假寝や渡り鳥

去來が故郷長崎を訪ねた時の吟である。故郷とは言ひながらも、今は都の住居に馴れた身の、さながら旅寝の心地である。折からこれも旅寝の渡り鳥がやつて來るといふので、當季の景物を捉へて巧みに感懐を洩らして居る。

朝顔や夜は葎のばくち宿



門は葎に鎖されて夜になるとあやしげな人々が賭博打に集つて来る家、何となく薄気味の悪い陰氣なところである。その宿にも朝顔だけが美しく朝は咲いて居る。その朝顔にことさら心がひかれて行くのである。其角の「花咲いて乞食の家ものぞかる」に似たやうな句境であるが、これはもつと複雑な感情の錯綜をもつて居る。

### 有明にふりむきがたき寒さ哉

この句は當時名高い句であつたと見えて、梟日記・續有磯海・泊船集・猿舞師・篇突・花の雲・今日の昔等の諸集に採録されて居り、支考は「その情幽遠にしてその姿をばいふべからず」とほめて居る。曉の寒さは誠によく言取られて居る。「去來發句集」には「堀川を通りて」と前書があるから、堀川沿ひを曉起早行した時の實感であらう。有明は有明の月。

### 木枯の地まで落さぬ時雨哉

「地まで」と限つた文字は丁寧でいやしいから、只「地にも」と直すべしと芭蕉の評した事が、「葛の松原」や「去來抄」等に見える。まで、とにも、僅か二字の差で、句の味ひが全く異なることを知らねばならぬ。名匠の苦心はそこに存する。

### おうくといへぞ敲くや雪の門

この句も去來得意の作で同門の間にもやかましい句であつたと見え、「去來抄」に丈草以下數人の評を列舉し、又「梟日記」にも説が見える。雪にとざした表の門をトン／＼とた／＼音がする。「おう」三内で答へても降る雪にイミわびてか、又もせつかちにトン／＼と敲く。答へる聲敲く音、雪に訪ね來た人の風情が、その應答の間にまさ／＼と描き出されてゐる。因にいふ、世に芭蕉の六感の句といつて、この句もその一つに數へてゐるが、すでに「去來抄」にも

「たゞ先師の聞き給はざるを恨むるのみ」とある通り、これは芭蕉の歿した冬の作で、六感などといふ事は後人の附會にすぎない。

### 尾頭の心もとなき海鼠哉

海鼠のどこが尾とも、どこが頭とも、要領を得ないやうな恰好を言つたのである。それを「心もとなき」とは、誠に適切な形容だ。あらゆる形容詞の中から、今これに代るべき言葉を見出すことは到底不可能であらう。それほどこの言葉はこの句に於いて重要な役目を持つて居る。

大井里

### 冬枯の木の間のぞかん賣屋敷

大井の里は大井川(保津川)のほとりの里で、即ち下嵯峨のことである。落柿舎を出てぶら／＼と散歩でもしたをりの吟であらう。昔は榮えた家であらうが、いつからか賣屋敷に出たまゝ、門や築地などはもう崩れかけた大きな一と構へ、庭もあたりも冬枯の木立が物淋しい。そこへ歩きかゝつた去來は、一寸その門のところからのぞき込んで見た。そしてかうした一句が彼の胸には浮んで來た。

### 丈草

丈草は内藤氏、幼名林之助。尾張犬山の藩士内藤源左衛門の長子で、十四歳の時から彼も出仕した。しかし彼の性質は元來世間的の活動を好きなかつた。はやく靜思冥想の生活にあこがれて居た彼は、指の病を口實として元



祿元年廿七歳の時突然仕を辭して出家した。それには當時犬山に創建された黄檗先聖寺の玉堂和尚に、彼がかねて参禪してゐたので、和尚の感化を受けた所も多かつたであらう。又繼母の心をはかつて弟に家をつがせようとした點も認められる。しかし何よりも彼のかうした宗教的要求が自分の今の生活に安んぜしめなかつたのだ。彼は犬山時代に中村史邦と相識つて居たので、その縁故で芭蕉に師事する事になつた。そして師の歿後は粟津の龍ヶ岡に佛幻庵を結び、師の冥福を祈つて三年その岡を下らなかつた。寶永元年二月廿四日歿。年四十三歳。丈草の句は彼の生活の反映であつた。静けさを愛し寂しさに住む彼の心が、一つ一つの句を透して味はゞれる。蕉門の多士濟々たる中に、最も芭蕉の風格に近いものを求めるならば、何人も躊躇なく先づ第一に彼を指折るであらう。句集には蝶夢が「去來發句集」と共に編した「丈草發句集」がある。

### 大原や蝶の出で舞ふ朧月

優雅な句ひを湛へた句だ。この大原は普通洛北八瀬つゞきの大原と解せられてゐるが、その地勢からいふと洛西大原野の方が、この情景にふさはしい。小鹽山のなだらかな麓につゞいて、東に廣々とした野がひらけてゐる。句やかな朧月夜の野に白い蝶がヒラ／＼と舞ふ姿は、夢のやうな美しさであらう。なほこの朧月は朧の清水(大原の名所)の聯想をもつてゐるから、やはり洛北の大原でなければならぬといふ説もあるが、實は大原野の方にも朧の清水はある。それから蝶は夜間飛翔しないものだから、この句は事實に反するといふ批難もあるが、よし朧月夜に舞つたのは實際蝶であつたにせよ、作者が蝶と思つてよんだのなら差支へはない。否蛾と知つて居ても蝶の美しさをそこに感じたなら、作者はやはり蝶と言つてしまふであらう。藝術は科學より自由である。

### 春雨や抜け出たまゝの夜着の穴

すぼりと抜け出たまゝ、夜着も疊まぬ春雨のものういと日。それは丈草自身の生活のさまであつたらう。彼は自ら懶窩丈草と號した。性來虛弱な彼は、あまり行脚などもせず、草庵に靜かな日を送る事が多かつた。懶に隠れ閑をあまなひ、淋しい生活に浸り切つた彼の境涯が、軽く興じたこの一句の中にも、明かに映し出されてゐる。

### 鶯や茶の木畠の朝月夜

印象の鮮やかな句だ。しかも蕪村のやうな華やかさはなくて、どこか縹渺とした趣をもつて居る。清い高い美しさだ。

### 取りつかぬ力で浮む蛙かな

禪機を寓した作であらう。しかしこの種の句はやゝもすれば概念そのまゝの表現として、露骨淺膚に陥る處が多い。丈草の句にもまた往々彼の宗教的主觀に累せられて、藝術的感興を無視したものが無いでもない。この句などもやはりさうした譏りは免れる事が出来ないであらう。

### 眞先に見し枝ならん散る櫻

これなどはまさに榮枯盛衰の無常觀が、あまりに句の表に見えすいて居るといふべきであらう。

### 我が事と鯿の逃げし根芹哉

根芹を摘まうと手をさしやると、自分を捕へるのかと思つて、あわてゝ泥鰌が逃げ出したといふ即興の句である。



これも考へ方では何等かの概念を寓して居さうであるが、これだけの表現ではたゞ軽い滑稽味だけしか感ぜられない。それを諷刺の意にひねらうとすると、そこに感情の破綻を生ずる。これはやはりあくまで即興の句と解して、その軽いをかしみを味はふべきである。

市中 苦暑

### 涼しさを見せて動くや城の松

この松は犬山城の松である。犬山の町に遊んで木曾川のほとりにあの白雲の城を望んだ者は、この句の情趣は十分に掬する事が出来るであらう。たゞ涼しさを見せるといふ言葉には、どうも所謂月並な感じが伴ふ。

### 時鳥鳴くや湖水のさゝ濁り

この句には詩人の繊細なそして鋭敏な感受性が見られる。時鳥が空を鳴き過ぎたのと、湖水のいさゝかな濁りと何の関係があるのだらう。さうした問を發する者は、この句とは遂に縁なき衆生であらう。湖上を斜に時鳥が鋭い一聲を残して飛び去つた。と湖水の波が軽く動いて水がうつすり濁る。その時時鳥の聲と水のゆらぎとは、まさに圓融一如の境にあるのだ。そして澄み切つた詩人の心は、直ちにその自然の情に通ずる。

### 持ちよりて放つ螢や縁の先

何でもないことをそのまゝに言つたやうであるが、かうした平凡な事をいや味なく句にするのは、實に却つてむづかしい。

### 稻妻のわれて落つるや山の上

實景が眼前に迫る感じがある。

### 精靈も出て假の世の旅寢哉

魂棚にしばし蓮の飯の手向を受ける精靈も、現の人と同じく假の世の旅寢をする事よといふのである。この句にも彼の無常觀が深く見られる。

### 鹿小屋の火にさし向くや庵の窓

佛幻庵の生活の一つであらう。近くの山畠に鹿の番小屋がある。その小屋の火が丁度庵の窓に相對して見えるのである。孤獨に馴れてゐる彼にも、この夜毎窓から見るその火が、何かなつかしいもののやうにさへ思はれるのであつた。

### 山鼻や渡りつきたる鳥の聲

北の國から長い旅路を飛んで来て、今やつと山鼻にとりついた渡り鳥の群れ。青く澄んだ空の下に、安堵の喜びを歌ふやうなその鳥の聲が高く響き渡つた。

### うづくまる薬の下ゝの寒さ哉

芭蕉が最後の病床に待してゐた弟子たちは、ある夜寢もやらで伽の句を火桶の灰に書きちらした。丈草のこの句もその時の吟である。薬罫のそばにしよんぼりとうづくまつてゐる丈草自身の姿が、そのまゝ句になつてゐる。「去來



抄」によるとこの句について次のやうな事が記されてある。

先師難波の病床に人々に夜伽の句をすゝめて曰、今日よりわが死後の句なり。一字の相談を加ふべからずなり。さまざまの時ども多く侍りけれど、只この句のみ文章出来たりとのたまふ。かゝる時はかゝる情こそ動き侍らめ。興を發し景を探るに豈違あらんやと、この時にて思ひ知り侍る。

こ。この時人々のよんだ句は芭蕉の終焉記「枯尾花」に見えてゐる。即ち

病中のあまりすゝるや冬ごもり	去
引張つて蒲團に寒き笑ひ聲	來
叱られて次の間へ出る寒さ哉	惟
思ひよる夜伽もしたし冬籠り	然
圖とりて菜飯焚かする夜伽哉	支
皆子なり蓑虫寒く鳴盡す	考
	正
	秀
	木
	節
	乙
	州

といふやうな句であつた。いづれもわびしい夜伽のさまがあらはれては居るが、わけでも文章の吟にその夜の實情を盡して居る。去來の評した通り、師の病ひをみとる自然の情がそのまま動いたのだ。芭蕉がその句に感じさせられたのもまた尤もである。

### 幾人かしぐれかけぬく勢田の橋

時雨の風情を深く見定めた句である。橋を駆け抜く人の姿、欄干を横にハラ／＼とうつ時雨の音、それが目に見え

耳に聞えるやうだ。

### 狐啼く丘の晝間や雪曇り

「白扇集」によるとこの句は元禄十五年正月廿二日越中井波の浪化上人が、京から歸郷の途中龍ヶ岡の佛幻庵を訪ねて聞いた句だといふ。一體文章は前にも言つた通り、芭蕉などのやうに行脚の間から得た句は少く、草庵に隠閑を樂んで案じ入つた作が多い。許六がかつて「自句をやるるとて文章の庵といふも聞き倦き侍るなり」と冷嘲したもの、ある點では尤もな評である。しかしそこに文章の隠者らしい性格が見られる。一體文章は芭蕉の如く自分の藝術に強い執着を持つて居なかつた。風雅のために瘖せるよりは、一行三昧に身を勞した。俳諧は彼のためには只自然の聲の如きものであつた。興湧き情動けば即ち十七字となるので、故らに神を凝らし思ひを潜めて句を求めようとするのではなかつた。自分を離れてある藝術的題材を捉へようとする熱心さは彼にはなかつたのである。随つて彼の句が多く自己の生活を中心としてゐるのは當然な事である。試みに彼の中句から庵の語即ち自分の住居の事をあらはに言つてゐるものだけを拾つて見ても、

鶯にとらばや庵の風ふせぎ  
 谷風や青田をまはる庵の容  
 晝寝して見せばや庵の若葉風  
 朝夕へ秋のまはるや原の庵  
 鹿小屋の火にさし向くや庵の窓



鹿小屋の聲は籠ぞ庵の客  
草庵の弱りはじめや秋の蠅  
借りかけし庵の噂やけふの菊  
早稲の香や雁ひ出さるゝ庵の舟  
海山の時雨つき合ふ庵の上  
筆くれて返事させけり雪の庵  
草庵の火燧の下や古狸  
守りゐる火燧を庵の本尊かな

等の十數句がある——中には自庵でない庵も一二あるやうだが——その他窓・客・柴の戸等の言葉で、自庵たる事が明かなものはなほ數多い。要するにかうして彼の句の大部分は、彼自身の生活を中心として居るものであつた。そしてそれが詩人らしい多感さと、隠者めいた清高さをもつた彼の性格を通して、すぐれた藝術味を持つたものが多かつた。この雪疊りの句なども、彼の草庵生活から生れた作品である。どこかに單なる客觀句とちがつた靜寂な味をもつて居る。

### 着て立てば夜の衾もなかりけり

これも彼の草庵生活の一つである。只一枚の夜着、それを寝る時は衾、起きた時は布子のかはりに着てゐるといふ簡素な生活のさまが想はれる。

人の行脚のうらやましくて

### 下京をめぐりて火燧行脚哉

彼が行脚をしなかつたのは一つは性來の虛弱にもよつて居た。時にはかうして人の旅するのを羨ましく思つた事もある。だが自分とはとてもこの寒空に旅も出来ないから、せめて下京あたりの俳友を訪ねて、火燧にでもあつて廻らうといふのである。彼はよほど寒がりの火燧好きだつたと見えて、前にも「守りゐる火燧を庵の本尊かな」の句があつた。その外火燧の句は集中にまだ大分ある。春も火燧は放さなかつたらしい。「閑居」と題して

朝暮にせゝる火燧や春のたし

といふ句もある。

### 水底を見て來た顔の小鴨哉

飄逸な句だ。「見て來た顔」といふのにをどけた感じがする。しかもそれが小鴨だからいや味が全くない。

### 許 六

許六は森川氏、名百仲、字羽官、五老井・菊阿佛等の號がある。近江彦根の藩士で三百石を知行した。はじめ俳諧を田中常矩に學んだが、のちその風體を見破つて芭蕉に歸し、師の歿後ひとりその血脈を受けたと稱して、「篇突」・「字陀法師」・「歴代滑稽傳」等に盛んに蕉門の風體を論じた。その所説は去來の如く師の遺教に忠實でなく、自分の一家言を立てるに急な傾があるが、その明敏な頭腦はよく蕉風の核心を捉へ得て、子細にこれを闡明して居



る。なほその俳論は後年出版された「雅文消息」・「青根が峰」(一に俳諧問答)等によつて、更に詳しく知ることが出来る。彼は又俳文をよくして自ら「本朝文選」(後に「風俗文選」改題)を撰んだ。それから講事にも巧みで、芭蕉も彼に書を學んだ事がある。だが俳人としての彼は、要するに言論の雄として特筆すべく、作品はなほその論に伴はない憾みがあつた。正徳五年八月二十六日歿。年六十歳。句集としては「風俗文選大註解」にのせた菊阿全集があるが、今はすべて古俳書の原本から直接抄出す事にした。

清水の上から出たり春の月 (正風彦根體)

柔らかに横たはつた東山の上から、春の月がぼつかりと浮び出た。清水の塔が臙に霞んで見える。艶麗な句だ。

陽炎や壁のぬれたる夜の雨 (浮世の北)

よべの雨に濡れた壁から、今日は陽炎が暖かに立つてゐるといふ寫生の句。

出代りや傘提げて夕ながめ (韻塞)

出代りの物あはれな情である。傘を提げて小雨そぼ降る夕の空をじつと眺めてゐるのは、今主家を出て行く下女であらう。さすがに一年の思出を残した家と人との名残が惜しまれて門を立去りかねてゐる風情である。

梅が香や客の鼻には淺黄椀 (篇突・記念題)

許六は發句の取合せといふ事について盛んに論じてゐる。取合せとは要するに配合といふ程の意である。更に蕉風の言葉で説明すれば、芭蕉の所謂句・響の調和といふ事である。即ち同じ句ひ同じ響をもつ二物を取合はせる事によ

つて、そこに一つの微妙な藝術的調和が生ずる。それは芭蕉が主として連句に於いて唱へた事であるが、——連句では前句と附句とが同じ句、響をもつて相應すること——それを發句にうつせば、畢竟許六のいふ如く取合せといふ事になる。この梅が香の句について、許六自ら「青根が峯」の中にはかう説いてゐる。

予此頃梅が香の取合せに、淺黄椀とり合物なりと案じ出して、中の七文字色々に置けどもすわらず。

梅が香や精進脛に淺黄椀 是にてもなし

梅が香や据互並べたる淺黄椀 是にてもなし

梅が香や何所ともなしに淺黄椀 是にてもなし

など色々に置いて見れども、道具取合物よくて發句にならざるは、これ中へ入るべき言葉たしかに天地の間にある故なり。かれこれと尋ねる中に、

梅が香や客の鼻には淺黄椀

とすゑて、此春の梅の句となせり。

と言つて居る。この意を分り易く説明すると、許六は最初梅が香と淺黄椀と、同じ句をもつて調和すべきものと考へて、その配合の方法を種々案じた末、遂にこの句を得たといふのである。彼は折角取合物を求め得ても、その取合の方法——それを彼はとりはやすと言つてゐる——がよくなければいかぬと言つて、例へば日月の光と水晶とを得てもその水晶の使用法を知らぬと、日月の光をうつして天火水を得る事が出来ないやうなものだと説明してゐる。

さて以上の説を聞いた上でこの句に對すると、その苦心の點は十分察知する事が出来るが、句としては必ずしも上



乗の作とは言へない。梅が香と淺黄桃との感じが、すでに必しもよい取合物でないばかりでなく、これを「客の鼻には」と結び合せたのは、あまりに露骨で、梅花の清香は抹消し了られた感がある。二者の配合から幽玄な味などは到底求むべくもない。それは畢竟許六には詩人としての敏感さと直覺力とを缺いてゐからである。彼は要するに頭腦のよい秀才であつた。だからその説は極めてよく要領を得てゐるが、作品はとかく理論に引ずられがちであつた。

春慶の膳据ゑわたす花見哉 (韻塞)

日野椀の色に咲きけり赤椿 (麻生)

これなども春慶塗の膳ミ花、日野椀と赤椿とがあまり露骨に配せられて、所謂取合の妙味を失つてゐる。

菜の花の中に城あり郡山 (正風彦根體)

郡山は大和、奈良の東南にある。許六にはなまじ議論に捉はれない、かうした素直な客観句にいゝ作がある。「清水の上から出たり春の月」や、この句などはその一例だ。

搗臼のふとり姿や五月雨 (小弓集)

搗臼の重々しさと降りつゞく五月雨の陰鬱な感じとを取合せた作。「風俗文選大註解」には中七が「尻の重さや」ミなつてゐるが、「ふとり姿や」はやゝ生硬な感じがするから、「大註解」の方が宜からう。

涼風や青田の上の雲の影 (韻塞)

これなども客観句として佳作であらう。

### 佛法を裸にしたる産湯哉 (同上)

談話の句である。灌佛のさまをかく興じたので、許六の句中汎く知られたものゝ一である。ところが延寶八年刊「軒端の獨活」に竹内松寸といふ人の作で、これと一字も違はぬ句が出てゐる。しかし「韻塞」は許六が李由と共に撰んだものであり、その外「後れ馳」、「蝶姿」等にも許六の作として出てゐるのだから、決して剽窃や誤傳ではあるまい。恐らく許六がこの松寸の句をかつてよんだ事があつて、後年それが自作の如く思ひ浮べられたのであらう。俳句を實際作つたものにはさういふ経験は屢々ある。この句などは勿論談林風の洒落にすぎないのだし、功を松寸に歸して許六句集中から抹殺してよからう。

獅子舞は口から聞くや時鳥 (草刈實)

許六のかうした滑稽的の句は、やつぱり理窟つばい所があつて、どうも飄逸味に乏しい。これも彼の性格に基くのであらう。

卯の花に芦毛の馬の夜明哉 (炭俵)

「韻塞」の甲路紀行によれば、元祿六年五月六日許六が江戸を立つて歸郷の途についた時の吟であるといふ。許六は取合の外に曲輪といふ事を論じた。それは句の題材を案すべき範圍に關する論で、それについて許六はかう言つた。

曲輪の内より求めて新らしき事なし。たまく残りたる物も同日隣家の者と同題を案する時、同じ曲輪なれば残りたる物にひし〜と尋ね當るべし。道筋變らざればうたがひなし。曲輪を飛び出て案じたらんは、親は子の案じ處と違ひ、子は親の作意と格別ならん。(「旅寢論」による。「青根が峯」にも同様の論が出てゐる。)